

に當て、右、左を押し掌を仰ぎ、其餘の九百八十二手は、皆手中に於て、各種種の器械等の印を執り、或は單に手印を結すること皆各同じからずと云へる是れなり。

一面十二臂印契像 是れ千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經卷上に明す所なり。但し現大藏中の千眼千臂經には、次に畫像の法を説く、謹て梵本を案ずるに、像を造るに皆白疊を用ゆ。廣十肘、此土の一丈六尺、長二十肘、此の土の三十二尺、菩薩身は檀金色に作り、面に三眼あり。一千臂ありて、一一の掌中に各一眼ありとあるのみにして、此の下亂脱ありて各臂の印契を説かざれども、阿婆縛抄に援引する所の千臂經には、今の各有一眼の文を承けて、正面の身に十二臂あり。及び左右兩傍に惣じて一千臂あり。中の十二臂、一手は鐵劍を把り身と齊しくし、一手は蓮華の莖を把り、亦劍の如く長くし、一手は滅罪印を把り、一手は澡灌を把り、一手絹索を把り、兩手は合掌して心に當て、又一手を申べて下に向けて施如意手とし、更に一手は無盡の寶を出して貧人に施し、又一手は甘露を出して餓鬼に施す。十二手の中に於て、各各物を把る作法、衆生を拔濟するに擬す。菩薩の一千臂手、復各各大作印を執ると云へり。

千頭千手千足像 阿婆縛抄に、千頭千手千足觀音之れ有り、三井に祕藏する本尊なり。宇治の御經藏に之れ有り云云とあり。

眷屬 現圖胎藏界曼荼羅虛空藏院の千手千眼觀自在菩薩は、婆蘇仙、功德天(即ち吉祥天)を以て眷屬となす。

二十八部衆 千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經、千手觀音造次第法儀軌に具に其名を列す、一に密迹金剛士、二に烏芻君荼鴦俱尸、八部力士賞迦羅、三に魔醜那羅延、四に金毘羅陀迦毘羅、五に婆馱婆樓羅、六に滿善車鉢眞陀羅、七に薩遮摩和羅、八に鳩蘭單吒半祇羅、九に畢婆伽羅王、十に應德毘多薩和羅、十一に梵摩三鉢羅、十二に五部淨居炎摩羅、十三に釋王三十三、十四に大辨功德婆怛那、十五に提頭賴吒王、十六に神母女等、十七に毘樓勒又、十八に毘樓博又王、十九に毘沙門王、二十に金色孔雀王、二十一に二十八部大仙衆上首伊舍那神、二十二に摩尼跋陀羅、二十三に散脂大將弗羅婆、二十四に難陀跋難陀婆伽羅、伊羅鉢、二十五に修羅、乾闥婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、二十六に水火雷電神、二十七に鳩槃荼王、二十八に毘舍闍なり。但し京都三十三間堂安置の尊像並に佛像圖彙に出す所は、今説と稍相異なる所あり。

第三節 十一面觀音

十一面觀音 梵名は瞋迦娜舍目佉 *Ekādśaśanukha*. 此の觀音頭上に十一面を現ず。是れ十一品の無明を斷ずることを表すと云ふ。其の形像に又二臂像、四臂像等の別あり。

四臂右二手施無畏念珠左二手蓮華軍持等を持する像 十一面觀自在菩薩心蜜言念誦儀軌經卷上に「堅好無隙の白檀香を以て、觀自在菩薩の身を雕す。長さ一尺三寸、十一頭、四臂に作す。右邊の第一手は念珠を把り、第二手は施無畏にす（掌を揚ぐるなり）。左の第一手は蓮華を持し、第二手は軍持を執る。其の十一面の當前の三面は寂靜の相に作り、右邊の三面は威怒の相、左邊の三面は利牙出現の相、後面の一面は笑怒の容に作り、最上の一面は如來の相に作す。頭冠の中には各化佛あり」と云へる是れなり。補陀落海會軌の像は亦之に同じ。十卷抄阿婆縛抄等に其の圖を出せり。

胎藏界曼荼羅蘇悉地院の十一面觀自在菩薩 亦今の如き四臂像なり。諸説不

同記第六に依るに「現圖、一髻羅刹の左に在り。十一面あり、正面の兩邊に各面あり。次上に五面、以上に三面なり。四臂あり、右手は掌を豎て无名指を屈す。或圖は掌を豎て施無畏の如くす。次手は下げて掌を仰ぎ垂れ、頭中名指を屈して數珠を執る。左手は頭指を屈して蓮を執り、次手は下げて掌を仰ぎ垂れ、四指を屈して澡瓶を執るとある是れなり。

二臂右手施無畏、左手に瓶中蓮あるを持する像 陀羅尼集經第四に「白栴檀を用て十一面觀世音菩薩の像を作る（中略）。十一面を作す。當前の三面は菩薩面に作り、左廂の三面は瞋面に作り、右廂の三面は菩薩面に似て、狗牙上出す。後に一面あり、當に笑面に作すべし。其の頂上の面は當に佛面に作すべし。其の十一面、各華冠を戴く。其の華冠の中に各各一の阿彌陀佛を安ず。其の像、左手は一の澡罐を把り、其の澡罐の口に一の蓮華を挿む。右臂は垂下し、其の右手を展べて以て瓔珞を申き、施無畏手にすと云へる是れなり。十一面觀世音神呪經の説之に同じ。阿婆縛抄に出す所の二臂像は蓋し此の説に契へり。

二臂左手蓮花軍持を持し、右手數珠を懸け施無畏の像 十一面神呪心經に「堅好

無隙の白栴檀香を以て觀自在菩薩の像を刻作す。長け一磔手半とし、左手は紅蓮華軍持を執り、右臂を展べて以て數珠を掛け及び施無畏手に作す。其の像、十一面に作す。當前の三面は慈悲の相に作し、左邊の三面は瞋怒の相に作し、右邊の三面は、白牙上出の相に作し、當後の一面は暴惡大笑の相に作し、頂上の一面は佛面像を作すとあり。十卷抄に出す所の二臂像は即ち此の説に由りて畫く所なり。但し是の文の左右手の印契は、文點の如何に依りては或は四臂像にも判讀し得べきものなるが如し。若し四臂像とせば、前出の十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經の説に同じ。

二臂左手蓮花軍持、右手に錫杖を持する像 大和長谷寺の觀音の如き是れなり。十卷抄に、世間流布の二臂の像は、玄奘の譯せる經に依るなり。陀羅尼集經にも亦二臂を説く、具に經の如し。長谷寺の觀音は、左手の持物は常の如くなれども、右手には錫杖を執れり」とあり。

十二面觀音 是れ菩薩正面の上に頂上十一面を安ずる時、本面を加へて十二の數あり。之に依て希には十二面觀音と稱せられしことも無之には非ず。又古來

實際の造像に當りて、其の面數を十一にせるものと十二にせるものとの兩様あり。又其の面の取付様に就きても胎藏界曼荼羅の圖像の如く、本面に三面、其上に五面、其の上に三面と高く之を重ね、又十卷抄等所載二臂像、四臂像の如く、正面の上六面、其の上に四面、更に其の上に一面を安ぜりあり。又阿婆縛抄所載四臂像の如く、正面の上に五面、其の上に三面、更に其の上に一面を安ぜりあり。又同二臂像の如く、正面の上に五面、其の上に五面、更に其の上に一面を安ぜりあり。又本正面の上横布して前左右後に十面を安し、上に一面を安ぜりもあり。其の作法必ずしも一樣ならず。又頂上の化佛の如きも、普通の像は略して、唯一化佛を安ずりあり。或は具に經軌に依りて、十一面各頭に一一之を安ずりもありて、其の間種種不同ありと知る可し。

第四節 馬頭觀音

馬頭觀音 梵名は何耶揭哩嚩^{He Ya Ge Li Va}。又大持明王、馬頭明王とも云ふ。頭に馬頭を現じ給ふ。是れ蓮華部の教令、輪なり。其の形像に、三面四臂像、三面八臂

像、一面二臂像、四面二臂像、四面八臂像等の數種あり。

三面二臂像(又一面四臂像、又三面四臂像) 是れ胎藏界蓮華部院の馬頭觀世音菩薩なり。諸説不同記第三に依るに、現圓、大明白身の右に在り。通身赤色なり(山圖は赤黄色)。三面三目(或圖は左右の面無し)。一忿怒の形を作し、上齒、下唇を咬み、兩牙上出す(山圖は口を開て笑ふの狀をなす)。頭に金線冠あり、冠繪無し(或圖は寶冠に繪あり、二端屈曲飛颺す)耳環を著く、環に金珠子あり。額に坐化佛あり。頂上に白馬頭出現す。兩手合掌して頭指を屈して甲相合し、其の无名指外に又す(或圖は、四臂にして兩手印を作すこと前の如し。右一手は臂を屈して前に在り、手臂を外に向け、内に三股鈎の繪を著けたるを執り、左の一手は、臂を垂屈し、掌を堅て外に向け、頭中無名指を屈し、其の小指は少しく屈して而も合蓮を執る(山圖も亦四臂なり。二手は合掌して、頭名指を屈して相合し、印の頭を下に向けて心に當て、右は鏘左は數珠をとる)。天衣を被、臂釧なし、青珠鬘を著く、腰帶の左端、脛上より外に出て垂る(或圖は天衣無く、帶は常の如し)。脚環を著け、右膝を堅て、左足の指は還て左に向け、又四指を屈す(二圖は、右足にて左趺を踏む)と云へり。

一面二臂鉞斧及び蓮華葉を持する像 不空羼索神變真言經第九に、馬頭觀世音菩薩、左手に鉞斧を執り、右手に蓮華莖葉を持し半跏趺坐すとあり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

一面二臂蓮華及び軍持を持する像 大妙金剛大甘露軍荼利焰鬘熾盛佛頂軌に「馬頭金剛明王は、碧色にして赤色の光明を放ち、右手を以て高く頂上に於て横に一蓮華を把りて打勢を作し、左手は軍持を把ると云へる是れなり。

一面二臂棒及び蓮華を持する像 其の經軌の説を詳にせず。立像にして、右手に棒を持し、左手に蓮華を執るもの、其の圖、覺禪鈔に出づ。

一面二臂左手施無畏右手に蓮華を持する像 覺禪鈔に、身青色にして、右手は蓮臺に赤蓮華を盛れるを取り、左は施無畏にすとあり。

四面二臂右手施無畏左手蓮を持する像 陀羅尼集經第六に、馬頭觀世音像、其の像の身の高さ如來の一搦手、四箇の觀喜の面を畫作す(中略)左手に蓮華を把り、肘を屈して上に向け、拳は髀前に在り。右臂は垂下して五指を皆申べて施無畏手とすとあり。

四面二臂蓮華及び眞陀摩尼を持する像 陀羅尼集經第六に、其の菩薩の身は、長さ佛の一搦長短正當、人の一肘を以てす。總じて四面あり、中の菩薩の面は極めて端正ならしめ、慈悲の顔に作す、顔色赤白、頭髮純青なり。左邊の一面は、大瞋怒に作す、黒色の面、狗牙上出し、頭髮を豎てしめ、火燄の色の如くす。右邊の一面は、大笑顔に作す。赤白端正にして菩薩の面に似て、頭髮は純青なり。三面の頭上には、各天冠を戴き、及び耳端を著く、其の天冠の上には一化佛有りて結跏趺坐す。中面の頭上には碧馬頭を作し、仍て口を合せしむ。菩薩の頸下には寶瓔珞を著く。項背に圓光あり。數重色に作す。左手は臂を屈して、手を乳前に當てて紅蓮華を把る。其の蓮華は菩薩の頭と齊しくし、正しく左膊に臨む。其の華臺の上に一化佛を作す、緋袈裟を著けて結跏趺坐し、項背に光あり。右手は掌を仰ぎて五指皆伸べ、臂肘を平屈し、其の手掌に眞陀摩尼唐に如意珠と云ふを擊く。其の團圓にして白色を作すが如くし、赤色の光燄、其の珠を圍繞す。其の右手に於て、正しく珠下に當て、種種の寶を雨す。其の左膊の上には、弊耶迦囉者摩唐に虎皮と云ふを著くること、祇支を著くるが如くす。右の腋下に當りて皮を掩ふて帶を結し、更に虎皮を用て、其

の膀上に縵す、以外臂釧天衣裙等、皆餘處の畫菩薩法の如しと云へる是れなり。何耶揭唎婆像法に亦此の説あり。其の圖載せて覺禪鈔に在り。

四面二臂右手施無畏左手蓮華を把る像 其の説何耶揭唎婆像法に出づ。

四臂像二種 現圖胎藏界曼荼羅蓮華部院の馬頭菩薩は三面二臂像なるも、山圖即ち叡山所傳の本は、三面四臂鏃及數珠を持し、或圖即ち圓覺寺宗叡所傳の本は、一面四臂にして三胎鉤及び蓮を持することは、諸説不同記の中に明すが如し。

三面四臂二手結印左手施無畏右手鏃斧を持する像 三面三目四臂にして、定慧二手印契を結し、左第二手は施無畏にし、右第二手は鏃斧を持す。是れ即ち補陀落海會軌の説なり。

三面四臂二手結印左手蓮華右手鏃斧を持する像 大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記品に、四臂馬頭菩薩、二手は根本印を結し、右手は鏃斧を持し、左手は蓮華を執り、丁字に而も立ち、忿怒の相を作すとあり。其の圖覺禪鈔に出づ。

三面八臂像 大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法に、馬頭明王、而も三面あり、六臂各器械を執る。左上手は蓮華を執り、一手は瓶を執り、一手は

楯を執りて心に當て、二手は印契を結す。右上手は鉞斧を執り、一手は數珠を執り、一手は索を執る。輪王坐して蓮華中に在り、大忿怒の相、極惡猛利の勢を現すとあり。覺禪鈔に、以三井藏本圖之云云と題して掲ぐる所の圖は、印契持物此の説に同じ、但し水牛を以て座と爲し、不動及び、矜羯羅を以て侍者と爲せり。

四面八臂水牛に坐する像 聖賀野紇哩縛大威怒王立成大神驗供養念誦儀軌法卷下に、應當に一の金銅の威怒王の像を鑄すべし、隨意に大小にし、其の像の形、四面八臂を現す。四口毎に上下の利牙出現し、八手に金剛器械を把る。正面の頂上には一の碧馬頭を現す。頭髮は螺焰の如くにし、大暴惡の形なり。青水牛に乗ず。其の牛背に蓮華の形あり、其の華形の上に而も蹲坐すとあり。覺禪鈔に出す所の八臂像、青水牛に乗ず。但し牛上蓮華形無きを異とす。

四面八臂盤石に坐する像 聖賀野紇哩縛大威怒王立成大神驗供養念誦儀軌法卷下に、大威怒王の像、總して四面あり、皆忿怒にして、四口毎に狗牙上下に出現し、頭髮微堅して火焰の如し、四面の頂上には、各天冠を戴き、及び耳瑠を著く。其の天冠の上に化佛ありて結跏趺坐す。中面の頂上には碧馬頭を作し、頂下には諸寶瓔珞

を著く、身色赫奕として日輪の如く、遍身の火焰は劫災の火に逾へたり。八手あり、左右の二手は根本馬口の密印を結し、右方の一手は銳劍を執り、左方の一手は金剛棒を執り、右方の一手は金剛鉞を執り、左方の一手は金剛寶輪を執り、右方の一手は施無畏にし、左方の一手は念珠を執り、寶盤石上の青蓮華の臺に安坐す。其の盤石山の色は赤黄青色にして、八手の腕上毎に各皆寶釧を作すとあり。其の圖十卷抄第六に出でたり。

第五節 准提觀音

准提觀音 准提 ^{サハヤ}Cundī は梵名。又准泥佛母 ^{クンデハガバハチ}Cundībhagavati。七俱胝佛母 ^{サプタコト}Saptakoṭībuddhamātṛ と稱す。俱胝は億數、是れ蓮華部の佛母にして、胎藏界曼荼羅遍知院に在す。其の徳大なるが故に即ち其の名あり。形像は普通十八臂なれども、稀に八臂像等あり。

十八臂像 諸説不同記第三に依るに、現圖、佛眼の右に在り、身淺黄色にして、冠の額上に當て青珠貫を垂る、或圖は無し、十八臂あり。寶冠中に於て一化佛あり、或圖

冠中に青寶を置く。臂に瓔珞を著け、白紗を身に絡ふ、疑らくは縮穀衣歟。其の腕に絡へる者未だ詳ならず、勘ふべし。或圖、花鬘、青珠鬘を著く、右手は掌を豎てて小指を微しく開き、一手は掌を豎てて無名指を屈して心に當つ、山圖は中指を屈す。一手は臂を屈して拳を豎て右に向て劍を持ち、劍の端を上に向く。一手は臂を垂れて掌を豎て、右に向て頭指、小指を舒屈し、大中名を以て數珠鬘を執る、山圖は三指を持す。一手は右に向て斧を執る、或圖は拳に作す、山圖は劍を執る。一手は掌を仰ぎ右に向て圓青珠あり。一手は臂を舉屈し、掌を豎て中無名小指を屈し、頭指を以て五股杵を挂堅す、或圖は大中名小指を屈し、山圖は寶を掌にす。一手は臂を舉げて外に向て、花鬘を奉持し、山圖は三指戟を持す。一手は臂を垂れて拳を豎て右に向て、或圖は右に向て斧を持す。左手は開敷紅蓮を執持し、或圖は小指を豎て、山圖は掌を豎て頭中指を屈して之を執る。一手は掌を仰ぎ大名相捻して心に當て、或圖は大中相捻し、山圖は掌を仰て指端を垂下す。一手は掌を仰ぎて指頭を左に向て、紺色の瓶の口に紅蓮を挿めるを持し、或圖は蓮無く、山圖は日輪を持す。一手は臂を下して左に向て澡瓶を執持す、山圖は輪を執る。一手は臂を下して掌を豎て

幢を持す。一手は拳を豎てて左に向て索を執る、或圖は盤索を執持し、山圖は鈴を持す。一手は拳を豎て左に向て頭指を申べて輪臍に挂ふ、或圖は拳を仰ぎて頭指にて輪を挂へ、山圖は索を執る。一手は臂を舉屈し、拳を豎て、小指を申べて商法を持す、或圖は掌を仰ぎ外を指し、左に梵篋を持す、疑らくは悞り歟、山圖は幢を持す。一手は臂を舉屈し、掌を仰ぎて梵篋を執り、其の小指を申ぶ、或圖は申べず。紅蓮上に結跏坐すと云へり。又七俱胝佛母所說准提陀羅尼經に、其の像、面に三目あり、十八臂あり。上の二手は說法相を作し、右二手は施無畏に作し、第三手は劍を執り、第四手は寶鬘を持し、第五手は俱緣果を掌にし、第六手は鉞斧を持し、第七手は鈎を執り、第八手は金剛杵を執り、第九手は念珠を持す。左の二手は如意寶幢を執り、第三手は開敷紅蓮華を持し、第四手は軍持を持し、第五手は絹索、第六手は輪を持し、第七手は商法、第八手は賢瓶、第九手は般若梵夾を掌にす。蓮華の下に池水を畫き、池中の難陀龍王、鳩波難陀龍王あり、蓮華座を拓すとあり。七俱胝佛母准提大明陀羅尼經亦此の説に同じ。同じ十八臂像と雖も異説あるを知る可し。十卷抄、阿婆縛抄等に其の圖を出せるは、蓋し軌の説に依りて畫けるものなり。

八臂像 阿婆縛抄第六十七に、寶積房阿闍梨の許に八臂の准胝之れ有り。立像にして頂上に化佛之れ有り。二手は合掌、左の次手は蓮花、次に索、次手は掌を外に向け指末を下に垂る。右次手は錫杖を執り、次に白拂、次手は左の如し。眞偽知り難し、諸軌末に云ふ八臂、山階寺南圓堂の不空羅索に相似たりとあり。

覺禪鈔准胝の卷に亦八臂像一圖を載す。其像、蓮華上に結跏趺坐し、冠に化佛あり。右第一手は施無畏、次手三鈷を執り、次手は鈎を執り、次手は舒べて施願印を作す。左第一手は蓮華を執り、次手は輪を執り、次手は索を執り、次手は軍持を持せり。蓋し案ずるに七俱胝佛母准提大明陀羅尼經に准提求願觀想法を説きて、若し不二法門を求めば、應に兩臂を觀すべし、若し四無量を求めば、當に四臂を觀すべし。若し六神通を求めば、當に六臂を觀すべし。若し十波羅蜜圓滿を求めば、當に十臂を觀すべし。若し如來普遍廣地を求めば、應に十二臂を觀すべし。若し十八不共法を求めば、應に十八臂を觀すべし。即ち畫像法の如く觀するなり。若し三十二相を求めば、當に三十二臂を觀すべし。若し八萬四千の法門を求めば、應に八十四臂を觀すべしとあり。之に依るに准提觀音に二臂乃至八十四臂像ありても然るべ

きが如しと雖も、普通世に流布するは一に十八臂像のみなりとす。

第六節 如意輪觀音

如意輪觀音 梵名は眞陀摩尼 Cintamani。此の菩薩は如意寶珠の三昧に住して法輪を轉じ、能く世出世の衆生を利益し給ふが故に即ち其の稱あり。胎藏界曼荼羅の中には蓮華部院に在す。形像は六臂像の他、二臂像、四臂像、十臂像、十二臂像等あり。其の中に就きて、

六臂像 即ち胎藏界曼荼羅蓮華部院の形像は、諸説不同記第三に、現圖、大吉祥大明の左に在り。通身黄色にして、冠に化佛あり、耳に環珠を著く。六臂あり、右手は掌を豎側し、少しく小指を開きて、頰側を承け、頭手に就き、次手は掌に青寶の光焰あるを持って心に當て、次手は、臂を申べて、右膝の上に置き垂下して、内に向け、頭中名指を屈し、少しく小指を屈し、念珠鬘を執る、或圖は小指を申ぶ。左手は臂を申べて垂下し、指頭を左に向けて、金山上に按ず、其の金山は左膝の後に在り。次手は臂を屈して、前の腋下より之れを出し、掌を豎側し、頭中指を屈して、開蓮を執り、次手は肘

を堅て掌を仰ぎ、中名小を屈して其の頭指を申堅し、金輪の齊を柱ふ(或圖は拳を仰ぎ、頭中指を屈申し、頭指にて之を柱ふ)。右膝を堅て左趺の上を踏み、紅蓮華に坐す(或圖は白蓮)。青珠鬘を繫く(或圖は華鬘を繫く)と云へり。觀自在菩薩如意輪瑜伽、觀自在菩薩如意輪瑜伽法要、攝無礙經、如意輪菩薩觀門儀註秘決等に明す所の像の印契等、亦今に同じ。其の六手は、六道を表し、又六觀音を表すとも傳へらる。普通世に流布せらるる六臂像は、皆此の像なり。其の圖、十卷抄覺禪鈔、阿婆縛抄等に皆之を出せり。不空羂索神變真言經第九に明せる六臂像の説は、手掌持物の次第を雜亂して説くと雖も、是れ亦恐らくは、今の普通の六臂像に同じきものなる可し。

六臂像別圖 是れ金輪咒王經の説に依ると傳ふるもの。其の像、左上手は開敷蓮上如意寶、次手は天磬、次手は紅蓮華を執り、右上手は、跋折羅、次手は降魔の印、次手は臍に當て捻花の勢をなす。其の圖載せて一本の覺禪鈔にあり。

二臂右手施願左手摩尼を持する像 大聖妙吉祥菩薩說除災教令法輪、又熾盛光佛頂軌と云ふに、次に觀自在を明さば、亦如意輪と號す、左は摩尼珠を掌にし、慧は舒べて施願の印をなすと云へる是れなり。

二臂右手說法印左手蓮花を持する像 如意輪陀羅尼經に、菩薩、左手は開蓮華を執り、其の臺上に當りて如意寶珠を畫く。右手は說法相に作すとあり。

二臂左手蓮華右手摩尼を持する像 如意輪蓮華心如來修行觀門儀に、如意輪大蓮華如來、狀貌黃金色にして、右手は當に如意摩尼寶を捧持すべし。左手は當に金色の大蓮華を執持すべしとあり。

二臂左手蓮上寶右手摩尼を持する像 覺禪鈔等に引く所の金輪咒王經具に觀自在菩薩如意摩尼轉輪聖王金輪咒王經と云ふ。今傳ふる所の錄外儀軌中に如意寶珠轉輪秘密現身成佛金輪咒王經一卷あれども、此には如意輪の像法を説かず、蓋し今と別本なり)に明す所、即ち文に、菩薩、左手に一の寶蓮華を執る、上に寶珠あり、珠に火焰あり。右手は臂を屈して乳房の下に在り、掌を仰ぎて如意寶珠を把ると云へる是れなり。其の圖、載せて十卷鈔覺禪鈔、阿婆縛抄等に在り。

二臂右手鈎杖左手羂索を持する像 如意輪蓮華心如來修行觀門儀に、如意輪蓮華心明王、其の狀淡紅色にして、華を申ぎて瓔珞と爲し、種種而も嚴飾し、右手に鈎杖を把り、左手に羂索を持すとあり。

二臂左手與願右手蓮華を持する像 覺禪鈔觀音部如意輪の卷の裏書に「石山燒亡の時に像之を拜見す。左手は與願にして膝上に安じて足を垂れ、右手には蓮華莖三枝を持す。一枝は未開敷、今一枝は葉、或は上に寶あり、流布の本には珠無之」と云へり。但し此の石山寺の像に就き、十卷抄に引く所の有人の説には、世の多くの圖は、左持蓮花、右說法印之像に造る。今石山寺の如意輪是れなり」とあり。

二臂施願無畏の像 是れ我國往古の造像に見る所なり。十卷抄第六に、昔より造畫する所の二臂の像は、皆右手は施無畏に作し、左手は膝上に於て與願印を作し、右足を垂下し、磐石上に坐す。大和國龍蓋寺の丈六如意輪像亦之に同じ。東大寺大佛殿の左方如意輪亦之に同じ、左足を垂下す。但石山寺燒亡の時、寺僧之を拜見す。左手は與願に作し、膝上に安じて垂下す。右手には蓮華を持し、花上に如意寶珠を安ず。其の花莖三枝に分る、一枝は未開花、今一枝は荷葉なり」とあり。其の施願無畏の像は、十卷抄覺禪鈔阿婆縛抄等、俱に之を出せり。

四臂像 是れ覺禪鈔等に引く處の金輪呪王經の説なり。其の覺禪鈔に出す所の圖像は、左第一手開敷蓮を執り、次は舉げて如意寶を掌し、右第一手は掌を堅て頭

大指を捻し、次手は梵篋を持せり。

十臂像 是れ亦金輪呪王經の説なり。其の像、左右手頂上に於て合掌し、次に第二手、左掌は日を把り、右掌は月を持し、次に第三手、左手は如意寶を把り、右手は輪を把り、次に第四手、左手は深罐の口に青蓮を著けたるを執り、右手は跋折羅を執り、次に第五手、左手は呪索を執り、右手は數珠を執る。其の圖、十卷抄覺禪鈔阿婆縛抄等、俱に之を載せり。

十二臂像 是れ亦同じ金輪呪王經の説なり。其の像、上二手頂上に於て合掌し、左第二手金輪を持し、右第二手は跋折羅、左第三手は寶蓮上如意珠、右第三手は五色如意杖、左第四手は歡喜印、右第四手は三股叉、左第五手は深罐、右第五手は施無畏、左右第六手は心に當て自在神通如意神力印を作す。其の圖、載せて十卷抄覺禪鈔阿婆縛抄等にあり。

如意輪曼荼羅中尊の像 其の圖、十卷抄覺禪鈔阿婆縛抄等に掲ぐるものは、二臂右說法、左蓮華上寶珠像を安じ、或は覺禪鈔に載する別圖の曼荼羅には、十臂像を安ず。又十卷抄に載する所の七星如意輪曼荼羅圖の中尊は、六臂像なりとす。

第七節 不空罽索觀音

不空罽索觀音 梵名は阿母伽跋舍 *Amoghahāra*。大悲の罽索を以て能く一切衆生を拔濟し諸願を満足せしめ給ふが故に即ち其の稱あり。胎藏界曼荼羅蓮華部院に在す。形像は、四臂像又は八臂像の他二臂像六臂像十臂像十八臂像三十二臂像等あり。其の中

三面四臂數珠深瓶開敷蓮及び罽索を持する像 胎藏界曼荼羅蓮華部院の像は、諸説不同記第三の説に依るに現圖水吉祥の左に在り冠中に化佛あり耳環鈴を著く。四手三面にして面に三目あり。右邊の面は青色左邊の面は黒色なり(二圖は三面同じく肉色なり)。鹿皮衣を著く(或圖は袈裟を被る)。右手は臂を屈して掌を堅て頭中指を屈して數珠を執り(或圖は掌を側堅して無名指を屈し山圖は四指を屈す)。次手は垂下して脛上に當て中名小を屈し頭指大指少しく屈し頭中指の間に深瓶の頭を執る(或圖は大頭指の間に之を執る)。左手は臂を屈して掌を側堅し頭中指を屈して開敷蓮を執る(或圖は大名を屈して之を執る)。次手は肘を開堅し

掌を仰ぎ指頭を左に向け頭中名指を屈して索を繫著す(或圖は垂下して臍側に當て指端五指を屈し頭指少しく屈して之を執る)黃蓮華に坐すとあり。

三面四臂左二手開蓮華罽索或は數珠右二手說法印或は金剛鎖及び鐺持を持する像 是れ攝無礙經の説に依るものにして左上手に開蓮華次手に罽索或は數珠を持し右上手は說法の印或は金剛鎖を持し次手は鐺持を執る。

三面四臂左二手罽索開蓮花右二手施無畏及び三肋杵を持する像 不空罽索神變真言經第二十一の説。左上手は罽索次手は開蓮右上手は三肋杵を持し次手は伸べて施無畏にす。

一面四臂左二手蓮華深罐右二手施無畏及び數珠を持する像 不空罽索陀羅尼經の説。左上手は蓮華次手は深罐を持し右上手は數珠を執り次手は施無畏を作す。十卷抄及び阿婆縛抄に出す所の四臂像は蓋し此の説に據れり。

一面四臂左二手蓮花瓶及び施無畏右二手施無畏及び數珠を持する像 不空罽索陀羅尼經の説。左上手に蓮花瓶を執り次手は施無畏にし右上手は數珠を把り次手は施無畏にす。

一面四臂二手合掌並に右手蓮華左手絹索を持する像 不空絹索神變真言經第十五の說。右一手蓮華を執り、左一手絹索を執り、左右の次手合掌す。

一面四臂施無畏並に蓮華絹索三叉戟を持する像 不空絹索神變真言經第八第十五の說。一手に蓮華、一手に絹索、一手に三叉戟を持し、一手は掌を揚げ施無畏手とす。

一面四臂三叉戟絹索蓮華及び寶珠を持する像 不空絹索神變真言經第十六の說。一手に三叉戟、一手に絹索、一手に蓮華、一手に如意寶珠を持す。

一面八臂像 不空絹索神變真言經第一に、法の如く不空絹索觀世音菩薩を圖畫す。大自在天の如し。首に寶冠を戴く、冠に化阿彌陀佛あり。鹿皮衣を被、七寶の衣服、珠瓔、環釧、種種莊嚴し、器杖を執持すとあり。蓋し大自在天像は八臂なれば、此の文八臂像の本説なるが如しと雖も、其の印契器杖は、隱密にして明さず。然るに唐以後、上古行はる所の此の不空絹索觀世音の像は、大抵八臂像なり。之に就きて十卷抄第六には、玄奘云、若し能く受持せば、所作の事業、成辦せざるなし（中略）。佛像の右邊に應に復た觀自在菩薩を畫作すべし。大自在天に似て頂に鬘髻あり、首に花

冠を冠し、翳泥耶皮を左の肩より被り、自餘の身分は、瓔珞環釧而も莊嚴を爲す云云。三十卷經の第一卷、大途之に同じ。但し三本の經に但三目八臂と言ひ、八臂の持物を説かず、何に依て畫くべき乎。爰に往古の像を尋ね、證本と爲すべし。昔長岳の右丞相、丈六の像を造られ、其の像を興福寺の南圓堂に安置す。弘法大師之を以て本尊と爲し、不空絹索の法を修行せられ、靈驗揭焉たり。藤氏、今に仰て彼の堂に崇む、故に彼の本に付て畫く可きなり。三目八臂にして、冠中に立化佛あり。眉間の白毫の上に於て豎に一目あり。左右の二手は、合掌して胸に當て、左次手は蓮華を持し、次手は脛膝の上に於て絹索を持し、第四手は與願印を作す。右第二手は錫杖を持し、第三手は跏上に於て白拂を持し、第四手は與願印を作し。諸指を垂れ掌を仰ぎ、左右相對して同印を作し物を持たず。二足は左を以て右の上に安じ、袈裟を着けず。又東大寺絹索院、古京龍蓋寺金堂に、皆三目八臂丈六の不空絹索あり。

金色立像にして、南圓堂の本尊とは、八臂の持物頗る不同あり。又鎮西の觀世音寺に丈六の觀音像三體を安ず。謂はく如意輪を中央と爲し、其の西方に立不空絹索丈六像あり、頭上に十一面あり、身に八臂を具す、其の持物は別に記す。南圓堂の像

を以て本尊と爲さば、玄奘、不空の譯する所の經に依りて修行すべきなり」とあり。其の南圓堂様八臂像の圖は、十卷抄、覺禪鈔、俱に之を出せり。

四面八臂像 持明藏瑜伽大教尊那菩薩大明成就儀軌經第三の説なり。其の像四面八臂、面に三目あり。右第一手は施願印を作し、次手は數珠、次手は絹索を持し、第四手は施無畏印を作す。左第一手は白蓮華、次手は經を持し、次手は拳を作し、頭指を豎て期尅印を作し、第四手は鈎を執持す。

三面六臂蓮華絹索三叉戟及び瓶等を持する像 不空絹索神變真言經第八の説。其の像、正面は熙怡、左面は口を張り、右面は口を合す。一手は蓮華、一手は絹索、一手は三叉戟、一手は瓶を持し、又一手は施無畏の印を作し、一手は掌を掲ぐ。此の圖像は、載せて別尊雜記並に覺禪鈔に在り。

三面六臂絹索蓮華三叉戟鉞斧及び如意寶杖等を持する像 不空絹索神變真言經第二十二の説。其の像、一手は絹索、一手は蓮華、一手は三叉戟、一手は鉞斧を持し、一手は施無畏にし、一手は如意寶杖を持す。

三面十臂像 不空絹索神變真言經第二十一の説。其の像、左右二手は胸に當て

合掌し、右一手は絹索、次手は蓮華、次手は三叉戟、次手は軍持を持し。左一手は如意珠、次手は寶杖を把り、次手は施無畏にし、次手は念珠を持す。

一面十八臂像 不空絹索神變真言經第二十の説。其の像、二手は胸に當て合掌し、二手は胸に當て倒に垂れて合掌し、二手は心下に腕を合し、二手は臍下に絹索印を結し、一手は三叉戟、一手は寶幢、一手は開蓮華、一手は不空梵甲、一手は絹索、一手は金剛輪、一手は施無畏、一手は軍持、一手は寶瓶、一手は寶花盤を持す。阿婆縛抄に、東大寺繡大佛此像也」と註せり。然れば大佛殿西方大織成不空絹索像は十八臂像なりしこと知る可し。

十一面三十二臂像 不空絹索神變真言經第十三の説。其の像、十一面あり。正面は熙怡、左面は大自在天、熾摩王、俱廢天、伊首天、月天の面をなし。右面は那羅延天、水天、俱摩羅天、日天の面を作し、那羅延天と水天との間に風天の半身、大自在天と熾摩王と間に火天の半身あり。三十二手、各諸印を結し、器械を執ると云ふ。

七觀音 以上、聖觀音已下千手、十一面馬頭、准胝、如意輪、不空絹索觀音を七觀音と稱す。是れ我が國中古以後に起れる稱呼にして、經軌に本説あるにあらず。又

六観音と稱することあり。之に二説あり。山門にては聖千手馬頭十一面不空如意輪を以て六観音となし、東寺にては上記六の中不空絹索を除きて准胝を加へて六観音と稱す。之を摩訶止觀所説の六種の観音に配するときは、大慈観音は正観音の所變にして地獄道を救ひ、一説餓鬼道、大悲観音は千手の所變にして餓鬼道を救ひ、一説地獄道、師子無畏観音は馬頭の所變にして畜生道を救ひ、大光普照観音は十一面の所變にして阿修羅道を救ひ、天人丈夫観音は准胝の所變にして人道を救ひ、大梵深遠観音は如意輪の所變にして天道を救ふとも傳らる。

第八節 葉衣観音

葉衣観音 梵名は波羅舍嚩唎 *Palasambhari* 具に披葉衣菩薩と稱す。胎藏界曼荼羅中蓮華部院に在す。形像は二臂像及び四臂像あり。

二臂索及び杖を持する像 是れ胎藏界曼荼羅に出す所、肉色にして左手に索一説數珠、右手に杖を持し、右膝を立てて赤蓮華(一説白蓮華)に坐せり。

二臂如意幢を持する像 覺禪鈔に、實運僧都の云はく、右手に如意幢を持す云云

とあり。其の圖、右手に如意幢を持し、左手は申べて掌を仰ぎ膝に安じ、頭指大指相捻せり。

二臂未開蓮華を持する像 攝無礙經の説、左手は説法印にし、右手には未開蓮を執り、白蓮華に坐す。

二臂索及び如意幢を持する像 阿婆縛抄に、圓堂圖に云はく、肉色にして左手は垂下して索を持し、右手は乳に當て如意幢を持す、左膝を立て、赤蓮華に坐すとあり。

二臂右手施願左手絹索を持する像 阿婆縛抄に、披葉衣經に云はく、尋ね可し、左手は絹索を持し、右手は施願に作す云云とあり。

四臂像 葉衣觀自在菩薩陀羅尼經に、其の像、天女形に作し、首に寶冠を戴く、冠に無量壽佛あり(中略)。像に四臂あり、右の第一手は心に當て吉祥葉を持し、第二手は施願手に作し、左の第一手は鉞斧を持し、第二手は絹索を持し、蓮華上に坐すと云へる是れなり。十卷抄、覺禪鈔、阿婆縛抄等、俱に其の圖を出せり。

第九節 大白衣観音

大白衣觀音 梵名は半拏羅縛悉爾 *Pāṇḍurāśinī* 又白處、白住處、服白衣とも云ふ。胎藏界曼荼羅の中、蓮華部院に在す。形像は皆二臂なれども、其の印契に就きては、種種の相違あり。

二臂右手與願左手蓮華を持する像 是れ胎藏界曼荼羅に出す所の形像なり。胎藏界七集卷上に、白黄色にして、左手に蓮華を持し、右手は與願手なりとあり。

二臂梵經及び絹索を持する像 阿唎多羅陀羅尼阿嚧力品に、聖者半拏羅婆悉爾菩薩を畫く、白衣觀自在母なり、髮亦上に結す中略。左手に棒或は絹索を持し、右手に般若梵夾を執るとあり。其の圖載せて覺禪鈔に在り。

二臂右手揚掌左手未開蓮を持する像 不空絹索神變真言經第八の說。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂左垂手右手蓮華を持する像 不空絹索神變真言經第三十等の說。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂左手施願右手寶珠を持する像 菩提場一字頂輪王經第二の說。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂左手寶鏡右手楊柳枝を持する像

二臂左手念珠右手印文を持する像

二臂右手念珠を持し左手大指無名指を捻する像 其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂印鑰及び楊柳枝を持する像 其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂左手念珠を持し右手にて左手の上を覆ふ像 此の像、唐本に行道觀音の銘ありと云ふ。

二臂左手紅蓮華を持し右手印合曳下持印像

第十節 多羅菩薩

多羅菩薩 梵名は多羅 *Tārā* 眼妙目精、又は度、救度と譯す。胎藏界曼荼羅の中、蓮華部院に在す。形像は二臂なれども、之に亦一二の不同あり。

二臂蓮華を持する像 胎藏界曼荼羅の形像なり。胎藏界七集卷上に、綠色にして羯磨衣を着く、後本は肉色にして羯磨衣を着けず。合掌して青蓮華を持すとあり。攝無礙經、大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記品の說略之に同じ。

二臂合掌像 不空罽索神變真言經第二十一の說。

二臂右手揚掌左手青蓮を持する像 不空罽索神變真言經第八の說。

二臂右手施無畏左手青蓮を持する像 念誦結護普通諸部の說、蓋し前說に同じ。

二臂右手臍上に安じ左手青蓮を持する像 大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記品の說。

二臂青蓮及び吉祥菓を持する像 大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記品の說。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂右手與願左手蓮華を持する像 其の圖、覺禪鈔に出づ。

第十一節 毗俱胝觀音

毗俱胝觀音 梵名は毗俱胝 *Prakṣi*、瞋目又は皺と譯す。胎藏曼荼羅蓮華部院に在す。形像は胎藏界七集卷上には、肉色にして四臂あり、左一手は蓮華の上に梵篋あるを持し、次手は瓶を持す。右一手は施無畏手、次手は念珠を持す。羯磨衣を着け、袈裟を着けず。赤蓮華に座す。額上に眼ありとあり。

第十二節 青頸觀音

青頸觀音 梵名は彌羅健駄 *Milagandhi*、又青頸とも稱す。形像は之に四臂像並に二臂像あり。

四臂像 青頸觀自在菩薩心陀羅尼經に、其の像三面あり、當前の正面は慈悲熙怡の貌に作し、右邊は師子面に作し、左邊は猪面に作す。首に寶冠を戴く、冠に化無量壽佛あり。又四臂あり、右第一臂に杖を執り、第二臂に蓮華を執り、左第一に輪を執り、左第二に螺を執る。虎皮を以て裙となし、黑鹿皮を以て左の膊より角絡して披たり。黑蛇を以て神線と爲し、八葉蓮華上に於て立つとあり。別尊雜記、覺禪鈔等に其の圖を載す。

二臂像 不空罽索神變真言經第九に、青頸觀世音菩薩、左手に蓮華を持し、右手は掌を擧ぐとある是なり。

第十三節 阿麼鉢觀音

阿摩鉢觀音 梵名は阿摩鉢 *Abhavi* 又阿摩提に作り、寛廣又は無畏と譯す。形像は、覺禪鈔等に引く所の觀自在菩薩阿摩鉢法に、觀自在菩薩の像は、波羅蜜形の如く、三目四臂にして、白師子の座に乘じ、頭を左膝の下に向け、首に寶冠を戴き、白蓮華を以て嚴飾す。前の二手は鳳頭の篋を執り、左手の掌に摩竭魚、右の一手に吉祥鳥の白色なるを持す。左足は屈して師子の頂上に在り、右足は垂下す。嚴るに天衣瓔珞を以てし、通身に火焰あり。面貌慈悲ありて左に向く云云とあり。

第十四節 文殊師利菩薩

文殊師利菩薩 梵名は文殊師利 *Manjushri* 又曼殊室利に作り、略して文殊と稱し、妙吉祥、妙德、或は妙音とも譯す。胎藏界曼荼羅中、中臺八葉院の西南葉に居し、又文殊院の主尊たり。金剛界曼荼羅にては、第二院賢劫十六尊中、北方の第一位に在り。而も彌陀四親近の一なる金剛利菩薩は、之と同本誓なりと傳へらる。又眞言の文字の字數の相違に從て、五字文殊、一字文殊、六字文殊、八字文殊等の別あり。又其の頂髻の相違に從て、一髻文殊、五髻文殊の稱を分てり。形像は

胎藏界曼荼羅中臺八葉院の文殊師利菩薩像 は、諸説不同記第二の説に依るに現圖、西南角の蓮葉に在り。通身金色にして童子の相の如く、頂に五髻冠り、金綱一道ありて絞傍す(或圖は冠髻なし)。頂に五化佛あり、餘相は上に同じ。袈裟の角端を肘上に繋けて外に向て垂れ、右手は掌を仰側し、頭中を屈して梵篋を持し、左手は掌を堅て以て大指中指を屈して青蓮華の上に五指杵あるを執る(或圖は拳を返して左彌に當て、青蓮華の上に梵篋あるを執ると云へり)。

同文殊院の文殊師利菩薩像 は、諸説不同記第五に、現圖第二重上院東門の中に在り。身紫金色にして、童子の形像なり。頂に五髻あり。右手は掌を仰ぎて指端を右に向け(或圖は指端少しく之を垂る)。左手は掌を堅て頭中無名指を屈して青蓮華を執る、青蓮華の上に三股杵を堅つ(或圖は蓮上三鈷とあり)。

金剛界曼荼羅十六大菩薩中の文殊師利菩薩像 は、金剛界七集卷下に、左に梵篋を持し、右は拳にして腰に安ずとある是れり。

金剛利菩薩像 は、金剛界七集卷上に、祕藏記に云はく、左手は花上に篋あり、右手は利劔を持すとあり。次に又

五字文殊 とは、又五髻文殊と稱す。此の尊阿羅波左曩の五字を眞言とし、頂に五髻あるが故に其の稱あり。形像は、五字陀羅尼頌に、身色は紫金の如く、妙童子の相を作す。五髻首飾を被り、寶五方冠を冠し、右には金剛劔の上に火焰色を發せるを持し、左手は青蓮の般若梵夾あるを持す。諸妙色の相に住し、身淨月輪に處すとあり。金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩儀軌供養法、金剛頂經曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品等の説之に同じ。是れ比較的普通に行はるる形像にして、阿婆縛抄、十卷抄等に其の圖を出せり。尙ほ覺禪鈔には、此の種の像の外に、左手は蓮華上に三鉢ある持し、右手は掌を舉げて外に向けたるもの。左手は拳にして、臍下に安じ、右手は胸に當て梵篋を持せるもの。左手は拳にして腰に安じ、右手に劔を持せるもの。左手は拳にして腰に安じ、右手は蓮華上に梵篋あるを持せるもの。左手は掌を舉げて胸に當て蓮華上に三鉢あるを持し、右手は掌を舉げて大中名指を屈せるもの。左手は掌を舉げて胸に當て大中名指を屈し、右手は劔を持せるもの等、併せて六圖を出せり。又

八大菩薩曼荼羅經には、曼殊室利菩薩、五髻童子の形、左手に青蓮華を執る華中に

五貼金剛杵あり、右手は施願に作す。身金色にして、半跏して而も坐すと云へり。

一字文殊 又文殊一字、或は一髻文殊と稱す。此の尊、齒_合の一字を以て眞言となし、其の頂一髻なるが故に即ち其の稱あり。形像は、阿婆縛抄に引く所の一髻文殊師利童子陀羅尼經念誦儀軌に依るに、金色にして千葉蓮花の上に半跏して坐し、左手には青蓮華の花上に如意摩尼寶珠あるを執り、右手は指掌に楊柳枝を執持し、外に向て五指を垂下し、滿願の印を作すと云へり。阿婆縛抄等に即ち其の圖を出せり。

六字文殊 又文殊六字と稱す。闍婆計陀那摩の六字を眞言とするが故に即ち其の稱あり。形像は、陀羅尼集經第六に、其の文殊師利の像、蓮華座上に結跏趺坐し、其の右手は說法手に畫作し、左手は正しく胸上に當て仰ぎ著く、其の像、身を畫て童子形に作り、身は黄金色にして、白色の天衣、臍以下を遮し、餘身は皆露し、首に天冠を戴き、身に瓔珞を佩び、臂印劔等、衆事莊嚴すとあるに依る。頂髪は六髻に之を畫く。阿婆縛抄等に其の圖を出せり。

八字文殊 又文殊八字と稱す。唵阿味羅呼劫嘶羅の八字を以て眞言とするが

故に即ち其の稱あり。形像は大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌に、金色にして光明を放ち、師子王に乗じて坐す。智慧劍を操持し、左には青蓮華の華臺に智杵を立てたるを執る。首髻八智の尊、暉光十方に徧しとあり。阿婆縛抄に曼荼羅を載す。其の中尊即ち此の像なり。

釋迦脇侍師子に乗ずる像 陀羅尼集經第一に、身は皆白色にして、頂背に光あり。七寶瓔珞、寶冠天衣、種種莊嚴し、師子に乗ずとあり。此の種の像、古來より畫作又は鏤刻され、遺像頗る多し。

兒文殊 又俗に兒文殊等と稱し、童形にして而も其の莊嚴等普通の菩薩形にあらざる一種の畫像あり。但し是れ頗る近代の人に依りて造作さるるに至りしものなるが如し。

眷屬八大童子 文殊菩薩の眷屬に八大童子あり。所謂請召童子、計設尼童子、救護慧童子、烏波計設尼童子、光網童子、地慧幢童子、無垢光童子、不思議慧童子なり。其の形像は、胎藏界曼荼羅文殊院、並に八字文殊曼荼羅等に出づ。

第十五節 普賢菩薩

普賢菩薩 梵名は三曼多跋捺羅 *Samanthabhadra*。又遍吉菩薩と云ふ。此の菩薩の所有三業普遍賢善にして諸佛菩薩の敬嘆する所なるが故に即ち其の稱ありと云ふ。密家にては、或は是れ金剛薩埵の異名なりとも云へり。胎藏界曼荼羅の中には、中臺八葉院の東南葉、並に文殊院に在す。又金剛界曼荼羅中には、第二院北方第四位に在り。形像は、之に數種あり。

胎藏界曼荼羅中臺八葉院の菩薩像 は、諸説不同記第二の説に依るに、現圖、東南隅の蓮葉に在り、通身肉色、中略、頭に寶冠を戴き、冠に五佛あり。又白繪を繫け、瓔珞、青珠鬘環釧を著け、紺蓮に半跏す。右手は腕を開き、掌を仰側し、名小指を屈し、頭を右に向くと云ひ、胎藏界七集卷上には、肉色、左手は蓮華の上に劍あるを持し、五佛冠を戴き、右手は股印の如くして、仰て外に向くとあり。

同文殊院の菩薩像 は、諸説不同記第五には、現圖、文殊の後の左に在り、右手は堅てて、頭中指を屈し、(兩圖は白拂)。左手は拳を堅てて蓮の上に五股杵あるを持す、(或

圖は掌を側立し頭指を屈して開蓮を執り、山圖は三股戟をとる」とあり。

金剛曼荼羅第二院十六大菩薩中の普賢菩薩像は、金剛界七集卷下に「白肉色にして左は拳にして腰に安じ、右は利劍を持す」とあり。

二臂五鈷杵及び金剛鈴を持する像 成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌經に「普賢大菩薩の身光明皎潔、猶し月殿の如し、五佛冠を戴き、天衣瓔珞、而も自ら莊嚴し、項背に月輪あり、白蓮華王を以て其の座と爲し、右手に菩提心の五鈷金剛杵を持し、心上に按じ、左手は般若波羅蜜金剛鈴を執り、用て胯に安ず」とあり、其圖覺禪鈔に在り。

二臂右手拳印左手蓮上劍を持する像 覺禪鈔に引く所の白蓮華經の説。身淺紫色にして、左手は蓮上に劍あるを持し、右手は拳にして腰を押す。其の像覺禪鈔に出づ。

二臂右手拳印左手蓮上鈎を持する像 攝無礙經の説。身白肉色にして左手に蓮上鈎あるを持し、右手は拳にして膝を押す。

二臂左手揚掌右手劍を持する像 不空罽索神變真言經第九の説。

二臂合掌像 不空罽索陀羅尼經に「普賢菩薩身相端嚴にして、蓮華の色の如し。

寶天冠を戴き、紺髮垂下し、一切の嚴具、其の身を莊嚴し、而も兩臂あり、歡喜の顔状なり、偏に右肩を祖き合掌して觀自在菩薩に對し、前に當て而も住す」とあり。其の像覺禪鈔に出づ。

二臂白拂を持する像 陀羅尼集經第六に「右手に白拂を持す」と云ひ、菩提場所説一字頂輪王經第二に「佛の右邊に應に普賢菩薩を畫く可し、手に白犛の拂を持す」とあり。其の像覺禪鈔に出づ。

二臂左手施願右手劍を持する像 八大菩薩曼荼羅經に「普賢菩薩、五佛冠を戴き、金色の身に、右手は劍を持し、左手は施願にし、半跏して而も坐す」とあり。

釋迦脇侍白象に乗ずる像 陀羅尼集經第一に「右邊に普賢菩薩を畫作す。莊嚴は前の如し、白象に乗ず」とある是れなり。蓋し案ずるに、法華經第七普賢菩薩勸發品に「是の人若しは行、若しは立、此の經を讀誦せば、我れ爾の時に六牙の白象王に乗じ、大菩薩と俱に其の所に詣り、而も自から身を現ず」とあり。是に由りて古來法華三昧を修して悉地成就する時は、普賢菩薩白象に乗じて、行者の前に現前すとせられ、同時に斯く白象に乗じたまへる普賢菩薩の形像は造顯さるるに至りしなり。

第十六節 金剛薩埵

金剛薩埵 梵名は嚩日羅薩怛嚩 Vajra-sattva. 又金剛手菩薩、金剛秘密主菩薩と稱す。金剛を執持し玉ふが故に即ち其の稱あり。或は普賢薩埵とも云ふ。普賢菩薩の一名なりとし、是れ同體の尊、或は普賢は大悲門、金剛手は大智門を表すとせらる。胎藏界曼荼羅に在りては、金剛部主として金剛部院の主位に居し、金剛界曼荼羅に在りては、其の成身會中東方阿閼如來四親近の上首、又理趣會十七尊の主尊たり。形像は

胎藏界曼荼羅金剛部院の金剛薩埵像 は、諸説不同記第四に依るに、現圖、大日尊の左方に當り(或圖山圖は並に淺黄色)第一重第一行中に在り。右手は臂を屈して少しく擧げ、左に向て掌を仰ぎ、指端を垂屈し、横に三古杵を執りて、彌側に當て(或圖は臂を屈し腕上に當りて一胎杵を横ふ)。左手は臂を屈して少しく擧げ、拳を反し胸に當て、頭少しく右に側く(或圖は、面右方に向く)、耳に環鈴を著くと云へり。

金剛界曼荼羅成身會東方月輪中の阿閼佛前の金剛薩埵像 は、肉色にして左手

に鈴を持ち、右手には五股杵を持す。金剛界七集卷上に、肉色にして、鈴杵を持すとある是れなり。

同理趣會の金剛薩埵像 亦之に同じ。又大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅密多理趣釋卷上に、金剛薩埵菩薩、背に月輪あり、五佛冠を戴き、右手に金剛杵を持し、左手に鈴を持ち、半跏して而も坐すとあり。又

聖觀自在菩薩心眞言瑜伽觀行儀軌に、金剛薩埵菩薩、左手には金剛鈴を執りて左の膀上に置き、右手には、五股杵を持して、心に當て跳擲の勢を作す、身は白月の色の如く、頂に五佛冠を戴き、月輪中に坐すと云へり。覺禪鈔に載する所の一圖は、左に鈴右に五股杵を持すること今と同じきも、其の右手跳擲の勢を爲せり。成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌經、並に普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌に明す所の普賢菩薩は、亦之と同尊なり。

又大聖妙吉祥菩薩說除災教令輪に、左方金剛手、身貌白紅色にして、右に仰蓮華の華上に五智を立てたるを持ち、左手は鈴契を持すとあり。覺禪鈔に左手に鈴を持ち、右手は掌を仰ぎ、上に五鈷杵を立てたる一圖を出せり。

二臂白拂を持する像 金剛恐怖集會方廣軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經に「金剛手菩薩身赤白色にして種種の寶瓔珞を著け手に白拂を持し如來を拂ふ勢を作す」とあり。其の像載せて覺禪鈔に在り。

二臂金剛を持する像 八大菩薩曼荼羅經に「金剛手菩薩右手に金剛杵を持し、左手は膀に安ず。身青色にして半跏して而も坐す」とあり。

二臂金剛杵及び白拂を持する像 不空罽索神變真言經第八第十五の說、左手に金剛杵を持し、右手に白拂を把るもの是れなり。

第十七節 五秘密菩薩

五秘密菩薩 金剛薩埵に、欲金剛、觸金剛、愛金剛、慢金剛の四尊を加へて五秘密と稱す。此の五尊、同一蓮華、同一月輪に住せり。形像は、大樂金剛薩埵修行成就儀軌に「五秘密金剛薩埵は、白蓮華臺に坐し、端嚴にして而も處す。形貌は前所成身法の如く、當に大印に住すべし。金剛箭は、赤色にして前に居し、而も弓矢を持す。金剛喜悅は、白色にして右に在り、三昧耶の體を抱く。金剛愛は諸事並に青にして、後に

處して摩竭幢を持す。金剛欲自在は、色黃にして左に居し、二拳各膀に當て、其の頭左に向て少しく傾くとあり。金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法經、普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌、金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌等の說之に同じ。其の十卷抄、阿婆縛抄等に掲ぐる所の圖像は、五尊俱に同一蓮華、同一月輪に住し、其の中尊金剛薩埵は、左手は金剛鈴を執りて膀上に着き、右手は心に當て五鈷杵を執りて跳擲の勢を爲し、前右欲金剛は、二手を掲げて横に箭を持し、後左觸金剛は、二手を以て金剛薩埵を抱き、後左愛金剛は、左手に摩竭幢を持し、前左慢金剛は、二手拳にして膝に當つ、其の左拳には金剛鈴を持せり。又

別圖には、前右欲金剛は左に弓、右に箭を持し、後右觸金剛は二手を心に當て五鈷杵を抱き、後左愛金剛は左を揚げ右を舒べて二手にて摩竭幢を取り、前左慢金剛は二手を拳にして膀に安ぜり。又

別圖あり。金剛薩埵前に居し、餘の四金剛は皆其の後に在り。其の座位前記の二圖と少異あり。即ち欲金剛は後方左に在りて箭を持し、觸金剛は後方右に在りて金剛薩埵を抱き、愛金剛は欲金剛の前方左に在りて摩竭幢を持し、慢金剛は觸金

延命觀音 攝無礙經の説に依れば、此の尊を延命觀音と稱す。形像は、身深黄色にして二十臂あり。左十手は次での如く、寶珠、寶劍、金輪、金剛槩、榜排、金剛鐸、金剛鈴、大蓮華、數珠、拳印を作し、右十手は次での如く、戟、銷、金剛拳、化佛、金剛寶、寶鏡、金剛索、施無畏、跋折羅、五鈷杵、跋日羅を持し、百千種の瓔珞妙鬘等、其の身を莊嚴し、頗頭摩華に住すと云へり。

白象に乗る像 胎藏界曼荼羅の大安樂不空眞實菩薩等は、蓮華を以て座となすも、十卷抄に掲ぐる所の形像は、四白象を以て座物となせり。其の像法の依據詳かならざるも、覺禪鈔には、口決に云はく、此の尊は、通身黄金色にして、五智の寶冠を著し、廿臂を具足し、而も十六尊並に四攝の三摩耶標幟を執持す(右方に薩王、愛喜、寶光、幢笑、鈎索。左方に法、利、因、語、業、護、牙、拳、鐮、鈴)。殊妙の輕衣を破り、鬘、縵、緩帶あり、千葉の寶華に坐す。華下に四大白象あり、其の象外方に向て立てり。象の頂上に四大天王あり、外方に向て誓を立て、世界を護る云云(中略)。又云はく、金剛壽命薩埵智身は、五智聚集して而も大樂金剛薩埵となり、四波羅蜜、十六大菩薩を以て而も廿臂と爲し、五分法身を以て寶冠と爲すとあり。是れ普通に普賢延命法の本尊として用

ひらる所なり。

第十九節 彌勒菩薩

彌勒菩薩 彌勒とは、梵名味怛隸野 Maitreya の略。慈氏と譯す。又阿逸多 Ajita 菩薩と稱し、無能勝と譯す。是れ本と菩薩の姓なりと云ふ。釋尊に從て、補處の菩薩として來世成佛の授記を蒙り、現に兜率天に在りて衆生を攝化し、今後五十六億七千萬歳の後は、再び此の土に下生し、龍華樹下に成道して、三會の説法に釋迦佛の化益に漏れたる一切の衆生を濟度せしむべしと傳へらる。此の尊、胎藏界曼荼羅にては、中臺八葉院の東北葉に在す。金剛界曼荼羅には、第二院賢劫十六尊中の東方に居し、又西方四親近の一なる金剛因菩薩は、之と同本誓なりと云ふ。形像は、二臂像あり、三十臂像あり、又彌勒佛として佛形のものも之れあり。中に就きて

胎藏界曼荼羅中臺八葉院の彌勒菩薩像 は、諸説不同記第二に、現圖、東北隅の蓮葉に在り。右手は拳を以て腰に當て、蓮上に深瓶を置きたるを執り(或圖は拳を豎つ)。左手は掌を豎て外に向て少し側く(或圖は、名小指を屈す)裙脚に纏ふて坐すと

云へり。

金剛界曼荼羅賢劫十六尊中の彌勒菩薩像 は、金剛界七集卷上に、身、白肉色にして、右手は賢瓶を持ち、左手は仰て腰に當つとあり。

金剛因菩薩像 は、金剛界七集卷上に、身色、白肉色にして、左は拳に作して腰に安じ、右手は金輪を持すと云へり。

二臂骸嚙左曩佛塔を持する像 慈氏菩薩略修愈識念誦法卷下に、慈氏の像、一幅の絹を取りて圓明を畫き、圓明の中心に於て、本尊慈氏如來を畫く、結跏趺坐して三莽地に入れる形の如くし、兩臂あり、又手掌より一の寶蓮花臺を持ち、蓮華臺上に於て、骸嚙左曩佛塔を畫き、佛塔上に於て大日如來を畫く。通身寶光あり、皆光中より又諸佛世尊を化出すること鉢羅護佛母菩薩像の如し、諸佛を以て光と爲すとあり。其の像載せて覺禪鈔にあり。

二臂紫蓮華上錘持を持する像 攝無礙經等の説。左手に紫蓮華上錘持あるを持し、右手は舒べて膝を摩する相を爲すものは是れなり。但し覺禪鈔に出す所の圖は蓮上に三角智印を著き、軍持瓶なし。

二臂左手揚掌右手施願の像 其の像、左手は掌を揚げて頭指無名指相捻し、右手は舒べて施願の印を爲す。

二臂三鉢及び獨鉢を持する像 覺禪鈔に引く所の吽迦陀野軌の説。其の像、左手は三鉢を執り、右手は掌を揚げて獨鉢を持す。法音輪、大妙相の二菩薩を侍者と爲す。其の圖覺禪鈔に出づ。

二臂右手施無畏左手軍持を持する像 大孔雀明王畫像壇場儀軌に、慈氏菩薩左手に軍持を執り、右手は掌を揚げて外に向て施無畏の勢を作すと云ひ、八大菩薩曼荼羅經に、慈氏菩薩、金色の身、左手に軍持を執り、右手は施無畏冠中に率觀波あり、半跏坐すと云へり。

二臂左手拳右手軍持を持する像 其の像、載せて覺禪鈔に在り。

二臂右手說法印左手蓮上塔を持する像 是れ曼荼羅の中尊なり。慈氏菩薩略修愈識念誦法卷下に、本尊慈氏菩薩、首に五如來の冠を載く。左手は蓮華を持し、華上に法界塔印を置き、右手は說法の印を作し、結跏趺坐すと云へる是れなり。其の曼荼羅圖載せて覺禪鈔に在り。

二臂左手揚掌右手施願の像 是れ覺禪鈔に掲ぐる彌勒菩薩來迎像の中尊なり。左手は掌を揚げて施無畏の相の如くし、右手は掌を舒べて膝に安じ施願の相の如くす。

三十臂像 慈氏菩薩略修愈識念誦法卷下の説。其の像、身色閻浮檀金色(深赤黄色)にして、首に五佛智七寶の冠を戴き、百寶蓮華上に結跏趺坐し、面貌慈軟にして三十臂を具し、各手は皆金剛拳を作して寶蓮花を執り、其の蓮花上に於て各本契を執る。其の左十五臂は、次での如く法界塔印、七寶金輪、五胎金剛杵、金剛羅索、寶幢幡數珠、寶金剛、如來毫相、如來眼、如來耳根、如來口、如來臍、如意摩尼、如意寶劍、寶師子を執持し、右十五臂は、金剛拳(風幢を舒べて右頬を指す)、三股峨耽羅、金剛鉤、寶螺、七寶宮殿、羯磨金剛、法金剛、如來眉、如來鼻、如來舌根、佛心、如來馬陰藏、如意棒、如意寶鏡、金剛杵鐸を執持せり。其の像、十卷抄覺禪鈔阿婆縛抄等に俱に之を掲ぐ。

佛形彌勒像 彌勒菩薩としての形像は、大抵上記の如し。然るに當來成佛の彌勒尊を已成佛の諸尊と併せて、螺髮にして袈裟を披着せる普通の佛形と爲して造顯せらるること古來より行はれたり。古來彌勒佛と稱せらるるもの、大抵其の像な

り。其の形像は、多くは諸佛通用の施願無畏の形相の像なり。而して其の像は、普通本尊として安置せらるるもあれど、塔中、四方佛の一尊として安置せられたるもの亦其の例多し。覺禪鈔に五圖を載す。

其の一は、右手は掌を揚げて施無畏印の如くし、左手は、心上に當て掌を仰ぐ。圓光中に七佛の形像あり。

其の二は、所謂左手施願、右手施無畏印の像なり。鈔の文に、會坂關の東、關寺の彌勒云云、治安二年^{壬戌}八月十九日安置し奉る、佛師康尙の匠の造なり。大和久米寺之に同じ、通説法印云云。山城國愛宕郡鳥部寺像丈六云云。是れ諸佛に通ずる説法の印なり。坐相を見るに釋迦なり。所謂釋迦は左足を以て右股の上に置く、餘佛は然らずと云へり。

其の三は、天王寺の塔中心の柱の三尊云云と注記せらるる三尊像の中尊にして、其の像、左手は掌を揚げて頭指大指を捻し、右手は掌を舒べて又頭指大指を捻せり。

其の四は、立像にして手印は前の天王寺塔の像に同じ、鈔の文に、豎立石像なり、元興寺金堂の像之に同じと注せり。

其の五は、右手施無畏、左手は臍に當て袈裟角を執るもの、金剛界曼荼羅の不空成就佛と同一像なり。鈔の文に、清水寺の塔北面の像、嘉祥元年辰戌四佛を安置す。康平六年八月二十六日夜之を焼く、但し取出す云云とあり。

第二十節 虚空藏菩薩

虚空藏菩薩 梵名は阿迦含藥婆 *Ākaśa-garbha*。能く一切衆生を利樂して窮渴の相なく、一切能く勝るもの無きが故に即ち其の稱あり。胎藏界曼荼羅の中、虚空藏院の主位に居し、又釋迦院に在りて、釋迦牟尼佛に侍す。金剛界曼荼羅中には、賢劫十六尊の一として、第二院の南方第二位に居し、又寶生如來四親近の一たる金剛寶菩薩は、之と同本誓なりと云ふ。形像は

胎藏界曼荼羅虚空藏院の虚空藏菩薩像 は、諸説不同記第六に、現圖第二重西方上院の中央にあり。首に五佛冠を戴き、右手は臂を屈して劍を持す、劍に光焰あり。左手は腰側に當て拳に作し、蓮上に寶あるを持す、或圖は通身金色にして、左は拳にして腰に又すとあり。

同釋迦院の虚空藏菩薩像 は、右手掌を堅て頭中指を屈して白拂を執り、左手は拳を覆て臍に當て、蓮上に綠珠あるを持せり。

金剛界曼荼羅賢劫十六尊中の虚空藏菩薩像 は、又金剛幢菩薩、又は寶幢菩薩と稱す。金剛七集卷下に、白肉色にして、左は拳にして腰に安じ、右は寶珠を持すと云へり。

同金剛寶菩薩像 は、金剛界七集卷上に、肉色にして、右手は寶珠を持し胸に當て、左手は與願にす。祕藏記之に同じ、或は左に寶を持すとあり。大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋卷上にも亦、虚空藏菩薩背に月輪あり、右手に金剛寶を持し、左手は施願にし、半跏にして而も坐すと云へり。又其の他

二臂左手施無畏、右手蓮上寶を持する像 是れ念誦結護法普通諸部の説なり。文に、身、紫金色の如く、頂に五佛を戴く、左は施無畏、右は青蓮華の華中に紅頰梨寶あるを持すとあり。

二臂右手施願、左手寶を持する像 八大菩薩曼荼羅經に、虚空藏菩薩左手には寶を持して心上は安じ、右手は施願にし、無量寶を流出すとある是れなり。

頭冠に三十五佛を載く像 阿婆縛抄に、ムはく東大寺の虚空藏は三十五佛を戴く云とあり。蓋し觀虚空藏菩薩經の説に本づけるものなるべし。

求聞持虚空藏像 二臂にして左手蓮上に寶あるを執り、右手施願の印を成せるもの、是れ求聞持の本尊として、多く世に流布する所なり。虚空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法に、當に絹素白氎或は淨版の上に於て、先づ滿月を畫き、中に於て虚空藏菩薩の像を畫け、其の量は下に至るも一肘より減ぜざれ、或は復た此を過ぎ、其の力に任せて辨ぜよ。菩薩滿月、増減相稱ふ、身、金色に作し、寶蓮華の上に半跏して而も坐し、右を以て左を押す。容顏殊妙にして、熙怡喜悅の相を作し、寶冠の上に於て五佛の像ありて結跏趺坐す。菩薩は、左手に白蓮華を執る、微しく紅色を作し、華臺の上に於て如意寶珠あり、吠瑠璃色にして、黃光焰を發す。右手復た與諸願の印を作し、五指垂下し、掌を現はして外に向く、是れ與願の印相なりとある是れなり。其の像、覺禪鈔に出で、猶古佛畫の現存するもの多し。

明星天子像 明星天子とは、木星一説金星に名づく。是れ虚空藏菩薩の應作なりとも傳へ、求聞持法を修する時、併せて明星供を修す。其の像、覺禪鈔に引く所の

千眼王所生大明星天子龍馬虚空藏菩薩法に依るに、頭は如來の面相を作し、四臂ありて、左の第一手は寶印を持し、第二手は如意寶珠を持し、右の第一手は寶盞を持し、第二手は施無畏にす。身は金色にして、瓔珞天衣、具に以て嚴飾し、水精龍王に乗ず。其の龍の背に金輪あり。上に彼の天子菩薩を立つと云へり。但し覺禪鈔に掲ぐる所の圖像は、印相等は今説に同じきも、身に羯磨衣を着け、龍の背上の蓮臺の上に立てり。

第二十一節 五大虚空藏

五大虚空藏 又五大金剛虚空藏とも云ふ。一に中央法界虚空藏(又解脱虚空藏、智慧虚空藏と名づく)、二に東方金剛虚空藏、又福德虚空藏、愛敬虚空藏、福智虚空藏と名づく、三に南方寶光虚空藏(又能滿虚空藏、官位虚空藏と名づく)、四に西方蓮華虚空藏(又施願虚空藏、能滿虚空藏と名づく)、五に北方業用虚空藏(又無垢虚空藏、福德虚空藏と名づく)なり。是れ大日阿闍等の五佛が、各如意寶珠の三昧に住するの相、即ち五佛所變なりとも傳へらる。形像は、金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經、金剛吉祥大成就

品に依るに、行者應に五大金剛虚空藏を畫くべし。一圓明の中に於て、自身の量に等ふして之を畫け、一圓の中に於て、更に分ちて五と爲す。中の圓に於て、白色(法界)虚空藏を畫く、左の手に鈎を執り、左手に寶を持せり。前の圓の中に、黃色(金剛)虚空藏を畫け、左に鈎を持し、右に寶金剛を執る。右の圓の中に、青色(寶光)虚空藏を畫け、左に鈎を執り、右に三瓣の寶を持し、大光明を放てり。後の圓の中に於て、赤色(蓮華)虚空藏を畫け、前の如く左に鈎を持し、右に大紅蓮華を持す。左の圓の中に、黒紫色(業用)虚空藏を畫け、前の如く、左に鈎を持し、右に寶羯磨を持す。是を五大虚空藏の求富貴の法と名づく。若し此の像を畫くには、青色或は金色の絹の上に於て之を畫き、其の菩薩の衣服、首冠、瓔珞、皆本色に依れ、各半跏坐にせよと云へり。又五大虚空藏菩薩速疾大神驗秘密式經に依るに、東面福智虚空藏は、右手は施無畏、左手は寶蓮華の華上に羯磨杵の形色黄なるを持し、南面能滿虚空藏は、右手に寶劍を持し、左手は青蓮華の華上に如意寶珠の珠廻に火焰あるを持し、西面施願虚空藏は、二手合掌し、北方無垢虚空藏は、左手は施無畏、右手は寶蓮華の華上に月輪の形色水白なるを持し、中央解脱虚空藏は、右手は施無畏、左手は寶蓮華の華上に獨鈷杵の形色黄なるを

持すと爲し、又覺禪抄に引く所の明星天子法には、東方福智虚空藏は、青蓮に坐し、銀牛に乗じ、南方能滿虚空藏は、赤蓮に坐し、金象に乗じ、西方施願虚空藏は、白蓮に坐し、瑠璃馬に乗じ、北方無垢虚空藏は、紫蓮に坐し、獅子に乗じ、中央解脱虚空藏は、黄金蓮に坐し、水精龍王に乗ずと云ひ、又同書に引く所の法務御抄の記に依れば、一に智慧虚空藏菩薩は、左手に蓮華の上に滿月あるを持し、右手は膝上にて施無畏にし、左足は半下座なり。二に愛敬虚空藏菩薩は、女形にして、面上に三股牙あり、左手は膝上に金輪を執り、右手は面前に當て三股を執る、右足は半下座なり。三に官位虚空藏菩薩は、肉色にして手に鈎を執り、拳前に當て之を引き、蓮華に座す。四に能滿虚空藏菩薩は、桃花色にして、左手は蓮華の上に如意寶あるを持し、右手には寶劍を持す。花座の下に日曜の形あり、次下山の廻りに水形あり。五に福德虚空藏菩薩は、八臂一面、正體の二手は胸に當て合掌し、左上手は鈎を持し、次手に三股、次手に金剛鉢を執り、右上手は寶鈎、次手は錫鑪、次手は前に當て三股を執り、蓮華座に坐すとあり。其の圖像、覺禪鈔に十數様を載す。其の中

安禪寺五大虚空藏等身像 白色像は、左手鈎、右手蓮。青色像は、左手鈎、右手寶珠。

黄色像は、左手拳、右手三鈷。赤色像は、左手鈷、右手寶珠。黒紫色像は、左手鈷、右手寶羯磨を持す。

同三尺像 中白色像(獅子に乗る)は、右手蓮上三瓣寶。東黄色像(象)は、右手寶金剛。南青色像(馬)は、右手寶珠。西赤色像(孔雀)は、右手寶。北黒紫色像(鳳)は、右手寶羯磨を持す。左手は各三鈷鈎を持す。

或人圖 中白色像(獅子に乗る)は、左手三鈷鈎、右手蓮上三瓣寶。東黄色像(象)は、左手一鈷鈎、左手寶金剛。南青色像(馬)は、左手三鈷鈎、右手寶珠。西赤色像(孔雀)は、左手拳、右手蓮上三瓣寶。北黒色像(迦樓羅)は、左手一鈷鈎、右手羯磨を持す。

或人圖 中白色像、左手は一鈷鈎(下同)、右手は三莖蓮上寶。東青色像は、右手如意珠。南黄色像は、右手五古上如意珠。西赤色像は、右手一莖蓮花。北黒紫色像は、右手羯磨杵を持す。

唐本圖 中白色像(白馬に乗る)は、右手蓮上寶。東青色像(獅子)は、右手寶。南黄色像(象)は、右手五臍杵。西白肉色像(孔雀)は、右手寶。北白紫色像(金翅鳥)は、右手羯磨上寶あるを持す。左手は五尊俱に三鈷鈎を持す。

廣隆寺像 中白色像は、右手紅蓮上三瓣寶。前青色像は、右手赤蓮華上寶。右黄色像は、右手五果珠。左紫色像は、右手羊石を持す。

池尾塔五大虚空藏像 中白肉色像は、右蓮上寶。前黄色像は、右手五鈷上寶珠。

右緑青色像は、右手寶。後赤肉色像も亦右手寶を持す。左手は五尊俱に鈎を持す。

高雄塔木像 中白色像は、右手三莖蓮華上寶珠五顆、東南方芳緑青色像は、右手如意寶、西南方芳黄色像は、右手横五鈷上如意寶五顆、西北方芳赤色像は、右手赤蓮上如意寶、東北方芳黒色像は、右手羯磨上如意寶を持す。左手は五尊俱に三鈷鈎を持す。

安祥寺多寶塔五大虚空藏像 中央白色像は、右手二莖蓮上一寶。前左像は、右手寶。前右黄色像は、右手五鈷。後左像は、右手三瓣寶。後右像は、羯磨杵上寶あるを持す。左手は五尊俱に一鈷鈎を持す。

三修律師請來唐本五大虚空藏木像 元と安祥寺大日堂に安置せられたりと傳へらる。其の像、中尊は、身黄色にして馬に乗し、右手空風相捻す。前左像は、黄色にして獅子に乗し、右は拳にして五鈷を持し、前右像は馬に乗じ、後左像は青色にして孔雀に乗じ、後右像は紫色にして金翅鳥に乗ぜり。

安祥寺北堂圖 中尊黄色像(白馬に乗ず)は、右手一莖蓮華。前左綠色像(獅子)は、右手掌に蓮華。前右黄色像(鳥)は、右手に蓮華。後左煙紫色像(孔雀)は、右手に黄花。後右白肉色像(迦樓羅)は、右手に羯磨を持す。左手は五尊俱に鈎を持す。

唐圖(安祥寺) 中白色像は右手蓮華上寶前黄色像は右手五鈎上寶、右青色像は右手寶、左黒紫像は右手羯磨上寶、後赤色像は右手寶を持す。左手は五尊俱に鈎を持す。尙ほ同覺禪鈔裏書に「安祥寺木像、繪佛師法橋頼助説、中(白)、右寶(師子座)。東黄、右三古上寶象座。南青、右寶(馬座)。西赤、右寶(孔雀座)。北(黒紫)、右羯磨迦樓羅座。左皆中」と云ひ、又「右府法眼宗命の説に云はく(此の堂に於て法花會を行ふ、五大虚空藏を安置す)、法界虚空藏(左手は鈎を持し、右手は仰て微し、擧げ、大指頭指相捻し、中指以下の三指舒べて微しく峰を垂る)。金剛虚空藏(左手は前の如し。右手は胸の前に仰て五指を舒べ、上に五股杵を置く)。寶光虚空藏(左手は前の如し。右手は胸の前に仰て寶珠を持し、其の寶珠の様蓮花に四珠、上に一珠を置く、朱焰を放てり)。蓮花虚空藏(左手は前の如し。右手は胸の前に仰て寶を持す、其の寶珠の體は蓮華の上に三珠あり、上に一珠あり、光焰を放つ)。業用虚空藏(左手は前の如し、右手は胸の前に仰て

羯磨杵を持す)。住持の僧の云はく、本と寶塔に於て安置し奉る。後ち此の堂に於て之を渡し奉ると云へり。

第二十二節 般若菩薩

般若菩薩 梵名は波羅只攘波羅蜜多 Prajñāpāramitā。大般若經の本尊として、三世諸佛能生智母と稱せらる。胎藏界曼荼羅の中には、持明院並に虚空院に居し、金剛界曼荼羅北方不空成就佛四親近の一なる金剛護菩薩は、之と同本誓の尊なりと傳へらる。形像は、之に二臂像あり、又六臂像あり。其の中

胎藏界曼荼羅持明院の般若菩薩像 は、諸説不同記第四に、現圖、吽迦羅の左、彌陀の下に當りて中に在り。六臂あり、或圖は三日、袷襠の上に甲袈裟、青珠鬘を著け、右手は掌を側堅し、頭指大指を屈して相捻し、山圖は施無畏、次の一手は肘を開き、少しく堅て掌を直堅し、無名指を屈して身に向け、次の一手は垂下して肘を開き、膝に當て施願にし、左手は掌を仰ぎて心に當て掌に梵篋を持し、次の一手は肘を開堅し、掌を仰ぎ、無名指を屈して指頭を左に向け、次の一手は掌を仰ぎて、大指を少しく屈し

て臍下に置く(山圖中無名指を屈す)結跏して而も坐す(或圖は寶蓮華に坐す)。項背に五色重光ありと云へり。又

六臂像 聖佛母小字般若波羅蜜多經の説。三面三目、金色にして師子座に坐す。六臂あり、右第一手に數珠、次手に箭、次手は施願の相を作し、左第一手に經、次手に弓、次手には如意寶を執れり。

胎藏曼荼羅虚空藏院の般若菩薩像 は、二臂にして、右手は腰側に當て劍を持し、左手は掌を堅て頭中指を屈す。襜褕の上に袈裟を披著せり。又

二臂右手施願左手梵篋を持する像 陀羅尼集經第三に、其の菩薩の身、天冠を除きて外、身長一肘(人の一肘は佛の一磔手の如し)、通身白色にして、面に三眼あり、天女の相に似て、形貌端正にして菩薩形の如し。獅子座の上に結跏趺坐す、頭に天冠を戴き、篋篋光を作し、其の耳中に眞珠の寶璫を着け、其の項下に於て七寶の瓔珞を着く。兩臂屈を作し、左臂は肘を屈し側て胸上に在り。其の左手は五指を仰て伸展し、掌中に七寶の經函を畫作し、其の中に具に十二部經あり、即ち是れ般若波羅蜜多藏なり。右手は右膝の上に乗著し、五指を舒展す。即ち是れ菩薩の施無畏手なり。

菩薩の身上には、羅錦綺繡をもて作せる襜褕を着け、其の腰以下には、朝霞の裙を着くと云へる是れなり。其の圖覺禪抄に出づ。

二臂右手說法印左手梵篋を持する像 仁王般若念誦法に、身、黄金色にして衆寶瓔珞、徧く身を莊嚴し、首に寶冠を戴く、冠に繫る白繪は兩邊に垂下し、左手は心に當て般若梵筴を持し、右手乳に當て說法印を作す、大拇指を以て無名指の頭を壓すと云へり。

第二十三節 持世菩薩

持世菩薩 梵名は筏素駄羅 *Vasudhara*。此の菩薩能く財寶を雨して世間を保持するが故に其の稱ありと云ふ。形像は、阿婆縛抄等に引く所の持世陀羅尼別行功德法に依るに、其の像の身容は、青色黄色、蓮華座上に坐して結跏趺坐す。身に種種の瓔珞を作し、頭冠環釧種種莊嚴す。右手中に於て頗羅果を執り、此に大柘榴と云ふ。左手は當に施無畏の手に作すべし。其の像の面は、當に微笑の容を作すべし、呪師を觀るの勢を以てす。其の形狀は、梵天王の如く、美貌喜ぶ可く之を畫け、其の蓮

華の下に二の龍王を畫く兩手を以て七寶の箱を捧げ、一龍王は寶瓶を執る。其の龍王は人身に作し、頭上に一の龍陀頭を畫作し、頭の上に寶珠を帶ぶ。其の龍王の身半は水中に在り。其の像の右邊に大像天を畫く、其の天一手に蓮華を執り、一手に招携して呪師を起すの相を作す。其の大像の上の兩邊に、二の天仙人を作し、七寶を兩殿して虛空中に満たしむ。其の像の左邊に窣堵波塔を畫き、大勝天上に、更に一天人を畫く、寶珠を捧ぐるの勢に作し、仍て須らく合掌すべし。又大勝天に向て下に咒師を畫く、手に蓮華を執ると云へり。阿婆縛抄に、二圖を載す。

其の一は、一面二臂にして、右手は柘榴果を掌にし、左手は施無畏手にせり。

其の二は、具足して今畫像法に依りて曼荼羅となせるもの、而も其の中尊は四面二臂にして、左手は伸べて膝に安じ、右手は掲げて果實三箇ある柘榴樹枝を執持せり。之を四面と爲せるは蓋し梵天王に准ぜるものなるべし。

第二十四節 大隨求菩薩

大隨求菩薩 梵名は摩訶鉢羅底薩落 *Mahāpratisara* 胎藏界曼荼羅蓮華部院中に

在す。形像は諸説不同記第三に依るに、現圖窣堵婆大吉祥の左邊に在り。身黄色にして、冠中に化佛あり、耳に瑠璃環なし、或圖は瑠璃あり。八臂あり、右手は臂を屈して腋上に當て掌を仰ぎて外に向け、指頭少しく屈し、掌中に横に五指あり。(或圖は三指)次手は垂下して右に向て劍を執堅し、次手は少しく上に在り前相の如くにして、鏃を執り、或圖は肘を堅て内に向て頭中名を屈し、小を申屈して盤索を執る、次手は臂を舉げ肘を堅て拳を身に向けて三指の青縵を著けたるを執る、其の柱座に至る、或圖は其の戟の左右に又鈎鏃を著け繪なく柱短かし。左手は掌を側堅し頭中名指を屈し蓮を執る、上に金輪あり輪上に光焰あり、或圖は頭中を屈して執り、光焰無し、次手は垂下して拳を左に向け輪索を持す、(二圖は竝に幢に幡を著く)次手は前の如くして少しく上に幢を持す、或圖は掌を仰ぎ三指を屈し、小指を少しく屈して三指戟を持す、山圖は索、次手は臂を屈し左に向て梵篋を持す、或圖は臂を舉げ肘を堅て上に向て篋を執る。脛には裙を纏ふて坐す、或圖は常の如しと云へり。覺禪鈔に二圖を載す。一は現圖高雄曼荼羅の圖、一は舊圖と題して載する所、右手は次での如く五指、鉞斧、龍索、劔を持し、左手は輪、三指戟、寶幢、篋を持す。是れ諸説不同

記に所謂或圖の説に似て而も少異あるものなり。

第二十五節 地藏菩薩

地藏菩薩 梵名は乞叉底蘗婆 *Kṣitigarbha*。佛の附屬を受けて、彌勒佛の出世に至るまで五濁惡世に於て六道の衆生を教益する能化の尊なりと傳へらる。胎藏界曼荼羅の中には、地藏院の主位に居す。金剛界曼荼羅南方寶生佛の四親近の一なる金剛幢菩薩は、是と同本誓なりとせらる。形像は、胎藏界曼荼羅等のものは菩薩形なれども、普通世間に流布仰信せらるるは、聲聞の形をなせるものなり。即ち胎藏界曼荼羅地藏院の菩薩像は、諸説不同記第六に依るに、現圖第二重北方中央に在り、右手は掌を仰けて月輪を持し、山圖は蓮上黒珠。左手は拳に作し、腰側に當てて蓮上に幢幡を立て上に寶あり幡を著けたるを執り、左を向く(山圖は黄色)とあり。

金剛幢菩薩像 は、金剛界七集に、肉色にして二手幢幡を持すと云へり。又

二臂右手揚掌左手蓮上寶を持する像 不空罽索神變真言第九に、地藏菩薩は左

手に蓮華臺上に寶印あるを執り、右手は掌を揚げて半跏趺坐すとあり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂蓮華茶を持する像 地藏菩薩儀軌に、大士像、頂に天冠を著き、袈裟を著け、左手に蓮華茶を持し、右手は先の如くす(施無畏)九品蓮臺に安坐せしむとあり。

二臂鉢を持する像 八大菩薩曼荼羅經に、地藏菩薩、頭冠瓔珞あり、面貌熙怡寂靜にして一切有情を愍念し、左手は臍下に安じて鉢を拓き、右手は覆ふて掌をして下に向はしめ、大指、頭指を捻して一切有情を安慰するの相を作すとあり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

聲聞形盈華形を持する像 地藏菩薩儀軌に、聲聞の形像を作し、袈裟を著け、端左肩を覆ふ。左手は盈華形を持し、右手は施無畏にし、蓮華に坐せしむと云へり。阿婆縛抄等に其の圖を載せり。

聲聞形寶珠及び錫杖を持する像 覺禪鈔に引く所の不空譯の地藏儀軌に、内に菩薩の行を祕し、外に比丘の相を現じ、左手に寶珠を持し、右手に錫杖を執り、千葉の青蓮華に安住すと云へり。普通世間に流布せらるるもの、即ち此の形像なり。

聲聞形右手施無畏左手寶珠を持する像 其の圖、覺禪鈔に出づ。

聲聞形右手施願左手寶珠を持する像 其の圖、十卷抄、覺禪鈔等に出づ。

六地藏 大乘大集地藏十輪經第一に依るに、菩薩は梵王身、大自在天身、佛身、聲聞身乃至閻魔王身、其の他種種の身を現じて、諸の有情を濟度すべきことを説き、地藏菩薩本願經卷上にも、地藏菩薩廣大慈悲深誓願を以ての故に百千萬億不可說無量世界に於て、其の諸分身能く六道強疆の衆生を教化することを説けり。是に由て中古以後六道に配して六地藏の説あり。而も其の六地藏に就きて二三の異説あり。覺禪鈔に、六地藏形像、世流布は白色聲聞の形と題し、六地藏の形像を説き、之を胎藏界曼荼羅地藏院の六尊に配せり。

一 地獄大定智慧地藏 右は寶珠を持し、左に錫杖を持す。地藏菩薩

二 餓鬼大德清淨地藏 左は寶珠、右は與願、寶掌菩薩

三 畜生大光明地藏 左は寶珠を持し、右には如意を持す。寶處菩薩

四 修羅清淨無垢地藏 左は寶珠を持し、右は梵篋を持す。寶印手菩薩

五 人道大清淨地藏 左は寶珠を持し、右は施無畏にす。持地菩薩

六 天道大堅固地藏 左は寶珠を持し、右は經を持す。堅固意菩薩

即ち地藏菩薩等は、是れ胎藏界曼荼羅地藏院の中の六尊にして、大日經の中に其の名を出す所なり。猶ほ覺禪鈔には、蓮華三昧經に云はく、光味地藏、牟尼地藏、諸龍地藏、救勝地藏、護讚地藏、不休息地藏。又云はく、檀陀地藏、寶珠地藏、寶印手地藏、持地地藏、除蓋障地藏、日光地藏。已上は顯宗に説く六地藏なりと云へり。佛像圖彙第二に、亦六地藏を明すに其に二類あり。一には預天賀地藏、諸天を度す、左如意珠右說法印。放光王地藏、人を度す、左錫杖、右與願印。金剛願地藏、地獄を度す、左炎魔幢右成辨印。金剛寶地藏、餓鬼を度す、左寶珠、右甘露印。金剛幢地藏、修羅を度す、左金剛幢、右施無畏印。金剛悲地藏、畜生を度す、左錫杖、右引接印なり。二には地持地藏、(又護讚地藏と云ふ、二手數珠を持す)。陀羅尼地藏、又辨尼地藏と云ふ。左鉢、右揚掌、寶性地藏、(又破勝地藏と云ふ、二手合掌)。鷄龜地藏、又延命地藏、光味地藏と云ふ、左寶珠、右錫杖。法性地藏、又不休息地藏と云ふ、二手柄香爐。法印地藏、又讚龍地藏と云ふ、二手幡、是れなり。形像は孰れも皆聲聞形なり。但し其の説の由來する所を詳にせず。

第二十六節 藥王菩薩

藥王菩薩 梵名は鞞^ブ逝^イ捨^シ囉^ラ惹^ヤ Bhaisajya-rāja. 此の菩薩能く衆生身心の病を治するが故に即ち其の稱ありと云ふ。形像は阿婆縛抄に成菩提に云はく、白蓮華經に云ふ、第三藥王菩薩、頂上に妙寶冠あり、紺髪は耳側に垂れ、身相は朝日の色にして、左定は拳にして膝に着け、右惠は雲上に日あり、跏趺して右、左を押すとあり。法華曼荼羅の中、八大菩薩の第三位に居せり。但し阿婆縛抄に掲ぐる所の圖像は、左手は拳にして腰に安じ、右手は掌を揚げて楊柳枝を執れり。是れ藥王菩薩法の本尊にして、千光眼觀自在菩薩祕密法經所説の藥王觀自在菩薩に當るものなるが如し。又廿五菩薩迎接衆中の藥王菩薩は幢幡を執持せり。

第二十七節 大勢至菩薩

大勢至菩薩 梵名は摩^マ訶^ハ薩^サ駄^ダ摩^マ鉢^ハ鉢^ハ摩^マ Mahāsthama-prajña. 又得大勢と云ひ、略して勢至と稱す。極樂世界補處の大菩薩として、觀音と俱に阿彌陀佛に隨侍す。

彌陀淨土變中の右脇侍は即ち此の尊なり。胎藏曼荼羅の中には、蓮華部院に居す。形は

極樂世界彌陀脇侍の菩薩像 に就きては、觀無量壽經に、此の菩薩の身量大小は、亦觀世音の如し、圓光は面各百二十五由旬なり、二百五十由旬を照す。舉身の光明、十方の國を照すに紫金の色を作す。有縁の衆生は皆見ることを得(中略)。此の菩薩の天冠には五百の寶蓮華あり、一一の寶華に五百の寶臺あり、一一の臺中に十方諸佛淨妙の國土の廣長の相皆中に於て現す。頂上の肉髻は、鉢頭摩華の如し、肉髻の上に於て一の寶瓶あり、諸の光明を盛て普く佛事を現す。餘の身相は觀世音の如く等しくして異なることなしとあり。法隆寺金堂の壁畫、御物金銅押出佛、智光當麻等の諸淨土變相並に三尊佛の右脇侍、其の手印の様は、必ずしも一定ならずと雖も、其の冠髻中に寶瓶を戴き給へるは、以て一見此の菩薩の尊容なることを推するに足る可し。

胎藏界曼荼羅蓮華部院の大勢至菩薩像 は、諸説不同記第三に、現圖、毗俱胝の左に在り(或圖は身淺黃色、冠額に珠あり(或圖は冠中に澡瓶ありて珠なし)。右手は掌

を側堅し、頭指以下四指を屈す(或圖は中名指を屈し、山圖は三鉗戟を執る)。左手は拳を堅てて開合蓮華を執る(或圖は花鬘を繫著す)面少しく左に側く(或圖は端しく面す)と云へり。此の外

二臂右手安慰印の像 陀羅尼集經第二に、大勢至菩薩結跏趺坐し、左手は掌を左髀の上に覆せ、右手は臂節を屈して右髀の上に托け、臂を堅てて上に向け、大指を以て無名指の甲上を捻し、頭指中指小指を揅堅し、掌を側け前に當つとあり。

二臂右手安慰印左手蓮華を持する像 金剛恐怖集會方廣軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經に、佛左聖得大勢至菩薩(中略)右手は安慰に住し(即ち風空の頭を以て相捻し、餘指を堅てて引手の勢を作す)左手は蓮華を持す。身は秋箭色(白色)の如しと云へり。

二臂右手說法印左手白蓮を持する像 攝無礙經に、頂上に五髮冠あり、冠中に鐺持在り。身相白肉色にして、左定は白蓮花、右慧は說法印をなすと云へる是れなり。

二臂右手揚掌左手蓮華を持する像 不空罽索神變真言經第九の説

二臂白拂を持する像 阿喇多羅陀羅尼阿嚕力品の説。又

二十五菩薩迎接衆中の大勢至菩薩像 は、二手金剛合掌を作せり。

第二十八節 龍樹菩薩

龍樹菩薩 梵名は那伽闍羅樹那 Nagārjuna、又龍猛と譯す。所謂龍樹菩薩なり。

形像は、覺禪鈔阿彌陀の卷に載する阿彌陀五佛中のものは、聲聞形にして袈裟を著け、蓮華に坐し、二手合掌す。阿婆縛抄に載する所亦之に同じ。

第二十九節 轉法輪菩薩

轉法輪菩薩 具に纒發心轉法輪菩薩と稱す。是金剛三十七尊中の西方四親近の一なる金剛因 Vajra-Indra なりと云ふ。形像は、金剛因菩薩は、白肉色にして左手は拳を作して腰に安じ、右手には金輪を持せるも、阿婆縛抄等に掲ぐる所のもは、左手は臂を屈して外に向け、掌上に金剛杵を堅て、右手は心に當て蓮上に金輪あるを執れり。或は是れ彌勒菩薩と同尊なりとも傳へらる

第三十節 馬鳴菩薩

馬鳴菩薩 梵名は阿濕縛窣沙 *Avaghosha*。蠶養の守護者と傳へらる。形像は、
 二臂像 馬鳴菩薩大神力無比。法念誦儀軌には、菩薩像、色相白肉色にして、而も
 合掌して白馬に乗り、白色の衣を著け、瓔珞を以て身を莊嚴し、首に花冠を戴き、右足
 を垂るとあり。

六臂像 是れ十卷抄及び阿婆縛抄等に出す所の曼荼羅の中尊なり。其の像白
 色にして頭に花冠を戴き、六臂あり。左第一手は籬、次手は掌を舒べて大指を以て
 中無名指を鈎し、次手は糸を持す。右第一手は管、次手は施願の勢をなし、手次は斤
 を持せり。

第四章 明王像

第一節 不動明王

不動明王 梵名阿遮羅曩駄 *Acala*。又無動と譯す。明王とは梵語 *Vidyaraja*
 の譯。密家に於て、自性輪、正法輪、教令輪等を明す中の教令輪に名づく、所謂忿怒尊
 なり。攝無礙經に、五智忿怒を以て五智に相配するに、不動尊は、毘盧遮那の忿怒、自
 性輪、般若菩薩、降三世尊は、阿閼佛の忿怒、自性輪、金剛薩埵菩薩。軍荼利は、寶生佛の
 忿怒、自性輪、金剛藏王菩薩。六足尊は、無量壽佛の忿怒、自性輪、文殊師利菩薩。金剛
 藥又は、不空成就佛の忿怒、自性輪、即ち是れ寂靜身なる可し。又穢積金剛は、不空成
 就佛の忿怒と爲す、自性輪、金剛業なり。穢積は即ち烏芻澁摩菩薩なり。無能勝は、
 釋迦牟尼佛の忿怒、自性輪、慈氏菩薩。馬頭觀音は無量壽佛の忿怒、自性輪、觀世音を
 主となし、伴は陀羅嚩子尼、是れ白衣觀世音菩薩なりとあり。又仁王護國般若波羅
 蜜多經道場念誦儀軌卷上に、然るに五菩薩、二種の輪に依て身を現ずること異あり。

一には法輪眞實身を現す所修の行願の報徳の身なるが故に。二には教令輪威怒の身を現す大悲を起し威猛を現すに由るが故にと云へり。蓋し此の不動尊は、五大尊の中尊、諸明王中の總主なり。胎藏界曼荼羅の中には持明院の左端に位す。形像は、是に二臂像、四臂像、六臂像等の數種あり。

二臂劔及び絹索を持する像 其の胎藏界曼荼羅持明院の像は、諸説不同記第四の説に依るに、現圖第一重西方の西南隅に在り。通身青黒、身相圓滿にして、極忿怒の形をなす、眉を蹴め目を怒らし、上齒、下唇を咬み、頂上に花六を安じ、辮髪を出し、一の索髪左より垂れ、胸前に五結あり。右手は内に向て垂れ、腰側に當て劔を持し、左手は臂を屈し肘を開き掌を仰ぎ指端を左に向けて索を持し、面を右方に向け、盤石の上に坐す。光燄は迦樓羅の勢の如くし、火焰あり、身光無く唯頭光のみあり。青珠鬘を著け、耳に環を著く(或圖は珠なし)と云へり。若し此の像に依らば、兩目俱に怒らし張れるも、不動使者陀羅尼祕密法に依らば、好絹の上に於て不動使者を畫く。赤色の衣を著けて斜に帔す、腰の褌子も亦赤色にし、左邊の一髻下垂して耳に至り、左眼微に斜に看、左手に絹索を把り、右手には劔を把りて直堅す、劔首は蓮華の葉の

狀の如し、劔靶は寶釧にす。寶石上に坐し、眉を曲げ目を瞑らす、身赤黄色なりと云ひ、大日經第一にも、涅哩底の方に依て、不動如來使あり、慧刀と絹索とを持し、頂髪左の肩に垂れ、一目にして而も諦に觀、威怒にして身に猛焰あり、安住して盤石に在すとあり、左眼は斜視の相を爲さしむ。底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法、金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品、底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法卷下、勝軍不動明王四十八使者祕密成就儀軌等の説亦之に同じ。

二臂左手劔右手絹索を持する像 其の圖覺禪鈔に出づ。

二臂金剛杵及び寶捧を持する像 底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法に、不動尊赤土色の衣を著け、左に辮髪を垂れ、眼は斜に視、童子の形にして、右手は金剛杵を執りて心に當て、左手は寶捧を執る。眼微しく赤く、瞋怒の相、徧身火焰ありとあり。底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法卷下に亦此の像法を説く。但し覺禪鈔に出す所の圖は、左手に獨拈杵、右手に寶捧を持せり。

二臂金剛杵及び絹索を持する像 不動使者陀羅尼祕密法に、不動使者、身赤黄色にして、上衣は斜に帔す青色。下裳は赤色。左邊の一髻は黒雲色、童子の相貌、右手

は金剛杵を執り、左手には絹索を執る。口の兩邊より微しく少牙を出し、怒眼赤色、火焰の中に石山の上に坐す」とあり。覺禪鈔に其の像二圖を載す。

立二臂劔索を持する像 覺禪鈔を出す所のもの二圖あり、一は右手を屈して腰に當て劔を執り、左手は舒べて下垂して索を持せり。註に「三井の尊覺法印の持佛を以て之を圖す、彼寺黃不動云」とあり。一は其の左手臂を屈して外に向け索を執り、二侍者前に侍立せり。

二臂五拈杵を持する像 三井寺所傳と傳へ、十卷抄に載す。其の像二手心に當て五拈杵を執持せり。

二臂金輪を持する像 是れ亦三井所傳と傳へ、十卷抄に載する所、其の像、二手膝に安じ定印に住し、掌上に八幅金輪を持し、金輪上に坐し、背に亦金輪あり。前に獨拈及び輪、右に劔、左に二拈に金剛索を懸けたるを安ぜり。

二臂劔索を持し自在天に乗する像 大日經疏第九に「時に不動明王、即ち彼を、持て、左足を以て其の頂を半月中に踏み、右足にて其の妃の首を半月上に踏む。爾の時に自在天、尋に便ち命終す」とあり。底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法卷上

等に亦此の意を説く。覺禪鈔の中に載する所の圖像は、左手に索、右手に劔を持し、左足は自在天、右足は同妃を踏めり。

一面四臂像 聖無動尊安鎮家國等法に「四臂の大嚴忿怒の身を作す。紺青色、洪滿端嚴にして、目口皆張り、利牙上に出づ。右は劔、左は索、其の上の二臂は口の兩邊にあり、忿怒の印を作す。身、八輪金剛輪の内に處す。其の輪の四外に八の三股金剛杵を現す。頭輪に復た迦樓羅炎あり、四大寶須彌山上に坐す」と覺禪鈔に「御筆十二天中尊を以て之を圖す」と注して出せるもの、印契之に同じ。但盤石座に坐せり。

四面四臂像 底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法に「四面四臂にして、身、黄色に作し、徧身火光あり、天兵の勢を作す」と云へり。覺禪鈔に其の圖を載す。其の印契は前の四臂像に同じ。

四面四臂四足像 覺禪鈔に引く所の或抄の説。其の像、上の二臂は大張口の勢を爲し、下の二手、右は劔、左は索を執り、二右足を屈し、二左足を展べ、盤石に倚坐す。

一面六臂六足像 覺禪鈔に引く所の聖無動尊軌の説。其の像、右第一手に、利劔、次手に、寶棒、次手に、鉞斧を執り、左第一手に、索、次手に、金剛箭、次手に、錫杖を持すと云

ふ。但し開明房の口傳に載する所の像は、三面にして左第二手は輪を把れりと傳へらる。

四面六臂像 覺禪鈔に引く所の守護國界法の説其の像、右第一手に利劍、次手に金剛箭、次手に金輪を執り、左第一手に索、次手に寶弓、次手に金剛杵を持す。金色の獅子に乗ず。八大童子圍繞す。

眷屬八大童子 不動明王の眷屬に八大童子あり。形像は、聖無動尊一字出生八大童子秘要法品に

慧光童子 少しく忿怒し、天冠を着け、身白黄色、右手は五智杵を持し、左手は蓮上月輪を置く。袈裟瓔珞種種莊嚴す。

慧喜菩薩 形は慈面に似微笑の相を現じ、色は紅蓮の如くにして、左手に摩尼を持し、右手は三股鈎を持す。

阿耨達菩薩 形は梵王の如く、色は真金の如く、頂に金翅鳥を戴き、左手に蓮華を執り、右手は獨牯杵を持し、而も龍王に乗ず。

指德菩薩 形は夜叉の如く、色は虚空の如く、面に三目あり、甲冑を着け、左手に

を持し、右手は三叉鉞。

烏俱婆譏童子 五股冠を戴き、暴惡の相を現じ、身金色の如く、右手は縛日羅を執し、左手は拳印を作す。

清淨比丘 首髪を剃除し、而も法袈裟を着け、左肩に於て結び垂れ、左手に梵篋を執り、右手は心に當て五股杵を持し、右肩は顯露し、腰に於て赤裳を纏ふ。其の面貌は若に非ず、老に非ず、目は青蓮の如くし、其の口、上牙下に顯出す。

矜羯羅童子 形は十五歳の童の如く、蓮華の冠を着け、身白肉色にして、二手合掌して其の二大指と頭指との間に横に一股杵を挿み、天衣袈裟、微妙に嚴飾す。

制吒迦童子 亦童子の如く、色は紅蓮の如く、頭に五髻を結す（一結は頂上の中、一結は額上、二結は頭の左右、一結は頂後、五方五智を表す）。左手は縛日囉、右手は金剛棒を執り、瞋心惡性之者なるが故に袈裟を着けず、天衣を以て其の頭肩に纏ふと云へり。覺禪鈔に其の圖を出す。但し烏俱婆譏の手印は、右は拳印、左に縛日囉を持せり。又同鈔所引、不動尊二童子法に依るに、其の矜羯羅童子は、形喜見童子の如く慈悲の貌を作し、頂に蓮華あり、左に杵を持し、右に蓮華を執る。或は又瞋形を作し、

額に皺文を現じ、左に索を執り右に劍を把ること大聖尊の如くにして而も師子に乘じ、又制吒迦童子は、其の像白馬に乘じ、驟勢を作し、頂下に鈴子を懸け、童子頂に五髻あり、身に緋衣を著け、形は十五歳の兒の如くにして、喜怒の相を現すと云へり。其の像亦覺禪鈔に出でたり。

俱哩迦羅 又俱利伽羅、矩里迦、古里迦等に作る。具に俱哩迦羅不動と稱す。不動明王所變の身なり。其の形像、普通のもの、蛇形にして劍を呑むの状をなし、盤石の上に立つも、亦人相のものありとす。即ち說矩里迦龍王像法に依るに、其の形、蛇の如くにして、雷電の勢を作し、身は金色にして如意寶を繫け、三味の焰を起し、四足を蹴踏するの形なり。背には七の金剛利針を張堅し、額に一支の玉角を生じ、劍上に纏繞す(中略)。若し人相をなさば、面目喜怒、遍身甲冑猶ほ毗嚩博、又王の如し。左は腰に托して索を把り、右臂は臂を屈して上に向て劍を執り、頂上には龍王幡を置き、金剛山に立つ。別本に云はく、迦里龍王、天神無怡の相の如くし、頭上に七頭の龍を畫出し、胡跪して仰で如來を視、寶蓮華を捧げしむと云へり。

藥廁師拈 Yaksini 又藥叉女、威猛神、又勇健神と稱し、亦不動明王の眷屬とせらる。

形像は覺禪鈔に引く所の圓行の聖無動尊決祕要義の説に依るに、無動尊藥廁拈使者像は、一身四手にして、左邊の上手に三股叉を把り、下手に棒を把り、右邊の上手に掌に一輪を把り、下手は網索を把り、身青色にして、大に口を張り、三眼あり。頭に鬘體を載き、鬘體並に龍を以て嚴身し、脚下に各一鬼を踏めりと云へり。

第二節 降三世明王

降三世明王 梵名は怛隸路迦囉曰囉 Trailokya-Vajra. 東方阿閼佛の忿怒尊と傳へらる。金剛界九會曼荼羅の中には、金剛薩埵の教令輪として降三世羯磨會、同三昧耶會に居し、胎藏界曼荼羅の中には、持明院の西北隅に居し、或は勝三世と名づく。同持明院の拔折囉吽迦囉 Vajra-hūṃkara. 並に同金剛手院の忿怒月鑿鑿字厭或は鑿に作る、梵名句路駄贊捺羅底捺囉迦 Kroḍha-candra-tilaka) は、此の明王と同尊なりとも傳へらる。形像は金剛界曼荼羅の降三世會の尊、並に胎藏界曼荼羅持明院の跋折囉吽迦囉等は、三面八臂像なれども、同持明院の降三世は、一面二臂像にして、同金剛手院の月厭忿怒尊は、一面四臂像なり。其の中また多少の異説なきに非ず。

四面八臂大天を踏む像 金剛頂瑜伽降三世成就極深密門に降三世瑜伽二羽印を心に當て、慧の手に五鈷を持ち、臂を努して下に擬する如くし、次には箭と劔とを直く執り。定の上には五股鈴、次には弓、次に索を執る。皆直く臂を引て持せよ。四面あり、正は青色、右は黄、左は綠色、後は紅、咸く忿怒なり。自在天王と妃とを座と作すとあり。金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經の説は、印契器械を記さざるも大都之に同じ。覺禪鈔に出す所の圖、此の説に契へり。

三面八臂大天を踏む像 攝無礙經に、髑髏火髮の冠、夏時雨雲の色、三面三眼、阿吒吒微笑、百千臂を具足し、衆の器械を操持し、八臂の相を示現す、滿願弘誓の故に、左定は戟銷を執り、左理は寶弓を抱き、左定は金剛索あり。右慧は金剛鐸、右智は寶箭を持ち、右慧は寶劍を握り、理智は救世の印なり、中略、左足に大天を踏み、右足に天后を踏むと云へる是れなり。

三面八臂蓮華に坐する像 胎藏界曼荼羅持明院の拔折囉吽迦羅の像は、諸説不同記第四に、現圖、不動の左に在り。身色青黒にして、寶冠金線あり。火髮上に向て忿怒の形を作り、上齒、唇を嚙み、兩牙上に出づ。三面あり、面に三目あり。八臂あり

(或圖は四面、中面齒見え、唯二牙ありて上に出で、左右の面に牙齒なし、頂上の面牙齒俱に現ず、是を異と爲すなり)。當前の兩手は、各拳にして腕を交へ、小指を相鉤し、頭指を豎て舒ぶ。右の一手は下げて肘を舒開し、拳を右に向けて劔を持す(或圖は棒)。次の一手は臂を屈して肘を直豎し、掌を仰ぎて指は右に向け、四指を屈して箭を執り、其の小指少しく申屈す。其の矢は羽は上に鏃は下に側く(或圖は臂を屈して少しく舉げ、掌を側豎し、四指を屈して頭中指の間に其の箭を夾取す、箭色は赤形、小指微しく屈す)。次の一手は、臂を舉げて肘を豎て拳を覆ひて身に向け、三鈷鈴を執る(或圖は三肘杵)。左の一手は垂れて掌を豎て左に向け、諸指を少しく屈して輪索を執り、次の一手は臂を屈し肘を開きて少しく拳を豎て左に向て漆弓を持す(或圖は形弓、次の一手は太だ臂を舉げ肘を豎て拳にして身に向けて三胡戟を持す、或圖は戟、青繪を著け、兩端上に向く)。左膝を豎てて白蓮華に坐し、右足反屈して其趺外に向き、其兩膝脛皆露はる。耳に環珠を著く(或圖は耳足の環なし)右足の端右に向き、衣の前端飄りて左に向く(或圖は常の如し、或圖は紅蓮、右足も常の如し、山圖は磬石に坐す、頭を少し右に側け、青珠鬘を著くと云へり。其の現圖と或圖との間に持

物相違あり。十卷抄等に載する所の像は、二足は大天並に妃を踏めるも、印契器械は全く今の現圖のものに同じ。金剛界曼荼羅降三世會の像は、印契座物共大體に於て十卷抄の像に同じきも、其の右第一手は、五胎鈴に非ずして五鈷杵を持し、又智證大師請來の像は、代ゆるに獨鈷杵を以てせり。

三面八臂蓮華に坐する像 大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法に、降三世金剛青色八臂にして、當前の二手は印を結す。檀慧を反して相鈎し、餘は拳にして進力を堅て、左手は弓を執り、右手は箭架を把り、左の一手は杵を執り、一手は索を取り、右の一手は戟を執り、一手は棒を把る。三面にして口角に牙を現じ、火焰中に坐すと云へる是れなり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

四臂縛折羅を持する像 尊勝佛頂修瑜伽軌儀卷上に、降三世尊、半月輪に於て、邪に立ち走る勢、青色にして狗牙上に出づ。四臂あり、兩手は三昧耶印を結し、一手は心印を結し、一手は縛折羅を執ると云へり。

四臂鈎斧及び五鈷を持する像 慈氏菩薩略修念誦法卷下に、降三世明王、半月輪漫拏羅中、身色奥青、三眼四牙大瞋怒の形なり。左脚を屈して前に向け、右脚を

拽きて後に向け、輪中に於て走る勢の如くす。四臂あり、兩手は三昧耶心鈎印を結して胸心上に向け、左の一手は曲げ耳上に向て金剛鈎斧を執り、右手は直に頂峻下に向て五股鐵耽囉を把る。周旋して火を生じ、首に五智冠を冠し、口を閉づとあり。

四臂三鈷戟及び一鈷杵を持する像 胎藏界曼荼羅の月曆忿怒像、諸説不同記第四に、現圖、金剛拳の左に在り。身青黑色にして、赤黒の髮に金線冠を戴く(或圖は天冠)、三目四臂にして極忿怒の形を作し、口を開て笑へる形、四牙上に出づ。冠の繪の端屈曲して左右に向く(或圖は上に向く)。當前の兩手は拳を成して腕を交へ、大指相並びて各頭指を捻し、右次手は少しく肘を擧げ、拳を堅て身に向け、三胎戟を持し、左次手は少しく臂を擧屈し、肘を垂屈し、拳を覆ふて指頭を身に向け、一胎杵を持す(或圖は口を開かず、上齒現れ二牙上に出づ。當前の二手は前の如し、但し大指と頭指と各相去る。結跏して坐す(或圖は半跏)と云へり。

二臂五鈷杵及び三鈷戟を持する像 大日經に、應に風方に往て復た忿怒尊を畫すべし、所謂勝三世なりと云ひ、同疏第五に、復た下方西北の隅際に於て、降三世忿怒持明王尊を作せ、首に寶冠を戴き、五胎金剛印を持すと云へるもの、即ち胎藏界曼荼

羅持明院の降三世尊なり。其の形像は、諸説不同記第四に、現圖、閻曼德迦の左西北隅にあり、身青黑色にして、火髮上に向ひて忿怒の形を作し、三目あり、上齒、唇を咬み、兩牙上に出づ。右手は臂を屈して拳を豎てて、彌下に當て三胎戟を持す。青繪を著け二端飛上せり(或圖は戟の中子尤も長し、山圖は劍)。左手は拳を豎て彌に當て三胎杵を執り、磐石に坐す(或圖は冠繪を着けず、或圖は之を着け二端鷹上す)、青珠鬘を繫く。漫衣を後に垂れ、一端右腋より颯出し、右方に向く(或圖は常の如く飄出し、左腋より飄下す)、面を左方に向く、足に環を著け、耳に環珠を著く(或圖は璫)と云へる是れなり。

第三節 軍荼利明王

軍荼利明王 梵名は軍荼利 *Kundali* 瓶と譯す。南方寶生佛の忿怒尊なりと傳へらる。又大咲明王、吉里吉里明王等の名あり。而して此の尊、密家に於て、三部の辨事明王として、甘露軍荼利、金剛軍荼利、蓮華軍荼利の三身あり。即ち胎藏界曼荼羅の中には、蓮華部院に蓮華軍荼利、金剛部院に金剛軍荼利、蘇悉地院に甘露軍荼

利尊在すとす。其の中

蓮華軍荼利像 は、胎藏界曼荼羅蓮華部院の中、正觀自在菩薩の右側に在ッ。諸説不同記第三に依るに、蓮華部君吒利(中略通身綠色にして火髮上に向く(或圖肉色)耳環を著く、山圖は面に三目あり)。頭に金線冠あり、使者眷屬は、多くは此の冠を著く、繪なし。面は怒相を作し、兩手の大指、小指の甲を押へ、餘は三胎の如くし、臂を交へて各一含蓮華を持す(或圖山圖、右手は掌を仰ぎて指頭を垂下し、左は拳にして胸に當つ)と云へる是れなり。

金剛軍荼利像 は、之に二臂像あり、八臂像あり。

二臂像 胎藏界曼荼羅金剛部院の中、金剛薩埵の前左に在るもの、其の像、目を怒し、火髮上に向ひ、金線冠を著け、身青黑色にして、兩手、大指、小指の甲を押し、餘は開きて腕を交へて胸を抱き、天衣を被たり。

八臂像 は、陀羅尼集經第八に、其の像、遍身青色にして、兩眼俱に赤く、髮を攪て髻と成せよ、其の頭髮の色は、黒赤交雜して三昧の火焰の如く、眼を張りて大に怒り、上齒皆露れ而も下唇を咬み、大瞋面を作す。二の赤蛇あり、兩頭を相交し、垂れて胸前

に在り、頭仰て上に向ひ、其の兩蛇の尾は、各像の耳を穿ち、尾の頭は垂れ下て肩上に至れり、其二蛇の色は、黃候蛇の如く赤黒間錯せり。其の像に入臂手あり、右の最上手は跋折羅を把り、臂を屈して上に向け、下の第二手は長戟の柱を把り、臂を屈して上に向く、其の戟は上下に各三叉ありて、皆鋒刃あり、一頭は上に向ひ、一頭は地を拄ふ。下の第三臂は左の第三臂を壓し、兩臂相交へて膺上に在り。右手の中には兩箇の赤蛇を把り、其の蛇相交して各像面に向ふ。左手も亦一箇の赤蛇を把り、兩手各跋折羅の印を作し、兩手大指を以て各小指の甲を捻し、餘指皆申ぶ。即ち左手を以て右腋の前を壓し、次に右手を以て左腋の前を壓す、即ち是れ身印なり。下第四臂は、仰ぎ垂れて下に向け、右腕に著する勿れ、五指皆申べて施無畏手なり。左の上手の中には金輪の形を把り、臂を屈して上に向く、輪に八角ありて、穀輞成具す。下第一手は、中指已下の三指各屈して掌に向け、大指は中指の上節の側を捻し、頭指を直豎し上に向て之を申べ、其の臂肘を屈して手臂を左に向く。下第四手は横に左跨を覆ひ、指頭を右に向く。八手腕中、皆金釧を著け、紫色地散華錦の天衣を以て、膊項背に絡ひ、其の天衣の頭を左右に分ち各垂れて下に向はしめ、將に縁の表にして

肉紅の裏の帯を以て、用て其の腰に繫け、虎皮と錦とを其の兩胯に鞆す。其の兩脚の脛には、各赤蛇ありて、其の脚脛を絞す、其の兩蛇の色は、赤黒間錯す。仍て其の像をして七寶の雙蓮華の上に立てしめ、其の右脚の指還て右邊に向ひ、其の左脚の指還て左邊に向ふとあり。覺禪鈔に載する所の八臂像は、蓋し此の形像なり。又智證大師請來五大尊中の軍荼利。十卷抄第八に、一面八臂にして、左右の一手は根本印を結し、右第二手は拳に作して風指を申べ、次手は三古杵を持し、下手は五指を舒べて掌を仰ぎ、左第二手は拳を作して左股上に於て三古鉞斧を持し、第三手は輪を持して上に擧げ、次手は索を持すとあり。

甘露軍荼利像 は、之に二臂像、四臂像、八臂像等あり。

二臂合掌像 胎藏界曼荼羅蘇悉地院の軍荼利菩薩像は、二手虚心合掌して、其の頭指並に大指を屈して相捻し、下に向て心に當つ。

二臂棒及び羅索を持する像 是れ八大明王の中の大咲金剛なり。大妙金剛大甘露軍荼利焰髮熾盛佛頂經に、虚空藏菩薩、大笑金剛明王を現じ、灰黑色の光明を放ち、口に大笑形を現じ、二牙上出し、左手を以て一青棒を柱へ、右手には羅索を執ると

ある是なり。

四面四臂像 甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌に、四面四臂にして、右手は金剛杵を執り、左手は滿願の印にし、二手は羯磨の印を作し、身に威光焰鬘を佩び、月輪中に住す、青蓮華色にして、瑟瑟の盤石に坐す。正面は慈悲、右第二面は忿怒、左第三面は大笑の容に作し、第四の面は微しく怒り口を開くとあり。

八臂像 仁王護國般若波羅蜜多經道場念誦儀軌卷上に五菩薩の威怒身を明す中、其の金剛寶虛空藏菩薩の下に、教令輪に依て、威怒甘露軍吒利金剛を現作し、八臂を示現すと云へる是れなり。但し其の八臂の印契を説かず。猶ほ八臂軍荼利の形像を説くもの二説あり。

其の一は、一字佛頂輪王經第一に、軍吒利金剛菩薩は、八臂三目にして、拘牙上出す。半跏趺坐し。身、青色に作す。一手は三股金剛杵を把り、一手は三戟叉を執り、一手は輪を把り、一手は鉞斧を把り、一手は施無畏にし、一手は羂索を把り、二手は印を結すと云へるもの。

其の二は、攝無礙經に、髮髻鬘髻の冠、雷電黒雲の相、三目怖畏の相、八臂に器械を操る。左定は金剛を握り、左理は戟鎗を持し、左定は金剛鉤。右慧は三股を執り、右智は拳にして脇を押し、先づ金剛拳に作し、戒風輪を直豎して右脇の下に當て、右慧は施無畏にし、定慧は大瞋印なり(中略)。獸王の皮を衣と爲し、白蓮にて兩足を承くと云へる是れなり。普通に弘く世に行はるるは、此の攝無礙經の説に依れり。

第四節 大威德明王

大威德明王 梵名は閻曼德迦 Yamantaka. 又六足尊、降閻魔尊等と稱す。西方無量壽佛の忿怒尊なりと傳へらる。胎藏界曼荼羅の中には、持明院中般若菩薩の左に居す。形像は六面六臂六足なれども、其の印契持物に就ては稍異説あり。

胎藏界曼荼羅持明院の明王像 は、諸説不同記第四の説に依るに、通身青黒にして、火髪を立てしめ、忿怒の相を作す。當前の一面は、口を開て大笑し、四牙並び出づ。左右に各一面あり、頂上に三面あり、上齒、下を咬む。六臂六足あり。當前の兩手は内に又して中指を合堅し(或圖は無名指を外に相又す)。右の一手は肘を開き下垂して拳を右に向けて棒を持し、一手は臂を擧げ肘を豎てて身に向て劔を持し、左の

一手は肘を開きて而して垂れ、拳を堅て左に向て輪を持し、一手は臂を舉げて身に向て三胎戟を執る(或圖は戟)青繪を着け、兩端飛上す。豹皮を裙と爲し、冠繪を着けず。磐石の座に坐して、右の三足を垂れ、足に環を着け、膝脛皆露はる。耳に環珠を着くと云へり。

十卷抄阿婆縛抄等に掲ぐる所の形像は、其の印契持物は、今に同じきも、水牛を以て座と爲せることは前配の胎藏界曼荼羅中の圖像と異なれり。此の外に異像としては

六臂劔戟弓箭楛及び索等を持し臥水牛に坐する像 大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌に、閻曼德迦金剛は、青黒色にして、六頭六臂六足あり、各器械を執る。左上手は戟を執り、次下手は弓を執り、次下手は索を執る。右上手は劔を執り、次下手は箭を執り、次下手は楛を執ると云へり。其の圖覺禪鈔に出づ。但し其の右第三手の楛形は獨胎に似たり。

六臂同立水牛上に立つ像 又覺禪鈔に引く所の炎曼德迦萬愛法に依るに、其身六面六臂六足にして水牛に乗ず。六面は頂上に三面あり、中面は菩薩形にして柔軟なり。其の面の頂に阿彌陀佛あり。又六臂あり、左一に鈍、二に輪索、三に弓、右一に劔、二に寶杖、三に箭なり。彼の弓を以て射る勢なり。又六足あり、左の三足は輪に立ち、右の三足を舉ぐ。彼の輪下に水牛あり、牛の四足は花座に立てり」とあり。同抄には、此の像を中尊とし、周遍火焰中に十二支神、外院に八大童子を安ぜる曼荼羅圖を掲載せり。

六臂利劔を持する像 大妙金剛大甘露軍荼利焰鬘熾盛佛頂經に、妙吉祥菩薩六臂六頭六足金剛明王を現作す。青黒色の光明を放ち、齒下唇を咬み、兩目及び眉を堅て、手に利劔を持すと云へる是れなり。

此の外には仁王護國般若波羅蜜多經道場念誦儀軌卷上に、教令輪に依て六足金剛を現作す。手臂頭各六あり、水牛上に坐すと云へる始め、攝無礙經、聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法、大方廣曼殊室利童眞菩薩華嚴本教讚閻曼德迦忿怒王眞言阿毗遮嚩迦儀軌品等には、其の形像の事に言及せるも、而も六臂一一の印契器械の事を記さざるなり。

第五節 金剛夜叉明王

金剛夜叉明王 梵名は縛曰羅藥乞叉 *Vajra Yakṣiṇī* 金剛盡又は金剛噉食とも稱す。北方不空成就佛の忿怒尊なりと傳へらる。金剛界曼荼羅中北方四親近の一なる金剛牙菩薩を、或は又金剛夜叉菩薩と稱す。又仁王護國般若波羅蜜多經道場念誦儀軌卷上に、五菩薩の威怒身を明す中、北方金剛藥叉摧伏一切魔怨菩薩の下に、教令輪に依て威怒淨身金剛を現作すと云へり。或は烏芻沙摩明王と同體なりとする説もあり、蓋し同一本誓の尊なりと知るべし。形像は、金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經大金剛焰口降伏一切魔怨品に、金剛夜叉の形、六臂にして衆器を持せり。弓と箭と劔と輪との印、及び薩埵の羯磨となり。五眼忿怒を布き、三首にして馬王の髻あり、珠寶遍く嚴飾せりと云へり。即ち今弘く世に流布する所の像は、三面六臂にして、正面に五眼、左右の面に各三眼あり。右一手に五鈷杵、次手に劔、次手に箭を持し、左第一手は金剛鈴、次手は輪、次手は弓を持し、左足を上げ、右足を伸べて蓮上に立てり。阿婆縛抄に、南師御許に、阿闍梨の君、金剛夜叉二幅なるを拜し奉る、三面各五眼あり、

左足之を擧ぐ。又唐綾苗本には、三頭に各自馬頭之れあり、中面に五眼あり、餘は三眼常の如し、左第一手は三骷髏、右の一手は二箭云々とあり。覺禪鈔に載する所の圖は、左足を擧げず、右足を屈す、亦異説あるを知る可し。已上不動、降三世軍荼利、大威德、金剛夜叉の五尊を

五大尊 又は五大明王と云ふ。但し台密家三井の所傳にては、此の中金剛夜叉明王を除き、烏芻沙摩明王を加へて五尊となす。之に就きて、十卷抄第八には、智證大師請來の五菩薩五忿怒の中、北方の忿怒尊は一面四臂にして陀羅尼集經の烏瑟婆摩明王の如きは如何。仁王經軌に云はく、北方金剛藥叉菩薩、手に金剛鈴を持す(中略)今案ずるに、此の軌文に依るに、北方に四臂の烏瑟澀摩明王を畫かるも其の失無しと云へり。

第六節 烏樞沙摩明王

烏樞沙摩明王 梵名は烏樞沙摩 *Uchusman* 又烏芻沙摩、烏樞瑟摩等に作る。或は穢跡金剛、火頭金剛と稱す。北方不空成就佛の忿怒尊と傳へられ、金剛夜叉と同

本誓の尊とせらる。形像は、二臂像、四臂像、六臂像、八臂像等の種種あり。

四臂劔羅索打車棒及び三股叉を持つる像。大威力烏樞瑟摩明王經卷上に、大威力烏樞瑟摩明王、大忿怒の形、目は赤色、通身艶黒色にして體を擧げて焰起り、而も四臂あり、右上手は劔を執り、次手は羅索、左上は打車棒、下は三股叉なり。器械の上に並に焰起れり」とある是れなり。其の圖覺禪鈔に出づ。

四臂杵及び羅索を持つる像。大威力烏樞瑟摩明王經卷下に、通身黒色、四臂あり、(中略)左上手は杵を持し、下は羅索、右上手は並に頭指を屈堅し擬する勢、下手は施願とあり。

四臂拂娜拏及び赤索を持つる像。大威力烏樞瑟摩明王經卷下に、四臂、右手は拂、下手は娜拏を執り、左上手は五指を並舒べ、手を側けて額に近け、微しく其の頭を低れ、禮佛の勢を作す。下手は赤索、目は赤色なり」とあり。

四臂跋折羅索及び數珠等を持つる像。陀羅尼集經第九に、火頭金剛、其の像の身長は佛の一肘、二尺三尺半なるべし、其の光座を除く(中略)其の像、色青くして而も四臂あり、右手は髀に向て跋折羅を把り、左手は肩に向て而も赤索を把る。其の索盤

屈して狀盤蛇に似たり。右手は舒べ下して大指を仰ぎて頭指を搏ちて直下に舒べ、餘の三指を纒に屈して上に向け、左手は臂を屈し上に向て數珠を把り、中指の頭を以て而も其の珠を指す。面貌端正にして極めて姝妙ならしめ、二龍王を畫きて、左髀の上に絡ふ、其の二龍頭相鈎し仰視して、髀前に在り、尾は背上に在り、俱に純赤色なり。又四龍王あり、並に青色に作し、各一臂を絞し、又二龍王あり、亦皆青色にし、各脚脛に絡ふ。其の像の頭上に一の白龍王あり、絞盤して頭を堅つ。其の像、腰下に虎皮を勝に縵し、頭髮火焰悉く皆堅てしむ。但頭上のみならず、項背に亦火焰の光あり」と云へり。

二臂杵及び棒を持つる像。大威力烏樞瑟摩明王經卷上に、身赤色にして、怒形、狗牙露出し、密目、狸眼の如き即ち是れにし、髪は黄色にして上を衝き、左に杵を持し、右は娜拏とあり。其の圖覺禪抄に出づ。

六臂棒三古索輪及び念珠を持つる像。其の像、三目六臂、青紺色にして、右第一手は寶棒、次手は三古杵、次手は索を持し、左第一手は施願、次手は輪、次手は念珠を持す。髑髏頭を瓔珞となし、赤蓮花に坐し、右足を垂るるもの、是れ智證大師の請來の圖と

傳へ、其の圖、十卷抄に出づ。

六臂棒劍及び戟を持する像 其の像、左右第一手は心に當て印を結び、左第二手は獨胎鉤を把り、次手は舒べて外に出し、右第二手は劍を執り、次手は棒を持し、右足を舉げて盤石の上に立つ。其の圖、亦十卷抄に出づ。

八臂唐本像 其の像、忿怒の形、磐石の上に立ち、左右の第一手は印を結び、左第二手は劍、微し短きもの、次手は鈴、次手は絹索を執り、右第二手は輪、次手は長劍、次手は三鈷縛日羅を持す。其の圖、十卷抄に出づ。

八臂唐本穢積金剛像 身、赤肉色、面に三日あり、磐石の上に立ち、左右の第一手は印を結び、左上手は劍、次手は三鈷鈴、次手は索を執り、右上手は鞘の如き物(棒か)、次手は獨鈷金剛杵、次下は弓箭を持す。其の圖、十卷抄に出づ。

八臂六足像 攝無碍經に、髮髻は白蛇を遶らし、身相大青色にして、金剛寶瓔珞あり、甚大忿怒の相、六臂六足の體、左理は檀拏の印、左足は鉞、鎗を執り、左理は金輪を握る。右慧は寶劍を執り、右智は鉞斧の相、金剛寶瓔珞あり、嚴身量る可からず。左理は寶數珠、右慧は三股を執り、右智は滿願印なりと云へる是れなり。

第七節 金剛童子

金剛童子 梵名は迦拏句路太 Kanikrodha。又俱摩羅金剛、金剛羯拏と稱す。彌陀の化身、或は金剛手菩薩の化身と傳へらる。胎藏界曼荼羅の中には、金剛部院中に位す。形像は、之に二臂像と六臂像とあり。其中

二臂右手施無畏、左手跋折羅を持する像 無量壽佛化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法に、本尊像、長一尺五寸、而も丁字立に作し、足は青蓮華を踏む。身、黃雲色に作し、髮赤く上に繚亂し、種種の諸瓔珞環釧を以て嚴身し、虎皮を用て跨に縵し、左に跋折羅を執り、右は下げて施無畏にし、當に極迅の形を作すべしとあり。又

二臂右手與願勢、左手跋折羅を持する像 胎藏界曼荼羅金剛部院の金剛童子像、諸説不同記第四に、現圖、離戲論の前右に在り。火髮上に向ひ、面は忿を作し、少しく目を怒して口を開き、或圖、金線冠髻髮無し、三目にして眉を嘖み、目を怒らし、口を開かず、山圖は赤色。右手は肘を開き垂れて與願手に似たり。右肩の上に於て七化佛を現す。玄法儀軌に云はく、纒に眞言の句を持すれば、化佛、口より出づ云云、或圖

は之れ無し。左手は太だ肘を挙げ、拳を身に向て三指を執る、或圖は獨股。右足を斜にし、左を屈して指頭は還て左に向け、右は蓮華を踏む。頭を右方に側け、眼睛は左眸に在りて視る、或圖は上を視る、頭に圓光あり、袈裟を左肩の上に繫け、各飄下す、或圖は天衣を被着し、右の上肩に飄し、左の頭は上に向ひ、右の頭は下に屈すとあり。蓋し普通に流布する二臂像なり。十卷抄、阿婆縛抄等に其の圖を出せり。二肩、左手施願、右手跋折羅を持する像。聖迦拏忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷上に、右手を以て金剛杵を持し、斜に舉げて上に向け、左手は施願手に作し、脚は阿里茶立に爲し、盤石の上を踏むと云へり。文中の阿里茶立とは、又丁字立とも稱す。正しく右脚を立てて斜に左脚を引き、世の丁字の如く身を曲げて倚立するを云へり。

二臂跋折羅及び金蓮華を持する像。無量壽佛化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法の説、其の像、紅蓮花色にして、右手に跋折羅を持し、左手に金蓮華を持し、脚、金蓮華を踏む。髮中に化佛あり、右に錫、左に澡罐を持し、兩邊背に一佛あり、孰れも金色にして又錫杖を持すと云ふ。

六臂像。聖迦拏忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷上に、其の像、獨身、海より涌出し、大海の中に住す。身吹瑠璃色の如くにして、身に六臂あり、臂膊臚停相貌充滿せり。面に三目ありて、其の目は赤色なり。首に寶冠を戴き、狗牙上出し、口、下唇を齧み、眉を擧めて威怒す。又海中に於て一寶山を畫き、像、左足を以て寶山を踏む。山上に妙蓮華あり、以て其の足を承く。右足は海水中に在りて立ち、其の半膝を没す。右の第一手は底里商俱金剛杵を持して擲勢を作し、右第二手は母娑羅棒を持す。謂はく棒の一端鐵杵の形の如し。右の第三手は、鉞斧を執り、左の第一手は棒を把り、左の第二手は擬勢の如く金剛拳を作して頭指を舒べ、左の第三手は劍を持す。一大蛇を以て身上に於て角絡結繫し、又一切の毒蛇を以て膊、臂、腕、腰、條、瓔珞、及び耳瑤繫髪と爲し、又一大蛇を以て腰を繞らすこと三匝、身背に圓光あり、火焰圍繞す。火焰の外に於て、其の雷電あり、以て相輔翼すと云へり。其の圖、十卷抄、阿婆縛抄等に出でたり。

第八節 無能勝明王

無能勝明王 梵名は阿波囉爾多 Aparijita. 釋迦佛の化身なりと云ひ、又地藏菩薩の所變なりと傳へらる。胎藏界曼荼羅の中には、釋迦院中に在りて、釋迦佛の前右に侍せり。形像は、二臂像、並に三面四臂像、四面四臂像等あり。

四面四臂像 是れ胎藏界曼荼羅釋迦院の無能勝金剛像なり。諸説不同記第七に依るに、青色にして火髪あり、四面四臂あり、正面及び左右の面は三目あり、左右の面と頂上の面には金線冠を著く、四面冠繪無し(或圖は三面にして額に目なし)。肉色にして、右手は拳を豎てて頭指を舒べ、心に當て、次手は臂を舉げて拳を仰ぎて頭指を舒べ、掌を反して上に向け(或圖は拳を改め掌を舒べ、反して内に向く、或圖は拳を豎て、額に當つ)。左手は内に向て鐸を持し、次手は下垂して肘を開き拳を左に向け、三胡戟を持す(或圖は繪を著く)。面を右方に向け、右膝を屈して左足を舒ぶ。各足下に蓮華あり、衣の端背に懸り、裾も亦飄綉す(山圖は赤色にして四面四臂あり、右に獨胎を持し、次は左を豎てて三胎戟、次手は人戟なり)。足に環を著く(或圖無し、或圖肉色、三面四臂、右次手は臂を舉げて掌を反し、左は拳にして胸に當つ)と云へり。

三面四臂三古戟及び棒を持する像 大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼

羅次第儀軌法に「四臂、青色にして三面あり、火髪上に聳ふ。右一手は拳に作し、頭指を豎て、一手は三股戟を執り、一手は施願、一手は棒を執り、蓮華に安坐す」とあり。

三面四臂獨鈷鉞斧及び三鈷戟を持する像 十卷抄に「圖、青色、三面四臂、右第一手は拳を作して頭指を舒べて高く舉げ、次手は杵を持し、左一手は鉞鏘を持し、次手は三股杵を持す」とあり。十卷抄、阿婆縛抄等に出す所の圖像、右一手掌を揚げ、一手獨鈷を持し、左一手鉞鏘、一手三胎戟を持せり。

一面二臂像 大妙金剛大甘露軍荼利焰鬘熾盛佛頂經に「地藏菩薩、無能勝金剛明王を現作す。遍身黄色にして火光焰を放つ。右手を以て一金剛杵を擲ち、左手は擬印を作して、口に向ふ」と云へり。

第九節 大輪明王

大輪明王 梵名は斫羯羅縛日羅 Mahā-cakra-vajra. 又大輪金剛と稱す。慈氏菩薩所變の身なりと傳へらる。形像は、大妙金剛大甘露軍荼利焰鬘熾盛佛頂經に「慈氏菩薩、大輪金剛明王を現作す。遍身黄色にして大火を放ち、右手は八輻金剛輪を持

し、左手は一の獨股金剛杵を柱ふとあり。十卷抄、阿婆縛抄等に其の圖を出せり。

第十節 步擲明王

步擲明王 梵名は播那曩結使。Padanāksapa 普賢菩薩。所變の身なりと傳へらる。形像は、之に二臂像と十八臂像とあり。

二臂像 大妙金剛大甘露軍荼利焰鬘熾盛佛頂經に、普賢菩薩、步擲金剛明王を現作す。右手を以て一旋蓋を把り、左手には金剛杵を把る。遍身虛空色に作し、火光焰を放つとある是れなり。

十八臂像 十卷抄に、遍身青色にして十八臂あり。右顧して右足を舒べて左膝を屈す。右上手は垂下して大指を屈して掌中に入れ、中名指之を握り餘の二指を舒ぶ、次手は榜排を持して垂下し、次手は掌を舒べて下に向く、掌中に火焰あり、次手は鉞斧、次手は玉環、次手は堅てて指を擬し、指上に輪あり、次は拳にして、大指、頭指の側を押し、次に絹索、次は五指を舒べて掌を仰ぎ弓を持す。左上手は三股杵、次は劍、次は圓石を握り、次は短柄槌、次に兩隻箭、次に杖、次に獨古、次に掌を舒べて頭指大指

を仰ぎ捻する契、次に寶棒、棒は上は龜に下は細なり。髮散し、堅ち、赤色にして、龍を以て鬘瓔珞と爲し、利牙出現す、赤色の袍、赤色の傘蓋あり。前に魔王あり、左右に金剛童子あり、具に儀軌の如しと云へる是れなり。

八大明王 已上、十明王の中、烏樞沙摩、金剛藥叉、金剛童子の、三明王を除き、不動、降三世、大笑、軍荼利、六足尊、焰曼德迦、大輪、無能勝、步擲の七金剛明王に、觀音所變の馬頭金剛明王を加へて八大明王と稱す。

第十一節 愛染明王

愛染明王 梵名は羅誡 Raga. 或は羅誡羅閣 Raga-rāja (愛染王) 摩訶羅誡 Mahā-riga (大愛)とも稱す。是れ大愛欲、大食染の三昧に住する尊にして、大日如來の所變、或は金剛薩埵の所變、或は金剛王、金剛愛菩薩の所變、或は薩王、愛喜四尊合成の所變の身なりと傳へらる。形像は、大低六臂なれども、其の印契、器杖に種種不同あり。又兩頭二臂のものあり。其の像は、金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經、愛染王品に、淨白の素縹を取りて、愛染金剛を畫け、身色は日暉の如くにして、熾盛の輪に住し、三目にして威

怒に視る。首髻に師子冠あり、利毛にして忿怒の形なり、又五鈷鉤を安じて師子の頂に在り。五色の花鬘を垂れ、天帶身に覆へり。左の手には金鈴を持し、右には五峰の杵を執り、儀形、薩埵の如くして衆生界を安立す。次の左は金剛弓、右は金剛箭を執り、衆星の光を射るが如くにして、能く大染の法を成ず。左の下の手には彼を持し、右の蓮は打勢の如くす。一切の惡心の衆、速に滅すること疑有るなし、諸の華鬘の索を以て絞結して以て身を嚴り、結跏趺坐を作して、赤色の蓮に住せり。蓮の下に寶瓶あり、兩畔に諸寶を吐くと云へるを本據として圖畫せらる。但し其の像に種種の異あり。今覺禪鈔に載する所に依り、其の印契持物の相異を注記す。

責任持本像(仁和寺圓堂像之に同じ) 右第一手は五胎、次手は箭、次手は蓮を持し、左第一手は金剛鈴、次手は弓、次手は拳にして高く擧ぐ。此の一圖は日輪下に寶瓶無し。

後入唐請來理趣經曼荼羅中の像 右三手、左二手の持物は前圖に同じ。但し左の一手は外に向て大に圓き物を握り、首を左に傾く。仁海所傳の本尊、宇治經藏の大師の御本尊は、此の圓物を日輪と作せり。

宇治平等院丈六像 左第一手は鈴、右第一手は五胎常の如し。左第二手は弓、右第二手は箭を持し、額上に當て弦を張りて射る勢を作し、右第三手は蓮、左第三手は赤袋様物を持す。像後には日輪無くして火焰あり。是れ成尊の進造する所なりと傳へらる。

智證大師所傳像 持物は責任所持本の圖に同じきも、左右第二手の弓箭、頂上に當て弦を張りて射る勢を爲すを異とす。

大唐所傳の圖 此の鈔に、御抄に云はく、或抄に云はく、大唐所傳の像、種種不同あり。或は寶珠を持し、或は人頭を持し、髮毛あり、諸相を具足す、或は鈎を持し、或は輪を持し、或は甲冑を持し、或は月輪を持すと云ひ六圖を出す。

其の一は、左の第三手に鈎を持す。餘の五手は常の如し。

其の二は、左の第三手に輪を持す。餘の五手は常の如し。

其の三は、左の第三手掌を舒べ、施願手の如くす。餘の五手は常の如し。

其の四は、左の第三手に寶珠を持し、頭を左に側く。餘の五手は常の如し。

其の五は、左の第三手に三瓣寶を持す。餘の五手は常の如し。

其の六は、左の第三手に甲冑を持す。餘の五手は常の如し。

其の圖の後に、已上六體、口傳を傳ふるの後所所の古本を求めて之を圖す。用否は人に依る、此の外或は般若梵經、或は人全體、若しは印鑑あり、又兩手に弓箭あり。又壽量品之を持す。又盤石并に師子を以て座と爲す、繁を恐れて圖せず。或抄に云はく、經に已に五法を説く、故に持彼手は、阿闍梨所求に隨て用ゆべし云云。法勝寺圓堂の愛染王の座は角なり瓶なし云云とあり。更に二圖を出す。

其の一は、左右第一手に鈴杵を持せず、心に當て印を結し、左第二手に弓、第三手に梵篋を持し、右第二手は箭、第三手は五鈷杵を持す。

其の二は、左第三手に人全體を提げ、右第三手は掌を堅て頭中名指を屈す。餘の四手は常の如く鈴杵弓箭を持せり。又

愛染曼荼羅の中尊、左第三手に輪を持し、餘の五手は常の如くす。但右第二手は箭二本を持せり。又別に

馬陰藏三昧敬愛像、として、右第三手に寶棒を持し、左第三手を施願にし、餘の四指は常の如く鈴杵弓箭を持せる一像を載せり。

二頭二臂鈴杵を持する像、此の鈷に引く所の羅識記に、像に祕密の形あり、其の

像一身兩頭、但し左面は瞋にして赤く、右面は慈にして白く、遍身竝に白し、但身色の赤白は事に隨ふ云云、像の形は、金剛薩埵の如く、左手に鈴を持し、右手に杵を持す。

頂上に五色の光を放ち、月輪中に處し、紅蓮華に坐すとあり。其の圖覺禪鈷に出づ。

二頭二臂箭及び杵を持する像、十二臂大日等を加て建立せる愛染曼荼羅中に圖する所の像なり。左手に杵を持し、右手に二箭を持せり。其の圖覺禪鈷に出づ。

二頭二臂人形杵を持する像、此の抄に引く所の佛母曼荼羅愛染法に、二頭、各冠を著く、右面は赤にして怒、左面は黄にして慈、右手に人形五鈷を執るとあり。

愛染明王と同本誓なりと傳へらるるものに、金剛愛菩薩、吒枳王、平等王、金剛王等あり。覺禪鈷に其の圖を載す。其の中

愛菩薩、其の像、頭に師子冠あり、二手に箭を持す。

吒枳王、覺禪鈷に、或傳に云はく、其の形四面、面毎に五目あり、所謂額に一目、左右本目の下に各一目あり。首に寶冠を載き、髪は火焰の如し、身色は白色、少しく青色にして四臂あり。左の一手弓を持し、空に上げ、左の一手に箭を持し、胸間に當つ。

左の一手に彼を取らしめ、右の一手は白蓮花彼を打つの勢なり。四足あり、左の二足は上に置き、右の二足は下に垂れ、蓮華を踏み、蓮華に坐し、日輪に住す。彼の座下に四面の師子あり、四足の下に各自蛇を踏む、其の師子の口より如意寶珠を雨らすと云へる是れなり。

平等王 閻魔天なり。其の像右手に檀茶印、左手に人を持ち、水牛上に坐す。

金剛王 是の尊、金剛界曼荼羅の金剛王菩薩と尊形全く異なる。其の像、金剛王菩薩秘密念誦儀軌の説に依るに、身に四臂あり、上の二は端箭の勢に住し、下右手は仰で心に當て、金剛杵を持ち、下左手は金剛拳と爲し、左の腰側に安じ、金剛鈴を持すとあり。其の像、左、二手に弓及び鈴、右、二手に箭並に杵を持せり。其の圖、十卷抄、覺禪鈔等に出づ。

第十二節 孔雀明王

孔雀明王 梵名は摩訶摩瑜利 *Maha-mayuri*。又孔雀王母菩薩と稱す。胎藏界曼荼羅の中には、蘇悉地院に在す。形像は、之に亦二臂像、四臂像等の異あり。其の中

二臂蓮及び孔雀尾を持する像 胎藏界曼荼羅蘇悉地院の孔雀王母菩薩は諸説不同記第六に、右手は肘を豎開して、掌拳を身に向け、孔雀尾を持ち、左手は掌を豎て、頭中名指を屈し、蓮を執り、面を左に向け、微しく仰視す(山圖は右膝を豎つ)とあり。

四臂蓮俱緣果吉祥果及び孔雀尾を持する像 大孔雀明王畫像壇場儀軌に、蓮華の胎上に於て、佛母大孔雀明王菩薩を畫く、頭を東方に向く、白色にして、白繪の輕衣を著け、頭冠瓔珞耳瑠臂釧種種莊嚴し、金色の孔雀王に乗じ、白蓮華上或は青蓮華上に結跏趺坐し、慈悲の相に住す。四臂あり、右邊の第一手は開敷蓮華を執り、第二手は俱緣果(其の果の状は木瓜に似たり)を持ち、左邊の第一手は心に當て、掌に吉祥菓(桃李の形の如し)を持ち、第二手は三五莖の孔雀尾を執ると云へり。孔雀經法の本尊として、弘く流傳するものは、大抵此の像なり。又

六臂像 其の像、左右第一手は心に當て、合掌し、左第一手は臂を開き、豎て、拳にして、其の頭指を豎て、次手は弓を持ち。右第二手は戟を執り、次手は二箭を持せり。此の像、亦世に行はるれど、未だ其の經軌の由る所を詳にせず。

八臂像 印度西域西藏等所傳の圖像中に有り。但し是れ亦未だ經軌の據る所

を詳にせず

第十三節 大元帥明王

大元帥明王 梵名は阿吒婆拘 *Atavaka*、林又は林野と譯す。又元帥大將と名づく所謂曠野鬼神大將なり。形像は、四面八臂像、一面四臂像、六面八臂像、菩薩形一面二臂像、十八面三十六臂像等あり。其の中

四面八臂像 阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌卷中に、阿吒薄拘元帥、身黒青色にして、身長六尺あり。四面あり、當前は佛面に作す。左面は虎牙相又し、三眼あり、眼赤きこと血の如し。右面は神面瞋相を作し、亦虎牙相又し、三眼あり、左右牙を安じ、髭髪あり。頭上の一面は惡相を作す、亦三眼あり、虎牙相又し、眼赤きこと血色の如し。最上の頭には赤龍を用て髻に纏ひ、火焰連りて頂上に聳へ、身に蛇を懸く。八臂あり、右上手は輪を執り、次は槩を執り、次は右第三手と前に當て合掌して供養印を作し、次下手は索を執る。右上手は跛折羅を執り、次下手は棒を執り、次下手は印を作し、次下手は刀を執る。即ち腕臂の上に皆蛇を纏はし七寶絞絡甲を

着く、膊上に皆龍あり。龍は膊を胸前に出せりと云へる是れなり。其の圖、十卷抄等に出づ。

一面四臂像 阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌に、大怒の形を作し、四臂あり、左上手は千輻大輪を執り、右下手は大怒印を作し、大母指を以て中指無名指の中節の上を押し、小指と頭指とは膝に直堅す。左下手は勝に托し、右上手は跛折囉を執る。七寶の冠瓔珞あり、結髪鬘黒、眼白く怒瞋し、看こと鈴を懸けたるが如し。上唇、下唇を嚙み、舉身青黒奥色にして、大蟲皮を禪となし、脚に二藥叉を踏み、鞋を著くと云へり。其の圖、別尊雜記等に出づ。

六面八臂像 是れ常曉律師所傳と傳へらるるもの、其の像、左右の二手は心に當て合掌し、左上手は輪、次手は三鈷戟、次手は寶棒を執り。右上手は跛折羅、次手は劔、次手は絹索を持せり。其の圖、十卷抄等に出づ。

菩薩形一面二臂像 阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌に、即ち菩薩形を畫く、一に虚空藏菩薩の形に作り、頭に七寶の花冠を戴く。二手あり、一手は蓮花を把り、一手は施無畏なり。面目長作、唯須らく大慈悲にすべしと云へり。是れ常曉

律師の請來錄に所謂大悲身像に當れり。其の圖、別尊雜記等に出づ。
十八面三十六臂像、覺禪鈔に「圖像十八面三十六臂」とあり、但し圖像並に畫像法の經の文を出さざる故に、其の形像を詳にせず。

第五章 天 像

第一節 毘沙門天

毘沙門天 梵名は毗沙門 *Vaiśravaṇa*、譯して多聞天と云ふ。護法善神として四大天王中、北方の守護神なり。或は俱尾羅 *Kuvera* と異名同尊なりとの説あり。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の北方に居せり。形像は、其の所持の器械に就きて種種の異説あり。

二臂寶塔及び寶棒を持する像 金剛頂瑜伽護摩儀軌に「北方毘沙門天は、二鬼の上に坐し、身に甲冑を著け、左手の掌には塔を捧げ、右手は寶棒を執る。身は金色なり」と云ひ、毘沙門王經に「毘沙門天王、左手は塔を捧げ、眼塔を見、右手は寶棒を執持す」とあり。胎藏界曼荼羅外金剛部院の像、亦今の如く左に塔、右に棒を持す。諸説不同記第十に「現圖門東にあり、金色にして甲を被り冠を着け、右手は腰側に當て棒を持し、或圖は爛に當つ」。左手は掌を仰ぎ指頭を左に向け、掌に寶棒を持す、或圖は左

膝を堅つ」と云へり。十二天供儀軌の説並に金剛界曼荼羅外院二十天中の毘沙門像亦之に同じ。此の像尤も弘く世に行はる。

二臂寶塔及び楯を持する像 般若守護十六善神王形體に、吠室羅摩拏善神青黑色にして瞋王の相を現じ、閉唇の相を作し、右手に金剛楯を持し、左手には全身舍利寶塔を捧げ、甲冑を被り、赤衣を著け、鬚髮は紫色なり」とあり。

二臂三叉戟を持する像 摩訶吠室囉末那野提婆喝囉闍陀羅尼儀範に「天王身に七寶金剛莊嚴の甲冑を著く。其の左手は三叉戟を執り、右手は腰に托す」と云へる是れなり。北方毘沙門天王隨軍護法真言の説蓋し之に同じ。阿婆縛抄に其の圖を出す。鞍馬寺の尊は、此の像なりと傳ふ。

二臂寶塔を持する像 聖無動尊安鎮家國等法に「毘沙門天王は、鬼に乗じ、右手に寶塔を持し、左手は腰に又すとあり。

二臂稍及び塔を持する像 陀羅尼集經第十一に「毘沙門天王像法、其の像大小衣服前に准ず、左手は前に同じく稍を執りて地に挂へ、右手は肘を屈して佛塔を撃くと云へり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂寶塔及び三鈷戟を持する像 覺禪鈔に引く所の普賢延命口決に「多聞天、身色黄金、頭冠の上に赤鳥形あり、金翅鳥の如し、天身に甲冑を著け、刀を帶し、左手に寶塔を持し、右手に三股戟を執る」と云へる是れなり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂槩及び金剛杵を持する像 一字佛頂輪王經第一に「多聞天王、左手に槩を執り、右手に金剛杵を執る」とあり。

二臂寶棒を持する像 大孔雀明王畫像壇場儀軌に「北方多聞天王は寶棒を執る」とある是れなり。

二臂寶叉を持する像 藥師琉璃光王七佛本願功德經念誦儀軌供養法に「北方多聞大天王、其の身は綠色にして寶叉を持す」とあり。

二臂寶塔及び寶劍を持する像 阿婆縛抄に引く所の白蓮華經に「寶冠髮髻を嚴り、面門は白黄色にして、左に寶塔を持し、右に寶劍を持す」と云へる是れなり。

二臂弓箭を持する像 兜秬毘沙門 阿婆縛抄に「兜秬毘沙門の事、兜鉢の名字、師に問ふと雖も詳答なし、而る間、玉篇を見て、自然に意を得たり、兜字は訓に首鍪と云ふなり云云、是れ即ち鉢に似たる甲敷、之を著くるが故に名と爲す歟云云。禾に云は

く兜鉢の字、諸文一准ならず、恐らくは是れ梵語歟。兜拔國の王として現ずる所の相なり。彼の兜拔經は新渡の經なり。之を見るべし。世人弓に箭をハケテ引きたるを兜拔毘沙門と云ふなり云云とあり。

雙身四臂像 吽迦陀野天法の説。其の像、雙身二頭、四手足にして、背に依て身を合し、面の色は赤く、衣の色は黒く、甲冑を着く。其の右身の二手は、臂を下し、舒べ腰前に當て、合掌して、獨拈杵を執り、其の左身の二手は、臂を舉げて心に當て、合掌して輪を持せり。是れ毘沙門吉祥二天合體の身なりと傳へらる。其の像、阿婆縛抄に出づ。

一面十臂像 吽迦陀野天法の説。其の像、色赤く、衣黒く、袈裟青し、十手あり、左右第一手は印を結し、左第二手は寶塔、次手は獨拈鈴、次手は金輪、次手は箭及び索を持し、右第二手は利寶鎌、次手は降伏大魔軍大刀、次手は劫災難弓、次手は獨拈及び智慧手(一に鉢に作る)を持すと云ふ。是れ多聞天の究竟圓滿の身なりと傳へらる。

第二節 提頭賴吒天

提頭賴吒天 梵名は提頭賴吒 *Dhīrāśīta* 譯して持國天と云ふ。護法善神として、四大天王の中、東方の守護神なり。形像は之に亦數種あり。

二臂刀及び寶を持つる像 陀羅尼集經第十一に、提頭賴吒天王像法、其の身長量一肘に作る。身に種種の天衣を著け、嚴飾極めて精妙ならしめ、身と相稱はしむ。左手は臂を申べて垂下して刀を把り、右手は臂を屈して前に向け、手を仰ぎ掌中に寶を著く、寶上より光を出すとあり。

二臂槩を持つる像 一字佛頂輪王經第一に、提頭賴吒天王、左手は槩を執り、右手は掌を側け揚ぐとあり。

二臂大刀及び棒を持つる像 般若守護十六善神王形體に、提頭羅宅善神、綠青色にして口を開きて忿怒の相貌を現じ、甲冑を被り、赤色を著け、右手に大刀を持し、左手には鉢を捧ぐ、髪は紫色なりと云へり。

二臂大刀を持つる像 胎藏界曼荼羅外金剛部院東方の像なり。諸説不同、記第八に、現圖、門の南に在り。甲を被り、火髮上に向ひ、天衣を著く。右掌は腰に叉し、左手は刀を持す。面は右に向て坐す、或圖は赤色、山圖も亦赤色、髮髻に冠ありと云へ

り。但し別尊雜記に載する所の像は、右手に刀を突き、左手を其の上に置けり。

二臂鉞を持する像 阿娑縛抄に引く所の白蓮華經に「面門は青肉色にして、左定は利鉞を執り、右惠は腰に着く」とあり。

二臂琵琶を持する像 尊勝佛頂修瑜伽法軌儀卷下に「提頭賴吒天王、手に琵琶を執る」と云ひ、藥師琉璃光王七佛本願功德經念誦儀軌供養法に「持國大天王、其の身白色にして琵琶を持す」とあり。

第三節 毗樓勒又天

毗樓勒又天 梵名は毗樓勒又 *Vīṣṭhaka* 譯して增長天と云ふ。護法善神として、四大天王の中南方の守護神なり。其の形像、是に亦數種あり。

二臂刀及び稍を持する像 陀羅尼集經第十一に「毗嚕陀迦天王像法、其の像、大小衣服前に准ず。左手亦前天王の法に同じく臂を申べて刀を把り、右手は稍を執り、稍の根は地に著く」と云へり。

二臂槩を持する像 一字佛頂輪王經第一に「毗嚕陀迦天王、左手に槩を執り、右手

は掌を揚ぐ」と云へる是れなり。

二臂拔折羅を持する像 般若守護十六善神王形體に「毗盧勒又善神、赤紫色にして忿怒の相を現じ、唇を閉づるの形なり。右に拔折羅、左は腰を押す。甲冑を被り、白青色の衣を著く、鬚髮は紺色なり」とあり。

二臂劍を持する像 胎藏界曼荼羅外金剛部院南方の像。諸説不同記第九に「通身赤肉色にして、甲冑を被着し、肩の上に緋端を着け、目は怒視す、或圖は肉色鬚髯あり。右手は拳にして、彌下に當て劍を持し、左は拳にして腰に又す、或圖は掌を舒べて腰に又す、山圖は赤色、或圖は面を右方に向く」と云へり。又藥師琉璃光王七佛本願功德經念誦儀軌供養法にも、增長大天王、其の身青色にして寶劍を執る」とあり。阿娑縛抄に引く所の白蓮華經の説亦之に同じ。

二臂弓箭を持する像 別尊雜記に載する所の圖、弓箭を持し鬼を踏む。但し未だ其の經軌の由る所を詳にせず。

第四節 毗樓博又天

毗樓博叉天 梵名は毗樓博叉 *Vinopalaka* 譯して廣目天と云ふ。護法善神として、四大天王の中、西方の守護神なり。形像に亦數種あり。

二臂稍及び索を持する像 陀羅尼集經第十一に、毗嚕博叉天王像法、其の像、大小衣服前に准ず。左手前に同じ、唯稍を執るを異とす。其の右手の中、而も赤索を把ると云へり。

二臂槩及び金剛杵を持する像 一字佛頂輪王經第一に、毗嚕博叉灑天王、左手に槩を執り、右手は金剛杵を掌にすとあり。

二臂筆を持する像 般若守護十六善神王形體に、毗盧博叉善神、肉色にして、黒絲を臂に懸け、筆を以て書寫の勢を作し、甲冑を被り、綠色の衣服を著く。鬚髮は赤色にして、微笑の形なりと云へる是れなり。

二臂三戟を持する像 胎藏界曼荼羅外金剛部院西方の像、諸説不同、記第十に、周身黄色にして、赤髮冠あり、其の冠に繪を懸け、端飛上す。甲を被り、緋縶を以て肩を掩ひ、頸下に結す。右手は肘を開堅して、拳を身に向けて、三戟を持し、左は拳にして、腰に又し、左を向くとあり。

二臂絹索を持する像 藥師琉璃光王七佛本願功德經念誦儀軌供養法に、廣目大天王、其の身紅色にして、絹索を執ると云へり。

四天王 已上、毗沙門天已下、提頭賴吒天、毗樓勒叉天に、今の毗樓博叉天王を併て、之を四天王と稱す。又護世四王などとも呼べり。

第五節 訶利帝母

訶利帝母(鬼子母) 梵名は訶利帝 *Hārīti* 歡喜母、愛子母と云ひ、又青色鬼、鬼子母神とも稱せり。元と兒女を噉ふ惡女鬼なり。此の藥叉女、散脂等の五百鬼神を生むが故に、其の稱ありと云ふ。今佛法守護の善神として、兼て兒子を擁護すと傳へらる。形像は、大藥叉女、歡喜母并愛子成就法に依るに、我が歡喜母を置く、天女形に作り、極めて姝麗ならしめ、身、白紅色にして、天繪寶衣、頭冠、耳環あり、白螺を釧となし、種種の瓔珞、其の身を莊嚴し、寶宣臺に坐し、右足を垂下す、宣臺の兩邊に於て、膝に傍ふて、各二孩子を畫く。其の母、左手は懷中に於て一孩子を懷く、畢哩孕迦と名づく、極

めて端正ならしめ、右手は乳に近く吉祥果を掌にす。其の左右に於て并に侍女眷屬と畫くと云ひ、訶利帝母眞言經に、訶利帝母を畫く、天女形に作り、純金色にして、身に天衣を著け、頭冠瓔珞あり、宣臺の上に坐し、兩足を垂下し。垂足の兩邊に於て二孩子を畫き、宣臺に傍て立つ。二膝の上に於て各一孩子を坐せしむ。左手を以て懷中に一孩子を抱き、右手中に於て吉祥果を持すと云へり。其の像の流布するもの二三あり。其の訶利帝の像、左手に愛子を抱き、右手吉祥果を持せるは、大抵相同じきも、其の兒數に就きては、三子、五子、七子、九子等、聊か相同じからず。十卷抄、阿婆縛抄には、三子像と九子像との二圖を載せ、覺禪鈔には、右三子像、九子像の外、五子像、七子像を載す。而して其の七子像は、右手に愛子を抱き、左手に吉祥果を持せり。

第六節 冰揭羅天

冰揭羅天 是れ訶利帝母の愛子なり。形像は、大藥又女歡喜母并愛子成就法に、童子形頂上に五朱紫髻子あり、相好圓滿にして、種種の瓔珞を以て其の身を莊嚴し、荷葉の上に於て脚を交へて而も坐し、右手は吉祥果を掌にし、人に與ふる勢を作し、

左手は掌を揚げて外に向て五指を垂展す。此を滿願手と名づく」と云ひ、冰揭羅天童子經には、童子の形狀に作り、左手は果を把り、右手は垂れて滿願を作すとあり。其の十卷抄及び阿婆縛抄に掲ぐる所の圖は、左手は心に當て吉祥果を持し、右手は垂れて滿願印を作せり。蓋し冰揭羅童子經の説に依りて畫く所なり。

第七節 歡喜天

歡喜天 梵名は毗那夜迦 *Vinayaka*。此に象鼻又は障礙神といふ。又説那鉢底 *Ganapati* 茲に歡喜と云ふ。大聖歡喜天と云ひ、略して聖天と稱するもの、即ち此の天なり。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の北方中に居し、金剛界曼荼羅の中には、其の外院中に在り。形像は、雙身像、一身四臂像、一身二臂像、一身六臂像、一身三頭四臂像等、種種不同なり。其の中

雙身面相着くる像 夫婦二天相抱き面を相着くるもの。毗那夜迦説那鉢底瑜伽悉地品秘要に、二天あり、身相抱きて正しく立ち雙ぶ。象頭人身なり。其の左天は天華冠を着け、鼻牙短く、其の目亦細し、赤袈裟福田相の衣を着け、身白肉色なり。

右天は面目慈ならず、鼻長く目廣く、天冠及び福田衣を着けず、身赤黄色にして唯黒色の衣を以て頸肩に纏ふ。此の天面を以て前の女天の面に着け、愛惜の相を作すとあり。其の圖載せて覺禪鈔にあり。

雙身面肩に着くる像 夫婦二天相抱き各面を以て肩に繋ぐるもの。大聖歡喜雙身毗奈夜迦天形像品儀軌に、其の雙身天王の形像は、夫婦の二天相抱立せしめ、其の長七寸或五寸に之を作る。二天俱に象頭人身、但男天の面を女天の右肩に繋げて而も女天の背を視せしめ、亦女面の面を男天の右肩に繋げて、而も男天の背を視せしめ、足踵皆俱に露現し、手足柔軟なること猶ほ壯肥端正の女人の如し。男天の頭には華鬘なく、肩に赤色の袈裟を係く。女天の頭には華鬘あり、而も袈裟を着けず、手足に瓔珞環あり、亦其の兩足を以て男天の足の端を踏む、此の二天、俱に白肉色にして赤色の裙を着け、各二手を以て互に腰上を抱き、其の右手の背を覆ひ、二天の右手の中指の端を左手の中指の中節の背上に至らしむとあり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

雙身袈裟天冠を着けざる像 毘那夜迦說那鉢底瑜伽悉地品祕要に、二形先の如

く相抱て正しく立つ。唯男天の面を以て女天の右肩に繋げ、而も女天の背を視、亦女天の面を以て男天の右肩に繋げ、而も男天の背を視るなり。目細く、牙短きは婦天と爲す。其の二天並に法衣天冠を着けず、而も本毗那夜迦の身を現すと云へり。阿婆縛抄に出す所の圖、蓋し此の軌の説に會へり。又大聖歡喜雙身自在天毗那夜迦王歸依念誦供養法に、其の形像、夫婦相抱て之を立てしめ、身長五寸、象頭人身、身に天衣及び腰裳を着け、夫の鼻は下に脥し、婦の鼻は上に脥し、四葉を座と爲すと云へり。

雙身歡喜丸及び蒸餅を持する像 大使呪法經に、女は手に歡喜丸を擎げ、男は手に蒸餅を把り、男は左手に女を把り、女は右手に男を把り、面を以て相視る、口鼻俱に白しとあり。

雙身象頭猪頭像 覺禪鈔に引く所の使呪法經に、一を猪頭と爲し、象頭となす。二身各目細し、踰跪して踏む形なりとあり。覺禪鈔に、象頭猪頭の二天相抱きて荷葉上に立てる圖を出せり。象頭は夫天、猪頭は婦天なりと云ふ。

雙身女形菩薩形像 覺禪鈔に引く所の使呪法經に、二像、一身は女形、一身は菩薩

形なり。女形とは毗那夜迦、即ち鬼子母なり。菩薩形とは觀世音の本誓の形なりとあり。

一身四臂左二手棒牙右二手鉞斧歡喜團を持する像 大聖歡喜雙身毗那夜迦天形像品儀軌に、其の形、象頭人身、四臂を具足す。所謂右第一手は鉞斧を執り、第二手は歡喜團盤を把り、左第一手は牙を把り、或は杵を執る、第二手は寶棒を執ると云へる是れなり。十卷抄、覺禪鈔、阿婆縛抄に俱に其の圖を出せり。

一身四臂左二手獨股鉞斧右二手羂索三叉戟を持する像 大聖歡喜雙身毗那夜迦天形像品儀軌に、其の形、象頭人身にして四臂を具足す。左一手は金剛杵を執り、次手は鉞斧を持し、右一手は羂索を執り、次手は三叉戟を持すとあり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

一身六臂左三手刀果盤輪右三手棒索牙を持する像 大聖天歡喜雙身毗那夜迦法に、其の像形端立、象頭人身、左牙は出で、右の牙は折れ、面を少しく左に向け、其の鼻は外に向て瘦す。六臂あり、其の左上手に刀を把り、次手に果盤を把り、下手に輪を把る。右上手に棒を把り、次手に索を把り、下手に牙を把るとある是れなり。毗那

夜迦、識那鉢底瑜伽悉地品祕要の説之に同じ。其の圖、覺禪鈔、阿婆縛抄等に出づ。

一身六臂左三手刀果盤右手棒跋折羅索を持する像 大聖歡喜雙身毗那夜迦天形像品儀軌に、其の形、象頭人身、六臂を具足す。六臂とは、所謂左上手に刀を把り、次手に果盤を把り、下手に輪を把り、右上手は棒を把り、次手は跋折羅を把り、下手は索を把るとあり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

一身六臂左三手刀歡喜團劔右三手棒縛折羅索を持する像 金色迦那鉢底陀羅尼經に、其の身正しく立ち、鼻は右に向て曲り、左上手は刀を把り、次手は歡喜團を把り、下手は劔を把り、右上手は棒を把り、次手は縛折羅を把り、下手は索を把る。身を金色に作し、脚は金山を踏むとあり。是れ金色迦那鉢底と稱せらるるもの、但し阿婆縛抄に掲ぐる所の圖は、縛折羅の代りに三股戟に似たるものを把れり。

一身三頭四臂像 覺禪鈔に引く所の玖目天法の説なり。其の像、一身三頭九目にして、左右第一手心に當て根本印を結し、左手は歡喜丸、右手には蘿蔔根を把れり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

一身三頭四臂像 玖目天法の説。其の像、一身三頭九目、左一手歡喜團、次手に刀

を持し、右第一手に蘿蔔根、次手に棒を持てり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

一身二臂像 胎藏界曼荼羅外金剛部院北方に在り。其の像、諸説不同記第八に依るに、象頭人身、右手に鉞を持し、左手は肘を開きて左に向て蘿蔔根を執り、左に向く(山圖は右歡喜團)と云へる是れなり。

四方六部像 今大聖歡喜雙身毗那夜迦天形像品儀軌の説に依るに

東方摧碎天 亦無臺大將と名づく。其の形は、天人の如くにして、天冠の上に象頭を安ず。左手に傘蓋を執り、右手に劍を持す。

南方飲食天 亦嚴髻大將と名づく。其の形は、天人の如くにして、天冠の上に象頭を安ず。左手に索を執り、右手に華鬘を執る。

西方衣服天 亦頂行大將と名づく。其の形は、天人の如く、冠の上に龍頭を安じ、左手に弓を執り、右手は箭を把る。

北方象頭天 亦金色伽那鉢底と名づく。其の形は、象頭人身にして、左手は白瑠璃珠を執り、右手は寶棒を執ると云へり。其の圖、俱に覺禪鈔に出づ。又金剛界曼荼羅外院二十天の中に、四方に六の毗那夜迦天あり。其の形像は、今金剛界七集の

説に依るに

東方金剛摧天 亦傘蓋毗那夜迦天と云ふ。白肉色にして、二手傘蓋を持す。

南方金剛食天 亦花鬘毗那夜迦と名づく。白肉色、象頭人身にして、左は拳にして腰に安じ、右に花鬘を持す。

西方金剛衣天 亦弓箭毗那夜迦と云ふ。白肉色、象頭人身にして、左に弓を取持し、右に箭端を取れり。

北方金剛面天 亦猪頭天と云ふ。赤肉色にして、左は拳にして腰に安じ、右は鈎を持す。

北方金剛調伏天 亦抱刀毗那夜迦天と云ふ。白肉色、象頭人身にして、左は拳にして腰に安じ、右は劍形を持す。

北方毗那夜迦天 或は歡喜と名づく。白肉色にして、左に蘿蔔根を持し、右に歡喜團を持す。

第八節 吉祥天女

吉祥天女 梵名は室利Śrī、又摩訶室利Mahāśrī、大吉祥天女と稱し、舊譯に功德天と云ふ。古名に洛乞史Laṅkā、又名づく。或は誤て吉祥功德の二名を、二天として歷名せるもあり、是れ毗沙門天王の婦にして、福德を司ると傳へらる。胎藏界曼荼羅の中には、虚空藏院中、千手千眼觀自在菩薩の傍に侍せり。其の形像に數種あり。

二臂右手施呪無畏左手如意珠を持する像 陀羅尼集經第十に、其の功德天の像、身端正赤白色にして二臂あり。種種の瓔珞環釧、耳璫、天衣寶冠を畫作す。天女、左手に如意珠を持し、右手は施呪無畏にし、宜臺上に坐す。左邊に梵摩天を畫く、手に寶鏡を執れり。右邊に帝釋天を畫く、散華供養の天女の如し。背後に各一の七寶山を畫く、天像の上に於て五色雲を作し、雲上に六牙の白象を安じ、象鼻、馬瑙の瓶を絞し、瓶中より種種の寶物を傾出して、功德天の頂上に罐ぐ。天神の背後には、百寶の華林を畫き、頭上には千葉の寶蓋を畫作し、蓋上には、諸天伎樂散華供養するを作す。其の像の底下の右邊に、復た呪師の形を作し、鮮白の衣を著け、手に香爐を取りて、胡跪供養し、白素紬上に於て坐すと云へる是れなり。十卷抄、覺禪鈔、阿婆縛抄等

に俱に其の圖を出せり。淨琉璃寺の吉祥天を始め、普通弘く世に流布するもの、大抵此の像なり。

二臂右手施願左手開蓮を持する像 毗沙門天王經に、吉祥天女の形、眼目廣長にして、顔貌寂靜なり。首に天冠を戴き、瓔珞臂釧、其の身を莊嚴し、右手は施願手に作し、左手には開敷蓮華を執るとあり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂蓮葉上盛花を持する像 胎藏界曼荼羅虚空藏院の尊なり。諸説不同記第六に、現圖、千手の前の右に在り、天女形なり。襜褕袈裟衣を被、左手は蓮葉の上に花を盛れるを執り、右手は掌を豎て、頭中名指を屈して心に當つ、(或圖左手は與願なり)。面を尊に向けて立侍し、座物無しと云へり。

二臂蓮華を執る像 不空罽索神變真言經第十一に、錫鐵を以て功德天の像を造る。半跏趺坐し、手に蓮華を執る。衣服、瓔珞、七寶、瓔珞、而も之を莊嚴すとあり。覺禪鈔に此の文を援引せる下に、二臂盛花盤を執れる像一圖を出し、私に云はく、蓮華を執る手は、本文分明ならず、智泉師の圖を以て之を載す。二手を以て盛花を捧ぐ、又胎藏圖、左手に盛花を持するなりと註せり。阿婆縛抄に、圖に云はく、白色天女形

にして左手に荷葉盛花を持し、右手は相扶くる状云々と云へるもの、蓋し智泉の圖に同じかるべし。

二臂右手與願左手寶珠を持する像。覺禪鈔に引く所の大吉祥天女念誦法に、須らく像を造るに華木を用ゆべし。其の形像は、左に寶珠を持し、右は與願の印を作す。身白色にして、十五歳の女の如く、種種の天衣を以て、微妙莊嚴す。天女形を現するが故に、法衣を著けず、天衣を以て其の身に纏ふ(中略)。右邊に功德天女を畫く、左手は鉢に花を盛り、右は掌を外に向くと云へり。此の説、吉祥、功德を、各別の天女として之を明せり。其の與願の印に就きて、覺禪鈔に、或は云はく、右手與願は、大慈與樂の相を表するなり。自願滿すと説くと雖も、亦他願を滿す云云、宗明の云はく、與願手に所求の事を畫き之を押す。餘尊の與願手も皆此の如くす云々とあり。彼の有名なる大和藥師寺の吉祥天像、亦左手は珠を掌にし、右手は掌を舒べて施願手の如くせり。

第九節 寶藏天女

寶藏天女 梵名吒羅佉、福德を司る天女なり。或は吉祥天と同尊と見做す説もあり。形像は寶藏天女陀羅尼法に、其の畫像の法は、天女の身長二尺五寸、頭に花冠を作す、點する所の花、極妙端正なり、身に紫袍を著け、金帶烏靴あり、右手に蓮華を把り、左手に如意寶珠を把ると云へる是れなり。十卷抄第十に其の圖を載す。但し阿婆縛抄には此の天を以て吉祥天と同尊と見做し、吉祥天法の下に、其の圖像を出せり。

第十節 辯才天

辯才天 梵名は薩羅沙縛底 *Sarasvati*。又妙音天、妙音樂天とも稱す。略して辯天とも云へり。元と印度薩羅沙縛底河を神に擬せるものと傳へ、音樂を司る天、又は福德の神として拜祠せらる。胎藏界曼荼羅には、外金剛院中の西方に在せり。形像は、之に二臂像、八臂像等の異あり。

八臂弓箭刀稍斧長杵鐵輪及び絹索等を持する像。金光明最勝王經第七に、面貌容儀、人見ること樂ふ、種種妙德、以て身を嚴り、目は修廣にして、青蓮の葉の如し(中

略。常に八臂を以て自ら莊嚴し、各弓箭、刀、稍、斧、長杵、鐵輪並に絹索を持す。端正、見を樂ふこと満月の如しと云へる是れなり。十卷抄に出す所の圖は、左第一手には弓、次手は刀、次手は斧、次手は索を持し、右第一手には箭、次手は刀、次手は獨胎、次手は輪を持せり。山城淨琉璃寺舊藏厨子壁板の辯才天像は、其の持物、今に同じきも、其の左右に執持する所の次第は、聊か之と同じからず。即ち左一手は胸に當て絹索を執り、次手は申べて弓を把り、次手は杵、次手は三戟稍を持し、右一手は前に當て輪を執り、次手は申べて箭を持し、次手は刀、次手は斧を持せり。

八臂棒三鈷弓箭輪及び索等を持する像。十卷抄に、女天の形、八臂あり、左第一手には鉞を持し、第二手は三古杵を持し、第三手は弓を持し、第四手は輪を持す。右第一手は鉞を持し、第二手は鈎を持し、第三手は矢を持し、第四手は索を持すとあり。阿婆縛抄に掲ぐる所の圖は、即ち之に當れり。

八臂弓矢寶珠劍棒戟輪及び輪を持する像。是れ近古流布の像なり。其の像、左第一手は胸に當て寶珠を掌にし、次手は三鈷戟、次手は輪、次手は弓を執り、左第一手は劍、次手は鉞、次手は棒、次手は箭を執れり。其の圖、佛像圖彙第三に出づ。

二臂琵琶を持する像。胎藏界曼荼羅外金剛部院に出す所の形像なり。諸説不同記第十に、現圖毗紐天妃の左に在り。左手は肘を開き拳を仰ぎて琵琶の頸を持し、右手は拳に作し、持して之を彈ず。左膝を立てて坐し、頭を少しく右に側く、或圖は枇杷の頭を直くし、山圖は女衣跏坐すと云へる是れなり。

二臂三戟等を持する像。金光明最勝王經第七に、現に閻羅の長姉と爲り、常に青色の野蠶の衣を著け、好醜の容儀皆具有す。眼目能く見る者をして怖れしむ。無量の勝行、世間に超へ、歸信の人は咸攝受す。或は山巖深險の處に在り、或は坎窟及び河邊に居し、或は大樹諸叢林に在り、天女多く此の中に依て住す。假ひ山林野人の輩なりとも、亦常に天女を供養すべし。孔雀の羽を以て幡旗となし、一切時に於て常に世を護る。師子虎狼も恒に圍繞し、牛羊雞等も亦相依る。大鈴鐸を振ふて音聲を出し、頻陀山の衆皆響を聞く。或は三戟を執り、頭に圓髻あり。左右恒に日月旗を持すと云へり。

二臂刀及び寶珠を持する像。天女形にして、左手は寶珠を掌にし、右手に刀を持するもの、其の圖、佛像圖彙第三に出づ。

辨財天十六童子 印輪童子(又麝香童子と名づく、本地釋迦如來、左手には輪、右手は印を持す)。官帶童子(又赤音童子と名づく、本地普賢菩薩、二手帶紐を持す)。筆硯童子(又香精童子と名づく、本地金剛手菩薩、左手には硯、右手は筆を持す)。金財童子(又召請童子と名づく、本地藥師如來、右手に衡を持す)。稻粃童子(又大神童子と名づく、本地文殊師利菩薩、左手には寶を持し、右肩には稻粃を擔ふ)。計升童子(又惡女童子と名づく、本地地藏菩薩、二手に楯を持す)。飯櫃童子(又質月童子と名づく、本地栴檀香佛、頭に飯櫃を載す)。衣裳童子(又除伽童子と名づく、本地摩利支天、二手衣裳を持す)。蠶養童子(又悲滿童子と名づく、本地勢至菩薩、二手蠶養を持す)。酒泉童子(又密跡童子と名づく、本地無量壽佛、左手には寶を持し、右手は杓を以て酒を汲む、前に酒瓶あり)。愛敬童子(又施願童子と名づく、本地觀世音菩薩、左手には弓、右手は箭を持す)。生命童子(又臍虛空童子と名づく、本地彌勒菩薩、左手には寶、右手は劍を持す)。從者童子(又施無畏童子と名づく、本地龍樹菩薩、二手器中寶を盛れるを持す)。牛馬童子(又隨令童子と名づく、本地藥王菩薩、二手、手綱を把り牛馬の二獸を御せり)。船車童子(又光明童子と名づく、本地藥上菩薩、左手には寶珠を持し、右手は綱を執りて

船を曳き、右膝を車轅に安ず)。善財童子(乙護童子と名づく、右手に財囊を持す)。以上之を辨財天十六童子と稱す。若し或は十五童子と稱する時は、最後の善財童子を省くと云ふ。其の圖、佛像圖彙に出づ。是れ蓋し我國近古以後、俗間に起れる傳説に依るものにして、古儀軌には其の典據を得ざるなり。

第十一節 妙見菩薩

妙見菩薩 梵名は蘇涅哩瑟吒 *Sundarī*。又尊星王、北辰菩薩、北辰尊星妙見菩薩等と稱す。是れ即ち北極星に名づく。此の尊、眼睛清淨にして能く物を見、善惡を記録すと傳へらる。形像は、之に二臂像、四臂像等の異あり。其の中

二臂右手說法印、左手に蓮華を持する像 覺禪鈔に引く所の尊星王軌に、中央に當て大月輪を書き、中に菩薩像を書く。左手には蓮華を持す、蓮華の上に北斗七星を作す。右手は說法印に作し、五指を上に向け、大指を以て頭指の頭の側を捻し、掌を外に向く。天衣瓔珞、其の身を莊り、五色の雲の中に結跏趺座すと云へる是れなり。阿婆縛抄に、平等院に於て、一日等身の像を造立せらる。召に依て圖像を進覽

し畢ぬ。其の像黄色二臂にして、荷葉に坐す。菩薩の像左手に蓮華を持し、華上に七星を作す。右手は掌を仰ぎ上に向く云云。御目の御所に依るが故に、黄色を尤も宜しと思ふ也中略。帖に云はく、其の形は世に畫く所の妙見の形是れなり。頭光の上に當て、頂上に七星を畫するなり。即ち紫宮なり、若し木像ならば、光中に紫宮を作す云云とあり。十卷抄等に其の圖を載す。

二臂右手に寶杖を持する像 阿婆縛抄に、南師の御房に、尊星王の形像之れ有り。金色にして、右手に寶杖を取る、其の實は常の如く三瓣なり。左手は跣趺上に置て、臍に當て、諸指を少しく掘し、杖の末を受くるが如くす。首に寶冠あり、但し五佛又は華鬘等を畫かず。蓮華座に坐す。人人之れを知らず。予疑ふ所は虚空藏歟と。然る間、三井の人、之を見て云はく、是れ尊星王なり云云。仍て後の爲めに之を記す云云と云へり。

二臂右手與願左手寶珠を持する像 十卷抄に、本朝往古、妙見の形像を圖畫する一途に非ず、印相不同なり。但し靈巖寺に等身の木像あり。左手は心に當て如意寶を持し、右手は與願に作す。大底吉祥天女の像に同じ。又尊星王軌の説様様なり、彼の文を見るべしとあり。

四臂日月及び筆硯を持し龍に乗る像 覺禪鈔に引く所の北辰別行法に、衆生あり、壽算を増せんと欲せば、四臂の菩薩の像を畫作せよ。赤白肉色にして、眉を嘸めて而かも慈怒す。右の第一手は筆を持し、第二手は月輪を持す。左の第一手は紙籍を持し、第二手は日輪を持す。馳走せる青龍の上に立ち、右足を引き上ぐ。右邊に硯を持てる使者を畫く、形ち夜叉の如くにして、黒雲中に現すと云へり。十卷抄、阿婆縛抄等に其の圖を載す。菩薩並に使者文の如し、圖中更に菩薩の左邊に小天女の紙と筆とを持して立てるを畫けり。

四臂日月錫杖及び鉞を持する像 覺禪鈔に、又像實相房圖本。像五色の雲の上に乗じ、龍の背に立ち、四臂を具す。左右の掌に山あり、其の上には日、月あり。又左右の二手に錫杖と鉞とを執ると云へる是れなり。

四臂紙筆輪及び太刀を持する像 是れ十卷抄並に阿婆縛抄等に掲ぐる所の像なり。黄色にして四臂あり。左の第一手に紙、次手に輪を持し、右の第一手に筆、次手に太刀を持す。首髪上に聳へ、頭に九頭の龍あり。雲に乗ぜり。

四臂左右第二手は說法印、左右第一手は日輪を持する像。阿婆縛抄に「三井の本の圖には四臂あり、左右の第一手に日輪を持し、左右の次手は說法印を結す」。菩薩形にして、頭に龍頭あり。龍上に月輪を立て、其の上に起立して右足を引き上げたりとあり。

後唐院の鏡像 阿婆縛抄に「凡そ此の尊の形像は不同なり。後唐院に、龜上に鏡を立て、其の表裏に一の形像計に打ち顯はせり。一像は黄色四臂にして龍に乗り、一像は白色二臂にして蓮華に坐せり。世間に龜に乗れると龍に乗れるとの二様之れ有るは、此の鏡に依る歟。件の鏡像は、宇治殿奉請して平等院の寶藏に之を安置し給へり」と云へり。又

俗形束帶像

童子形像

童女形像 等の諸像あり。此等は蓋し、儒家道家等に於て崇祠する所の形像なりとす。

北斗七星 とは、所謂貪狼星、巨文星、祿存星、文曲星、廉貞星、武曲星、破軍星なり。形

像は、覺禪鈔に引く所の尊星王軌に依るに、又七の小月輪を置き、北斗七星の神形を内院衆と爲す。西南に貪狼星を置く、小赤黒色にして、左手に日を持す。西に巨文星を置く、身面少白黄色にして、右手に月を持す。西北に祿存星、小赤青色にして、左手に火珠を持す、珠には火焰起れり。次に北方の月輪に文曲星を畫く、面色小青黒色にして、左手は掌を外に向け、五指を垂下し、掌中に水を流出し、水流れ下る形。東北の月輪に廉貞星を畫く、身面黄色にして、右手に玉を持て衡す。東方の月輪に武曲星を畫く、色小青色にして、左手に柳枝を持す。次に東南の月輪に破軍星を畫く、其の色少白赤色にして、右手に刀を持す。是の諸星、皆夜叉形を作し、頭髮赤色にして、天冠瓔珞、其の身を莊嚴すと云ひ、阿婆縛抄には「平等房次第に云はく、壇東方は貪狼星を觀ず、大白衣觀音、或は千手、右手は施願なり。寅亥は巨門星體、馬頭、右羽は大指と頭指を申べて寶瓶を持する勢なり。丑方は祿存星體、不空絹索、蓮華合掌して直に胸上に當つ。子方は廉貞星體、水面觀音、深沙大王、觀の羽を直く開き、滿月の額を押ふ。亥方は武曲星體、阿魯力觀音、觀の羽を直く申べ、右膝の上を覆ふ。戌方は文曲星體、獨諦觀音、謂はく十一面なり、觀の羽を拳に作り、空を堅て、幢の如くす。

頂上虚空中の間に破軍星在り。虚空藏尊なり。右手は五指を開きて蓮華の如くし、頂上に置覆すとあり。但し十卷抄等に載する北斗曼荼羅中に出す所の像、並に佛像圖彙第三等に掲ぐる所の形像は、七星俱に同一形像にして、冠を戴き、道服を着け、二手に笏を持せり。

第十二節 摩利支天

摩利支天 梵名は摩利支 *Muruci* 威光又は陽炎と譯す。隱形して日天の前に疾行し、大威力ありと傳へらる。形像は、之に二臂像、六臂像、八臂像等の別あり。

二臂右手與願左手天扇を持する像 摩利支天經に、應に金或銀或は赤銅或は白檀香木、或は紫檀木等を以て、摩利支菩薩像を刻作す。天女形の如くにして、長さ半寸或は一吋二寸已下なる可し、蓮華上に於て、或は立ち或は坐す。頭冠瓔珞種種莊嚴し、極て端正ならしむ、左手には天扇を把る。其の扇は維摩詰の前の天女の扇の如し。右手は垂下して掌を揚げて外に向け五指を展べて與願の勢を作す。二天女あり、各白拂を執りて左右に侍立すと云へる是れなり。陀羅尼集經第十及び摩

利支提婆華鬘經の説之に同じ。其の圖、十卷抄並に阿婆縛抄等に出づ。

三面八臂左手に索弓樹枝線右手金剛杵針鈎及び箭を持し、猪に乗る像 大摩里支菩薩經第五に、摩里支菩薩の相、身閻浮檀金の如く、光明日の如し。頂に寶塔を戴き、紅天衣を着け、腕釧耳環、寶帶瓔珞及び諸雜華種種莊嚴す。八臂三面三眼にして光明照耀す、唇は曼度迦花の如し。頂上の寶塔の中に於て毗盧遮那佛あり、無憂樹の華鬘を戴けり。左手は絹索、弓、無憂樹枝及び線を執り、右手には金剛杵、針、鈎、箭を執れり。正面は善相、微笑、深黄色にして目を開き、唇は朱の色の如く、勇猛自在なり。左面は猪相を作す、醜惡忿怒、口より利牙を出し、貌、大青寶色の如く、光明十二の日に等し、眉を擡め舌を吐き、見る者驚怖す。右面は深紅の色を作す、蓮華寶の如く、大光明あり、中略、猪車に乘じ立つこと、舞踏の如し、端正怡顏童女の相の如しとあり。同經第二、第七に亦此の説あり。十卷抄第十に載する所の八臂像の圖、其の像左第一手に弓、次手に龍索、異本には鈎、次手に樹枝、次手に線を持し、右第一手は箭、次手に三鈎戟、次手に獨鈎杵、次手に針を持し、猪上に立つ、其の猪背上に半月上あり、月形中に二蓮ありて菩薩の兩足を承けたり。案ずるに經に鈎と云へるもの、今三載に圖す

るは、或は畫者の誤に非らざるか。若し然らば彼の經說に依準するものと云ふ可し。阿婆縛抄に載する所の像亦今と相似たりと雖も、其の左第二手に天扇十卷抄は龍索、第三手に蘿菊十卷抄は樹枝を持せるは、今說と相同じからざる所なり。

三面八臂弓並に諸龍等を持する像 是れ大摩里支菩薩經第四の說、其の像、八臂二足三面三眼にして左第一手に弓、次手に嚙酥枳龍、次手に德叉迦龍並に無憂花、次手に羯里俱吒迦龍、及び索を持し、右第一手に俱隸迦龍、次手に鉢納摩龍、並に牽弓、次手に大鉢納摩龍、次手に商佉鉢羅龍を持すと云ふ。

三面六臂左手弓線樹枝右手箭針及び金剛杵を持し猪に乗る像 大摩里支菩薩經第七に、身閑浮檀金色の如く、大光明を放ち、青天衣を著け、頂に寶塔を戴き、足、大猪に乗ず。六臂三面あり。正面は金色、端嚴にして微笑し、左面は猪相、墨色醜惡にして、口に利牙を現じ、舌を出し、眉を蹙め、大忿怒の相を作し、見者恐怖す。右面は白色にして、天の秋月の如し。左手に弓線、無憂樹枝を持し、右手は箭針、金剛杵を持すと云へり。

三面六臂左手に弓扇三戟、右手に箭刀及び棒を持し猪に乗る像 是れ世俗に流

布の像なり。また其の由る所の經軌の說を詳にせず。其の像三面六臂にして左第一手に弓、次手に團扇、次手に三戟を持し、右第一手に箭、次手に刀、次手に棒を持し疾走せる猪上に乗れり。其の圖、佛像圖彙第三等に出つ。

第十三節 襄虞梨童女

襄虞梨童女 梵名は襄虞梨 *Togori* 又常瞿梨常求利に作り、大體と譯す。此の天常に雪山の北香醉山中に住し、能く衆生の爲に諸毒を除くと云ふ。形像は、之に二臂像及び四臂像あり。

二臂右手降毒劍、左手管毒木を持する像 覺禪鈔に引く所の常瞿梨毒女經に、當に須らく常瞿利の形を畫くべし。一童女を作す。百福相好、其の身を莊嚴し、鹿皮を衣と爲し、嬌奢耶衣を著く。大神車輪の髻あり、右手に降毒劍を執り、左手に管毒木を執ると云へる是れなり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

四臂右手三戟孔雀尾、左手黑蛇並に施無畏印の像 穰麩梨童女經に、身綠色にして、狀は龍女の如く、七頭を具足し、項に圓光あり(中略)、右第一手は三戟叉を持し、第二

手は三五莖の孔雀尾を執り、左第一手は一黒蛇を執り、第二手は施無畏にすとあり。十卷抄、覺禪鈔、阿婆縛抄等に、俱に其の圖を載す。但し十卷抄、阿婆縛抄のものは、坐像にして、覺禪鈔に出す所のものは、立像なるを異とす。

第十四節 乾闥婆王

乾闥婆王 梵名は乾闥婆 *Gandharva*。食香又は尋香行と譯す。又具に梅檀乾闥婆王と稱す。彌伽迦等の十五鬼を縛して、胎兒小兒等を守護する神王なりと傳へらる。形像は

二臂如意珠及び三古鉢を持する像 覺禪鈔に、梅檀捷闥婆鬼神王、甲冑を著け、獅子冠を著け、分相身黒赤、左に如意珠を持し、右に三古の牟を執り、十五鬼の頭を持す。左右に摩利支天、訶利帝母を安じ、十五鬼神圍繞すとあり。十卷抄及び阿婆縛抄等に掲ぐる所の圖像は、今説の如く、甲冑を著し、獅子冠を戴き、左手に如意寶、右手に三鉢鉢の鉢上に十五鬼の頭を貫ぬけるを持し、十五鬼神等圍繞せり。蓋し童子經法所用の曼荼羅なり。

二臂、左手に戟を持する像 十卷抄第十に、乾闥婆王、冥官の如く、甲冑の形、石七に坐し、右足を垂る。右の手を以て膝を押し、左の手に戟を持す。利毛の形なり。頂に牛頭あり、耆年宿徳の形なり云云。但し説所未だ之を勘えず、現圖又之に異なる」と云へる是れなり。

二臂簫笛及び寶劍を持する像 是れ攝無礙經の説、觀音三十三身中の乾闥婆身の像なり。其の像、身相赤肉色にして、右手に簫笛を執り、左手に寶劍を持す。

十五鬼神像 即ち彌伽迦等の十五鬼なり。其の形像に就きては、護諸童子陀羅尼經に、彌伽迦とは、其の形牛の如し。彌伽王とは、其の形師子の如し。鶯陀とは、其の形鳩魔羅天の如し。阿波悉魔羅とは、其の形野狐の如し。牟致迦とは、其の形獼猴の如し。魔致迦とは、其の形羅刹女の如し。閻彌迦とは、其の形馬の如し。迦彌尼とは、其の形婦女の如し。梨婆坻とは、其の形狗の如し。富多那とは、其の形猪の如し。曼多難提とは、其の形猫兒の如し。舍究尼とは、其の形鳥の如し。捷吒婆尼とは、其の形雉の如し。目佉曼茶とは、其の形獺狐の如し。藍婆とは、其の形蛇の如し。此の十五鬼神、諸の小兒に著き、其をして驚怖せしむとあり。其の形像は、流布

の曼荼羅中に見えたり。

第十五節 帝釋天

帝釋天 梵名は因陀羅 *Indra*、主又は帝と譯す。又釋提桓因 *Sakru-Devendra*、釋迦提婆因達羅と稱す。又釋迦は姓、帝釋とは蓋し梵漢雙舉の語なり。又天帝釋、天帝、釋迦天王と云ひ、略して釋と稱し、又橋尸迦 *Kausika*、富蘭陀羅 *Purandara*、摩伽婆 *Maghavān*、婆沙婆 *Vasavah*、舍脂鉢低 *Saci pati*、千眼 *Sahasrika* 等の異名あり。切利天の主として、須彌山頂善見大城中に住すと傳へらる。梵天等と併せて、佛法守護の善神として八方天等の一に算ぜらる。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の東方並に北方の兩處に居せり。形像は、之に數種あり。

二臂右手に三股を持し白象に乗る像 金剛頂瑜伽護摩儀軌に、東方の帝釋は、白象に乗じ、五色の雲中に住す。身を金色に作し、右手には三股を持して心に當て、左手は左膀に托す。左脚を垂下す。三天女あり、各手に蓮華を持す、盤に青蓮華を盛り、或は盤に雜華等を盛れるを以てすと云へる是れなり。十二天供儀軌の説之に

同じ。

二臂嚙日囉を持する像 尊勝佛頂修瑜伽軌儀卷下に、東門南上方護法天帝釋王、手に嚙日囉を持し、各四侍者を領すと云ひ、大孔雀明王畫像壇場儀軌に、東方に帝釋天王を畫く、金剛杵を執り、諸天衆と與に圍繞すと云ひ、又藥師瑠璃光王七佛本願功德經念誦儀軌供養法にも、天主帝釋は杵を執る神なりと云へり。其の所謂嚙日囉とは、獨鈷、三鈷の別明かならず。

二臂右手に獨鈷杵を持し六牙白象に乗る像 聖無動尊安鎮家國等法に、東方に白色の旗を作し、旗上に帝釋天王を畫く。右手に獨股杵を持し、六牙の白象に乗ず、白旗を持すとあり。

二臂右手に獨鈷杵を持し荷葉に坐する像 是れ金剛界曼荼羅成身會中外院二十天中、東方第五位に在す。金剛界七集卷下に、黄金色にして、左は拳にして腰に安じ、右に一古を持すと云へる是れなり。賢劫十六尊軌にも、天帝獨股杵、童子形と云へり。

二臂、右手に獨鈷杵を持し金山上に坐する像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の

北門の西に在すもの。諸説不同記第十に、現圖門の西に在り。金色にして三目あり。首に寶冠を戴き、襜褕袈裟を被り、右手に獨脚を執持し、左は拳にして腰に又し、金山の上に坐す(或圖は肉色、山圖は左は臂を舒下し、掌を覆ひて指を垂るとあり。青龍軌卷下具に大毗盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提標幟普通眞言藏廣大成就瑜伽と云ふ。青龍寺法全の集には、東門の帝釋天は、妙高山に安住す。寶冠に瓔珞を被り、手に獨股杵を持し、天衆自から圍繞すと云へり。攝大軌第二具に攝大毘盧遮那經大菩提幢諸尊密印標幟曼荼羅儀軌と稱す)。廣大軌卷中具に大毘盧遮那經廣大儀軌と稱す等亦其の説を爲せり。

二臂右手に杖を持する像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の東門の北に在るもの。諸説不同記第八に、現圖東門の北に在り。甲を被り、髮冠赤色にして、右は肘を堅てて拳に作して杖を持す(或圖は、四指を微屈して前に向け、中指の間に鉞を夾持す)。左は拳にして腰に又す。面は少し怒る相にて左を向く。天衣を著く(或圖は三目、山圖は黄色三目にして寶冠襜褕衣を著け、右は獨脚杵、左は拳にして腰に又すと云へる是れなり。

二臂蓋を持する像 法顯傳に、天帝釋紫金階を化作して左邊に在り、七寶の蓋を取て侍すとあり。是れ釋尊、切利天より僧伽施に下りたまへるときに侍せる天帝釋の事を記せるもの、其の圖、鹿野苑の遺趾等より發見されたる古彫刻等に見る所なり。

第十六節 火天

火天 梵名は阿疑爾 *Agni*。又阿耆尼等に作り、火と譯す。又火神とも云へり。是れ古來印度に於て諸天中尤も古くより深く崇信せられしものにして、胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の東南隅に居し、金剛界曼荼羅にては、外院二十天中の西方に位せり。形像は、之に亦數種あり。

四臂右手青竹軍持を持し、左手掌を揚げ並に念珠を持し、青羊に乗る像 金剛頂瑜伽護摩儀軌に、東南方の火天は、青羊に乗し、赤肉色にして遍身に火焰あり。右の二手は、一は青竹を持し、一は軍持を持し、左の二手は、一は掌を揚げ、一は念珠を持す。二天女ありて天花を持す。左右に苦行仙を置く、左脚を垂れて右足を蹠すと云へ

る是れなり。十二天供儀軌の説、全く之に同じ。

四臂左手仙杖、澡罐を持し、右手施無畏印、並に念珠を持し、青羊に乗る像。聖無動尊安鎮家國等法に、東南の方に黄色の旗を作し、旗上に四臂の火天を畫く、青羊に乗じ、遍身火焰あり。右手は施無畏に作し、第二に念珠を持す。左手は仙杖を持し、第二は澡瓶を持すと云へり。案ずるに此の説は前の瑜伽護摩儀軌等の説と比較するに、其の左右手を異にするが如しと雖も、是れ實は天其ものに就いて云へると、向て見たるものより云へるとの差にして、實は本來同圖像なるに非らざるか、聊か疑を存する所なり。

四臂左手澡瓶杖、右手三角數珠を持し、氍毹座に坐する像。是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第九に依るに、現圖第三重東南の隅に在り。身色深赤、鬚髮皓白にして、苦行仙の形なり。冠寶瓔珞、環釧等の莊嚴なく、唯袈裟黑髮の纒跨、鹿皮の裙子を披く、凡そ諸天は多分は耳環無し、或圖身相肥滿にして、釧環禪子を著く。火焰の中に在り。右手は掌を仰ぎ、三角の壇を持して胸に當て、次手は肘を舉げて掌を仰ぎ、指頭を右に向け、頭中名を屈して數珠を執り。左手は垂下して

臍側に當て、指頭を下に向け、四指を屈し、頭中指の間に澡瓶を執持す、或圖は内に向て腰側に當てて之を執る。次手は肘を舉げて拳に作して身に向け、小指を舒べて杖を把る、或圖は臂を舉げて肘を豎てて之を執る。身は火中に在りて、唯頭光のみあり。氍毹座の上に脚を交へて而も坐すとあり。青龍軌卷下に、東隅に於て而も火仙の像を作す。熾焰の中に住し、三點灰を標と爲す。身色は皆深赤にして、心に三角印を置き、慧には珠定には餅を操り、掌印定に杖を持し、青羊を以て座と爲す、妃后左右に侍すと云ひ、攝大軌、廣大軌等に亦同じく其の説をなせり。

二臂左手に軍持を持する像。大孔雀明王畫像壇場儀軌に、東南方に火天王を畫く、左手に軍持を執り、右手は施無畏にすと云へる是れなり。

二臂罐及び數珠を持する像。尊勝佛頂修瑜伽法軌儀卷下に、東南角火天神、火焰の中に在りて坐す。手に澡罐、數珠を持す。左右に各二侍者ありとあり。

二臂三角を持し、荷葉に坐する像。賢劫十六尊軌に、火天は東南に在り、赤色なり、三角を標幟と爲すと云へり。

二臂仙杖及び三角火輪を持し、荷葉に坐する像。是れ金剛界曼荼羅外院二十天

中の尊なり。金剛界七集卷下に「肉色にして左に仙杖を持し、右は三角火輪なり」と云へり。

第十七節 焰摩天

焰摩天 梵名は焰摩 Yamaraṁhi。又琰摩、閻摩、閻羅、焰魔羅等に作り、雙王、死王、靜息王、平等王とも云ふ。地獄界の主と云ひ、或は餓鬼界の主なりとも傳へらる。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の南門の傍に居し、金剛界曼荼羅にては、外院二十天中の北方に位せり。形像は、之に數種あり。

二臂右手人頭幢を持し、左手掌を仰ぎ、水牛に乗る像。金剛頂瑜伽護摩儀軌に、南方焰魔天は、水牛に乗じ、右手に人頭幢を執り、左手は掌を仰ぐ。二天女ありて侍し、二鬼使者、刀を持し、戟を持し、赤黒色にして、右脚を垂ると云へる是れなり。十二天供儀軌の説之に同じ、十卷抄阿婆縛抄、覺禪鈔等に俱に、其の圖を出せり。

二臂右手焰摩幢を持し、左手腰に又し水牛に乗る像。聖無動尊安鎮家國等法に、南方に黒色の旗を作し、焰摩羅天を畫く、水牛に乗じ、右手に焰摩幢を持し、左手は腰

に又すとあり。其の圖、覺禪鈔に出づ。

二臂右手に檀茶印を持し、左手拳にして腰に安じ、荷葉座に坐する像。是れ金剛界曼荼羅外院二十天中の像なり。金剛界七集卷下に、左は拳にして腰に安じ、右は檀茶印なりとあり。

二臂左手に檀茶杖を持し、臥せる白水牛に乗る像。是胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第九に依るに、現圖、門西に在り、或圖は赤黒色、右手は側て掌を仰ぎ、指頭を右に向て少しく堅て、或圖は掌を仰ぎ、指頭を右に向て頭指を屈す。左手は内に向て檀茶杖を執り、頭に金半月形あり、上に一の人頭髮あり。臥せる白水牛に乗じ、左脚を垂る、其の牛は毡座の上に在り、面を右方に向く、或圖は青水牛に乗せりと云へり。青龍軌卷下には、次に焰魔羅王、手に檀擊印を持し、水牛を以て座と爲す。震雷玄雲の色にして、七母並に黑夜、死后妃圍繞すとあり。攝大軌第二、廣大軌卷中等の説、亦之に同じ。

二臂如意寶及び檀擊印を持する像。覺禪鈔に引く所の天王念誦法に、次に地藏菩薩、閻魔天の身を現じ、左に如意寶を持し、右に檀茶印を持し、身色日光の如しとあ

る是れなり。

此の他、大孔雀明王畫像壇場儀軌には、次に南方に焰摩天王を畫く、焰摩幢を執り、焰摩界の鬼衆に圍繞せらる」と云ひ、尊勝佛頂修瑜伽法軌儀卷下に「南面に閻羅主を畫く、手に死王節印を執る。閻羅后及び判官鬼類等眷屬、左右に之を畫く」と云ひ、賢劫十六尊軌に「焰魔は檀茶印、赤色」と云へり。諸文中に檀茶印、檀茶杖、閻摩幢、死王節印等と云ふもの、其の名異なりと雖も、要するに人頭幢の事なり。人頭幢とは、棒上の半月形の上に人頭を安ける是れなり。

焰摩天眷屬 之に焰摩后、太山府君、五道大神、茶吉尼、遮文茶七母、司命、司祿等あり。焰摩后 梵名は迦羅羅地利 *Kalarati*。又黑暗天女、黑夜神、暗夜神とも云ふ。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院南方焰摩王の左に位せり。形像は、諸説不同記第九に「現圖、焰摩の左の内に在り。右手は掌を仰ぎて、指端を外に向けて少しく屈し、或圖は掌を豎て施無畏の如くす。左手は拳にして壇拏杖の頭に半月形あり、上に人頭あるを執る。童子の面狀なり、或圖は、人頭に髮髻あり、山圖は、右は掌を仰ぎて心に當て鬚髻を持す。左手は棒上に鬚髻を置けるを持す。面を左方に向け、焰魔を

仰視す、冠繪なし」と云へり。覺禪鈔には、傳受集三に云はく、暗夜神は焰摩后なり、中略。形像は、肉色にして左手は檀茶、右は拳にして腰に安す。毯座柔軟なり」とあり。

太山府君 梵名は質咀羅笈多 *Citrangpa*。又岱山府君と記し、奉教官とも云ふ。古傳には之を深沙大將なりとも云へり。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院南方焰摩王の右に在り。形像は、諸説不同記第九に依るに「現圖、右手を垂下して頭指を舒べ、屈し、餘指を屈して筆を執り、膝前に書卷を開布し、點書の勢を作す、或圖は諸指を屈し、敷紙を抱く。左手は垂下して掌を舒べ、覆ひ、腰側に當て壇拏杖の端に金環あり、環中に人面あるを持す。面を右に向け、面を伏せて下を視る。二鬼あり、鬼形裸身、赤の犢鼻褌を著く。以下鬼皆之に同じ、或圖は皆赤黒色なるを著く。火髮上に向ひ、前に居して合掌し、尊に向て長跪す。梵漢題名竝に闕く、山圖は前置視す」と云へり。

五道大神 又五道將軍と云ひ、或は賁識神とも名づく。形像は、覺禪鈔に掲ぐる所の焰摩天曼荼羅中のものは、左手は胸に當て敷紙を抱き、右手に筆を取れり。茶吉尼 梵名は茶吉尼 *Dakini*。人の身中の人黃を食する鬼なりと傳へらる。胎

藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の南方に居せり。形像は、覺禪鈔に依るに、茶吉尼、惠和尚の云はく、支命禰歟。眞興の云はく、鬼の乗る所なり、三徳あり。犬に似て、黄色にして長尾なり。慈恩云はく、青黄にして犬の如く、聲は狼の如し云云と云へり。若し諸説不同記第九に依らば、茶吉尼衆中略。現圖、鬼衆の左に在り、三天一偃臥鬼あり。一は中に在り、赤髮髻、周身赤肉色、或圖は肉色、右手は人脚を持して之を食し、左手は内に向て人臂を持して右を向く、以下三尊天形の如く、靺鞨の座に坐す。衣禪を被ずして、纒跨を著く。項下〇山圖は甲冑を被、右手は拳を豎てて内に向け、左手は刀を持す。一は内に在り、周身赤色にして赤髮あり、或圖は肉色、右手は肘を豎て指頭を右に向け、四指を屈して坏を持す。左手は指を屈して胸に向く、或圖は掌を豎て名小指を屈し、山圖は、右は坏、左は拳にして腰に又す。左を向き、左に在る者を視る。一は外に在り、右手は肘掌を豎開し、指頭を右に向け、四指を屈して坏を持す。左手は内に向て刃を持す、未だ詳かならず、山圖は左は拳にして腰に又す。一鬼左に偃臥する者は鬼形、火髮聳、目目を閉ぢて偃臥し、二手は舒べて身側に著く、私に疑ふらくは是れ死后歟とあり。若し覺禪鈔に出す所の焰摩天曼荼羅に依ら

ば、其の像右手は胸に當て革囊を持し、左手は拳にして腰に又せり。或は是れ成就仙なりとの説あり。未だ詳かならず。佛像圖彙第三に掲ぐる所の圖像は、女形にして左手に寶珠を持し、右手に劍を執り、狐に乘れり。

遮文茶 梵名は遮文茶 *Camunda* 胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院西方に居す。形像は、諸説不同記第十に依るに、現圖、帝釋女の左に在り。猪頭人身にして、寶冠を戴き衣を著けず、赤色なり。右は掌を仰ぎ指頭を右に向けて坏を持す、私に云はく、劫波羅印頂骨なり。左は拳にして腰に又す。左を向き、左脚にて右を押す、或圖其の頭黒色、左は掌をば腰に又すと云へり。

七母 又七摩怛里、七姉妹とも云ふ。所謂左閻拏、嬌吠哩、吠瑟拏、爾橋摩里、印捺里、勞捺里、末羅唎弼惹の七女鬼是れなり。形像詳かならず。

司命 太山府君、五道大神等と併せて冥官の一なり。形像は、覺禪鈔に載する焰摩天曼荼羅に出す所に依るに、左手には牌を持し、右手には筆を持せり。

司錄 是れ亦冥官の一なり。形像は、覺禪鈔に載する焰摩天曼荼羅の圖に依れば、二手、書卷をひろげ、擧げて之を讀む勢を爲せり。

第十八節 羅刹天

羅刹天 梵名は羅乞叉娑地跋跢 *Raksasa-devata* 涅里帝 *Niruti* と稱す。是れ即ち諸羅刹の主なり。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の西南隅に居し、金剛界曼荼羅にては、外院二十天中の西方に位せり。形像は、之に二三の異説あり。

二臂右手に刀を持ちし左手大指中小指を押し白師子に乗る像 金剛頂瑜伽護摩儀軌に「西南方羅刹主天、白師子に乘じ、身に甲冑を著け、右手は刀を持して堅てしめ、左手は大指にて、中小の二指を押す。赤肉色なり。二天女、左右に持し、二羅刹鬼、三股戟を持す」とあり。十二天供儀軌の説之に同じ。

二臂右手劍を持ちし左手は劍印にし水牛に乗る像 阿婆縛抄に「調定圖に云はく、大赤肉色にして、右手には劍を執り、左手には劍印を結して外に向け、身に甲冑を著くるなり、天冠あり」と云へり。阿婆縛抄に掲ぐる所の圖は、印相は今説の如にして而も水牛に坐せり。

二臂右手に劍を持ちし左手は腰に又し師子に乗る像 聖無動尊安鎮家國等法に

「西南方に慘色の旗を作し、旗上に羅刹主を畫く、師子に乘じ、右手には劍を持し、左手は腰に又すと云へる是れなり。

二臂右手に刀を持ちし毘毘座に坐する像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。即ち諸説不同記第十に依るに「現圖通身黄色にして、甲を被り、髮に冠あり、冠に繪ありて二頭飄上し、目少しく怒視す。右手は腰側に當て刀を執り、左手は掌を堅て左に向て名小指を屈し、大指を以て押す。面を右方に向く、山圖は赤色にして左は拳にして腰に又すと云へり。青龍寺軌卷下には「泥哩底方の主は、號して大羅刹と名づく、刀を執れる恐怖の形なり」とあり。攝大軌第二、廣大軌卷中等に記する所之に同じ。

二臂右手は拳にして腰に安じ、左手は刀印にし荷葉座に坐する像 即ち金剛界曼荼羅外院の像なり。金剛界七集卷下に「白肉色にして、右は拳にして腰に安じ、左手は本刀印の形なり」と云へる是れなり。

二臂鎚を執る像 賢劫十六尊軌に「西南の羅刹主は鎚を執ると云へる是れなり。此の他、大孔雀明王畫像壇場儀軌には、次に西南方に羅刹主を畫く、刀を執る、諸の

羅刹衆のために圍繞せらる」と云ひ、尊勝佛頂修瑜伽軌儀卷下には「西南の角には羅刹王を畫く、手に劔を把る。各二侍者あり、手に刀を執りて而も坐す」と云へり。

第十九節 水 天

水天 梵名は嚩嚩拏 Varuna. 又 Nagavajra と云ふ。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の西門の傍に位し、金剛界曼荼羅の中には、外院の北方に位せり。形像は、之に亦數種あり。

二臂右手刀左手に龍索を持し龜に乗る像 金剛頂瑜伽護摩儀軌に「西方の水天は、水中に住し龜に乗ず。淺綠色にして、右手に刀を執り、左手に龍索を持し、頭冠の上に五龍あり、四天女妙華を持す」と云へる是れなり。十二天供儀軌の説之に同じ。十卷抄第九、阿婆縛抄、覺禪鈔等に、俱に其の圖を出せり。但し其の右手に持する所は、刀にあらで劔なり。阿婆縛抄には同圖の外、右手に刀、左手に龍索を持し龜上に立てる像を出せり。

二臂右手刀左手龍索を持し龍に乗る像 覺禪鈔に「迦樓羅密言經に云はく、水天

は紅色にして兩臂あり。左には龍索、右には刀を持し、龍に乗る云云」とあり。

二臂右手蛇索を持し左手腰に又し龜に乗る像 聖無動尊安鎮家國等法に「西方に赤色の旗を作し、旗上に水天を畫く、龜に乗じ、右に蛇索を執り、左手は腰に又す、其の天の頭上には七龍頭あり、狀蛇形の如し」と云へり。覺禪鈔に其の圖を出せり。

二臂右手劔左手蓮上赤珠あるを持し毘毘座に坐する像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第十に依るに「現圖、七宿等の左の門の南に在り。右手は腰側に當て劔を持し、左手は拳を豎て蓮を持す、上に赤珠あり、私に恐らくは誤歟。面は右方に向く(二圖並に青色なり。或圖は左手に輪索を持す)。左脚にて右を押す(或圖は龜に坐せり)」とあり、攝大軌第二に依るに「龍方嚩嚩拏、西門に在りて龍索を執り、天形女人の狀にして、龍を光とし、龜を座となすとあり。青龍軌、廣大軌に亦此の説あり。但し、執龍索の一句を缺けり。

二臂右手蛇索を持し荷葉座に坐する像 是れ金剛界曼荼羅外院の像なり。金剛界七集卷下に「淺青色にして、左は拳にして腰に安じ、右には蛇索を持す」とあり。二臂寶珠を持する像 陀羅尼集經第十一に「造水天像法。白檀木を以て、其の像

を刻作す。身高五寸天女の形に似て、面に三眼あり。頭に天冠を著け、身に天衣を著け、瓔珞莊嚴す。兩手を以て如意寶珠を捧ぐ。身の高さ二寸半に作るも亦得。此の像を造り已りて、木の函の内に安じ、錦囊を以て盛り、左臂に繫ぐれば、諸願悉く随ふと云へり。

此の外、大孔雀明王畫像壇場儀軌には、西方に水天を畫く、絹索を持すと云ひ、又尊勝佛頂修瑜伽法軌儀卷下に、西面門の南西方に水天神、甲を被り、頭上に蛇頭あり、手に龍索を把る。四侍者左右に兩膝にて跪坐し、合掌して住すと云ひ、賢劫十六尊軌に、水天は絹索を執ると云ひ、藥師琉璃光王七佛本願功德經念誦儀軌供養法にも、絹索を執持する水天神と云へり。

第二十節 風天

風天 梵名は縛庚 *Vāyū*。又風神とも云ふ。胎藏界曼荼羅にては、外金剛部院の西北方に居し、金剛界曼荼羅にては、外院の西方に位せり。形像は、之に亦數種あり。二臂右手獨股頭の劔上に幡あるを持し、塵に乗る像。金剛頂瑜伽護摩儀軌に、西

北方の風天は、雲中塵に乗じ、甲冑を著け、左手は勝に托し、右手には獨股の頭の劔の劔の上には緋幡あるを執れり。二天女之に侍すと云へり。十二天供儀軌の説之に同じ。十卷抄、阿婆縛抄等に其の圖を出せり。

二臂右手旗を持し、塵に乗る像。聖無動尊安鎮家國等法に、西北方に青色の旗を作し、旗上に風天を畫く。塵に乗じ、右手には旗を持し、左手は腰に又すと云へり。

二臂右手幢杖を持し、毘毘座に坐する像。是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第十に依るに、現圖、西北隅に在り。老人の形の如くにして、鬢髮皆白し。通身赤色にして冠を著く、冠に撃げたる繪は飄上せり。甲を被り、緋裳、頭を覆ふて肩の下に之を結ぶ、其の兩端屈曲して上に向く。腰帶の二端、又飛上せり。右手は拳を豎てて、幢に幡を著けたる持す、其の幡の端は左に向て飄颺す。左は拳にして腰に又し、左に向て遙に視るとあり。

二臂右手幡を持し、荷葉座に坐する像。是れ金剛界曼荼羅外院の像なり。金剛界七集卷下に、赤肉色にして、左は拳にして、腰に安じ、右には幡を執ると云へる是れなり。

此の外、大孔雀明王畫像壇場儀軌卷下には、西北方に風天王を畫く、幢幡を執れりと云ひ、賢劫十六尊軌には、風は幢、西北隅にあり、羅刹形にして灰色なりと云へり。

第二十一節 伊舍那天

伊舍那天 梵名は伊舍那 *Isana*、樂欲と譯す。或は嚙捺羅 *Rudra* と稱す。商羯羅自在在天の忿怒身なりとも傳へらる。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の東北隅に位せり。形像は、之に亦數種あり。

二臂左手劫波坏左手三戟劍を持し、黃豐牛に乗る像。金剛頂瑜伽護摩儀軌に、東北方伊舍那天、舊に摩醯首羅天と云ひ、亦自在天と云ふ。黃豐牛に乗じ、左手には劫波坏に血を盛りたるを持し、右手には三戟劍を持せり。淺青肉色にして、三目忿怒二牙上出し、鬚髯を瓔珞と爲す。頭冠の中には二の仰月あり。二天女花を持すと云へり。十二天供儀軌の説之れに同じ。十卷抄並に阿婆縛抄等に、其の圖を出せり。

二臂右手は三股叉を持し、左手は腰に又し犛牛に乗る像。聖無動尊安鎮家國等

法に、東北の方に綠色の旗を作し、旗上に伊舍那天を畫く。犛牛に乗じ、右手には三股叉を持し、左手は腰に又すと云へる是れなり。

二臂右手三股戟、左手坏器を持し、毘毘座に坐する像。是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第八に、現圖、三目、青色にして赤髮なり。鬚髯を以て瓔珞と爲す。天衣を被り、前より兩肩に繋げ、肩の後に至り、屈曲して垂下す。右手には三胡戟を持し、左手は肘を堅開して、掌を仰ぎて、坏器を持す、或は云ふ綠色なりとあり。

此の他、大孔雀明王畫像壇場儀軌には、東北方に伊舍那天を畫く、三戟叉を執ると云ひ、尊勝佛頂修瑜伽法軌儀卷下には、東北の角に伊舍那、手に恒利首羅を執る。左右に各二侍者あり、隨て本方の印契を執ると云ひ、賢劫十六尊軌に、伊舍那は戟印、左に劫波羅を持すとあり。

八方天 帝釋天已下、火天、焰摩天、羅刹天、水天、風天及び此の伊舍那天の七尊に毗沙門天を加へて、之を八方天と稱するなり。

第二十二節 梵天

梵天 梵名跋羅賀摩拏 Pradhāna. 又大梵天と稱す。色界初禪天に居し、一小千世界の主なりと傳へらる。帝釋四天王と俱に、早くより佛法守護の善神の一として崇信せらる。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の東方に位し、金剛界曼荼羅の中には、外院の東方に居せり。形像は、之に二臂像あり、四臂像あり。此の中、

二臂合掌恭敬の像 佛傳畫圖中、梵天勸請圖等の中に見る所なり。東大寺法華堂の梵天像の如きも、亦二臂合掌せり。

二臂右手に拂を持する像 佛傳畫圖中、佛切利天より三道の寶階を踏み降下し給ふ時、右脇に侍せる像なり。サールナートへの遺品なる古畫圖中に見えたり。

二臂寶鏡を持する像 陀羅尼集經第十に、梵摩天手に寶鏡を執ると云へる是れなり。

二臂右手に蓮華を持し荷葉座に坐する像 是れ金剛界曼荼羅外院の像なり。金剛界七集卷下に、白肉色にして、左は拳にして腰に安じ、右には蓮華を持すと云へ

り。賢劫十六尊軌に、梵天は紅蓮を持す。天の如しとあり。

四面四臂右手蓮數珠左手軍持並に唵字印七鵝車に乗る像 大日經疏第五に、大梵王髮髻の冠を戴き、七鵝の車の中に坐す。四面にして四手あり。一手は蓮華を持し、一手は數珠を持す。已上は是れ右手なり。一手は軍持を執り、一手は唵字の印を作す。此上は是れ左手なり。印は當に稍頭指を屈して、餘指を直申し、手を側て之を案じ、而も語を作す狀なり、是を淨行者の吉祥の印と名づく」とあり。攝大軌第二、廣大軌卷中、及び阿婆縛抄に引く所の白蓮華經の説之に同じ。

四面四臂左手蓮華軍持右手鉢並に施無畏印蓮華座に坐する像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第八に依るに、現圖、四面にして面に三目あり、四臂あり、右手は掌を仰ぎ、指端を右に向けて指を垂れ、次手は肘を豎てて拳に作り、小指を舒べて身に向て鉢を執る。左は拳を豎てて蓮華を執り、次手は下持して掌を仰ぎて前に向け、頭中名指を屈し、頭中の間に深瓶を夾持し、面を以て右に向て坐す(或圖は、右次手は臂を擧げて拳に作して身に向て杖を執り、左は掌を豎て頭指を屈して蓮華を執り、次手は徐に肘を豎て左に向て瓶を持し、五白鵝に乗る。山圖

は、右は鉢次は施願手なり」とあり。

四面四臂左手蓮華軍持右手鉢並に施無畏印三白鵝に坐する像 其の圖、十卷抄及び阿婆縛抄等に出づ。

四面四臂左手蓮華軍持右手鉢並に施無畏印毘毘座に坐する像 其の圖高雄神護寺藏十二天屏風等にある。

第二十三節 地 天

地天 梵名は畢哩體毗曳 Pithivi 地神又は堅牢地神梵名吒婆羅耶駄里 Dharmadhatu) と稱す。大地の神なり。釋迦牟尼佛菩提樹下に成道の時、地より出現し、證明をなせりと傳へらる。胎藏界曼荼羅にては、外金剛部院の東方に居せり。形像に二三の異あり。

二臂寶瓶を捧ぐる像 釋尊降魔成道の時出現の像に、此の圖あり。アジャンタ窟寺の壁畫サルナート遺物の古彫刻等の古畫中に、既に其の例を見る可し。又大日經第一に依るに、持地神は瓶を奉じ、虔敬にして而も長跪すと云ひ、同疏第五

には、地神は當に寶瓶を捧持して、虔敬に長跪すべし。其の瓶の中には、種種の水陸の諸華を置く」と云ひ、尊勝佛頂修瑜伽法軌儀卷下には、地神阿修羅王は、手に寶瓶を把る。四侍者も亦是の如し」と云へり。覺禪鈔の中に、智泉師の圖として掲ぐる所のものは、二手にて瓶中に種種の華を挿したるを捧げ、而も雲中に住せり。

二臂寶華籠子を捧ぐる像 菩提場所説一字頂輪王經第二に、地天、身、白色にして、二手を以て寶華籠子籠字或は瓶に作るを捧げ、二膝にて地に跪ぐ」と云へる是れなり。

二臂寶槃を持する像 大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記品に、地天、寶槃を捧げて、胡跪瞻仰すとあり。

二臂左手鉢に花を盛れるを持し、毘毘座に坐する像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第八に依るに、現圖堅牢后の左に在り。右手は掌を仰ぎ前に向て指を垂れ、頭中名小指を屈し、大指は之を開き、掌を仰ぐ。左手は肘を開きて、掌指に馬腦の鉢の上に花を盛れるを持し、左を向く、或圖は鉢。山圖は左に鬘右には鉢の上に半三胎あり、左膝を竖てて坐すとあり。又堅牢地天儀軌には、男天は、肉色にして、左手には鉢に花を盛れるを持し、右手は掌を外に向く。女天は、白肉

色にして、右手は抱て心に當て、左も亦抱て股に當つ」と云へり。

二臂左手鉢に花を盛れるを持し、毘瑜座の上に立つ像。高雄神護寺藏十二天屏風に書かれたる圖像の如き是れなり。

二臂左手鉢に花を盛れるを持し、雲中に住する像。其の圖、十卷抄、覺禪鈔並に阿婆縛抄等に出づ。

四臂鎌鋤斧及び鍬を持する像。阿婆縛抄に、用心草に云はく、或圖に云はく、二手を心に當て、鉢に花を盛れるを捧ぐ。或圖に云はく、四臂なり、右の上手には鎌を持し、左手は斧を持し、右下手には鋤を持し、左下手は鍬を持す。天女形にして華鬘草履等ありて莊嚴すと云へり。覺禪鈔に其の圖を載す。圖の下、朱書を以て、私に云はく、辨財天の像に全く同じ云云、尋ね可し、説所大切なり」と註せり。

因に云ふ、胎藏界曼荼羅の中、堅牢神と並て堅牢后を出し、儀軌亦男女二天を明す。而して印度所傳の古圖は女神なれども、阿婆縛抄等に圖する所は男天の如し。之に就て阿婆縛抄には、帖に云はく、地天は是れ女天なり。而も后ありとは、是れ定惠の義なり(梵天の如し)。又云はく、或經に佛成道の時出現する地天は、二りの女天なり。之を尋ね可し、彼れ一に后と云ふか。后とは必ずしも夫あるに非ざるかと云へり。

第二十四節 日天

日天 梵名は阿儂底耶 *Aditya*。又蘇利耶 *Surya* と稱す。即ち日神なり。文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜經卷下に、日曜は大陽なり、胡の名は密、波斯の名は曜森勿、天竺の名は阿儂底耶なりと云へり。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の東方に居し、金剛界曼荼羅の中には、外院の南方に位せり。形像は、之に又種種あり。

二臂左右手に蓮華を持し、五馬車に乗る像。是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第八に、現圖、日天后の左に在り。兩手各嬪に向て蓮華を持し、小指を舒べ、車輅に乘し、五赤馬に駕し、天衣を被れり(或圖は七白馬、山圖は五白馬なり。膝前に一小天あり、兩手に各蓮華を執る、疑ふらくは摩利支歟)。現圖には之れ無し。此の圖は、其の隱形にして見えざるを以て、之を載せざる歟。然るに或七曜の別の

圖には、日月天の前に皆一小天あり。叡山の本は、月天には之れ無し、兩手は掌を豎て前に向て四指を屈し各開蓮を執り、天衣の端颺れり」と云へり。又尊勝佛頂瑜伽法軌儀卷下に「日天子並に后は、五馬車に乘じ、兩手に開蓮華を執り、圓輪に坐す」と云へり。

又青龍軌に依るに、左に日天衆を置く、八馬の車輅中に在り。二妃左右に在り、逝耶毗逝耶摩利支前に在り」と云ひ攝大軌第二、廣大軌卷中、及び大日經疏第五等の中に亦是の説あり。

二臂、右手日輪を持し左手腰に安じ五赤馬に乘る像 十卷抄、阿婆縛抄等に其の圖を出せり。

二臂、右手日輪を持し左手腰に安じ毘毘座に坐する像 高雄神護寺所藏の十二天屏風の中の日天像の如き是れなり。

二臂、胸に當て日輪を持し五馬車に乘る像 梵天火羅九曜軌に其の圖を出せるものは是れなり。

二臂、右手に日輪を持し荷葉座に坐する像 是れ金剛界曼荼羅外院の像なり。

金剛界七集卷下に「白肉色にして、左は拳にして腰に安じ、右には日輪を持す」とあり。又賢劫十六尊軌には「日天は童子形なり」と云へり。

第二十五節 月天

月天 梵名は戰捺羅 Candira. 又蘇摩 Soma と稱す。月神なり。文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜經卷下に依るに「月曜は大陰なり、胡の名は莫波斯の名は婁禍森勿、天竺の名は蘇摩なり」と云へり。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の西方に居し、金剛界曼荼羅中には、外院の南方に位せり。形像に數種あり。

二臂、右手に杖を持し三鵝に乘る像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。即ち諸説不同記第十に依るに「現圖鳩摩羅の左に在り。赤髮にして、右手は腰側に當て杖の上に半月あるを持す。左は掌を舒べて微しく中名小指を屈し、胸を掩ひ三鵝に乘る。袈裟の前端を肘に繫け、嬭下より垂る。或圖は、左手は掌を仰ぎ、左に向て指を垂れ、右手は腰に當て之を執る、而も左を向く。山圖は、左掌の半月の上に白兔あり。右手は掌を仰ぎ、左を向く」と云へり。阿婆縛抄に依るに「調定圖に云はく、

白肉色にして、左手は杖の上に仰月の形を安じたるを持し、三鷺に乗る文、裏書に云はく、或本には、右手に杖を持す、杖の上に半月の形あり、左手は指を屈して胸に當つ。或る十二天曼荼羅の中には、右手に杖を持し、杖の上に半月形あり、落行也、兎あり、右手は腰を押すとあり。

二臂左手月輪を持し三鵝に乗る像 十卷抄、阿婆縛抄等に其の圖を出せり。

二臂風幢上伏兎あるを持し五鵝車に乗る像 尊勝佛頂修瑜伽軌儀卷下に、月天子並に后は、五鵝車に乘じ、風幢の上に伏兎あるを持し、白月輪中に坐すとあり。

二臂月輪を持し、五鵝に乗る像 梵天火羅九曜軌の中に其の圖を出せり。

二臂右手半月形を持し荷葉座に坐する像 是れ金剛界曼荼羅外院の像なり。金剛界七集卷下に、白肉色にして、左は拳にして腰に安じ、右に半月形を持すと云へる是れなり。

二臂左手半月形を持し氍毹座に立つ像 高雄神護寺十二天屏風中の月天像の如き、左手は掌を揚げて上に半月形の上に伏兎あるを持し、右手、腰に安じ氍毹座上に立てり。

二臂右手蓮華を持する像 青龍軌に、月天、三昧手、或は空にて火の初節を捻し、應に白月の華中に在るを觀ずべし、白蓮華を持すと云ひ、廣大軌には、月天、三昧手、空風にて白蓮を持すと云へり。

二臂白鵝に乗る像 攝大軌に、月天、白鵝に乗すとあり。

十天十二天 前記帝釋等の八天に地天と梵天とを加へて十天と稱し、之に日天と月天とを加へて十二天と稱す。

二十天 是れ蓋し前の十二天に、六毘奈夜迦天、並に彗星及び童子天の二天を加へたるものに當る。是れ金剛界曼荼羅外金剛部院の外院諸天の總稱なり。之に亦多少の異説なきに非ずと雖も、若し祕藏記の説に依らば、北方に金剛面天又猪頭天と名づく、琰摩天、抱刀毗那夜迦、歡喜天、水天。東方に那羅延天、拘摩羅天子、傘蓋毗奈夜迦、梵天、帝釋。南方に日天、月天、華縵毗那夜迦、羅刹天、熒惑天。西方に太白天、風天、抱弓箭毗奈夜迦、火天、毗沙門天在りと爲せり。

第二十六節 迦樓羅天

迦樓羅天 梵名は迦樓羅 Garuda. 又譏嚙擊、揭路茶等に作り、項瘻、大嚙、項食、吐悲苦聲と譯す。一名は蘇鉢刺尼 Suparin. 金翅鳥と譯す。是れ鳥中の王にして、常に龍を取て食すと傳ふ。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の南方に位せり。形像は之に數種あり。

迦樓羅鳥 長阿含經第十九龍鳥品等に記されたる迦樓羅が龍を執へて噉食する傳説を示せるもの、其の最古の圖は、ブハルフォートの古彫刻中に其の作例を見る可く、健馱邏地方の遺物に亦優秀なる作品數箇あり。亦我が法隆寺玉蟲厨子臺座の須彌山古圖中に圖せられたるもの、亦甚だ珍とすべし。而して此等諸圖は、孰れも皆單純なる鳥形に畫かれたり。

二臂右手九頭龍左手三頭龍を持する像 金剛光焰止風雨陀羅尼經に、蠟を持ちて大身藥嚙茶王を摸捏す。結跏趺坐し、身量八指あり、兩翅にして股開き、首に華鬘を戴き、面は神面に狀、背は鷹背に狀たり。右手には九頭四足の蛇龍王を把り、左手には三頭四足の蛇龍王を執る。純金の莊嚴彩色間飾し、身の諸の衣服は、天の衣服の如しとある是れなり。其の圖覺禪鈔に出づ。

二臂口に三鈷杵を含み、二手蛇を把る像 阿婆縛抄に、一の繪圖の形あり、迦陵頻鳥の如くにして、背あり、横に三古杵を含み、左右に各蛇を執る、左右の足は各地を踏む云云道場觀集に之を出す。永嚴抄に云はく、是れ止風雨の時の様なりとあり。又覺禪鈔に依るに、惠什云はく、法成寺の寶藏に此有り。左右の手に龍を取るの像、又足下に龍を踏み、須彌山頂に在り、月輪に梵字を書き廻せるは、件の像は、翫然唐より渡す所なりと云へり。

二臂合掌像 覺禪鈔に、其の像金色にして、半身以下は金翅鳥に作し、翼を鼓して飛ぶが如く、山の頂上に立つ。半身は天人の形の如く、身亦金色にして、鳥背を作し、吠瑠璃色なり。二手は心に當て、十指相又す。頭冠瓔珞種種莊嚴す、面貌威怒、畏る可き狀を作すと云へり。其の圖覺禪鈔に出づ。

二臂筆筭或は横笛を持する像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の迦樓羅王なり。諸説不同記第九に、現圖、摩尼阿修羅衆左の内に在り。鳥頭人身にして、髮鬘翼有り。周身黄色或圖は肉色にして、二手にて筆筭を執りて吹き、面を左方に向く、山圖は横笛を吹き、荷葉に坐すとあり。

二臂螺を持する像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の迦樓羅女なり。諸説不同記第九に現圖摩尼阿修羅王の左外に在り、形像は前の如し、衣無く、兩手に螺を持して之を吹く。面を右方に向け、左脚右を押して交坐す(或圖は、肉色にして、右膝を立てて交坐す)と云へり。

四臂二手合掌二手與願印の像 十卷抄第九に、四臂、二手合掌、二手與願中略畫像法(迦樓羅諸天密言經の文なり)、迦樓羅の像を畫かば(中略)當に尊儀を作すべし。其の身分、臍より已上は、天王の形の如くす、唯鼻のみは鷹背の如くして而も綠色に作し、臍より已下は亦鷹の如くす。蓋髻寶冠あり、髮髻肩に披る、臂腕には皆寶環釧あり、天衣瓔珞あり。遍身金色にして、翅は鳥の如く而も兩ながら向て舒べ、其の尾は下に向て散ず。四臂あり、二の正手は大印を結す。兩手指頭相交へ左は右を押し、て虚心合掌し、印を以て心に當て、餘の二手は垂下して五指を舒べ、施願の勢をなす。其の臂脛及び爪、皆是れ綵金剛珍の所成、金山の上の一の金架あり、架上覆ふに錦衾を以てし、本尊は衾上に於て正立し、忿怒の形を作し、形、牙齒を露出す。傘蓋を以て之を覆ふ。首に圓光あり、而も寶冠を戴く等文とあり。此の二手合掌、二手施願の

像は十卷抄、覺禪鈔、阿婆縛抄等、俱に之を出せり。

千頭風天 覺禪鈔に、密言經に云はく、迦樓羅五大天觀門、凡そ風天を存念する者、其の尊相好、衆山の如く、而も青黑色にして、千頭を具足す。大猛健にして、二千目一千臂有り。衣は黃なり。凡そ坐する所の處は、皆野字の上に居す。大龍王を以て而も瓔珞となすとあり。其の圖、覺禪鈔に出でたり。

第二十七節 大黒天

大黒天 梵名は摩訶迦羅 *Maheśvara* 又大黒神とも云ふ。本と是れ三寶護持の神にして、印度を始めとし、佛寺の厨屋等に安ぜらる。後世福德の神として、俗家に於ても、亦之を祭祀するものあり。其の身、黑色なるが故に即ち其の稱あり。是れ世俗に所謂大黒天神なり。胎藏界曼荼羅の中には、伊舍那天の眷屬として、外金剛部院に在り。是れ大日如來、大自在天に勅して、荼吉尼を降伏する時の化身なりとし、又鬪戰の神なりと傳へらる。是に亦數像あり。

二臂金囊を持し、卑牀に坐する像 南海寄歸內法傳第一に、又復た西方諸大寺處、

成、食厨の柱側に於て、或は大庫の門前に在りて、木を雕して形を表すること、或は二尺三尺、神王の状と爲せり。坐して金囊を把り、却て小牀に踞し、一脚を地に垂る。毎に油を將て拭ひ、黑色を形と爲す。號して莫訶歌羅と曰ふ、即ち大黒神なり。古代相承して云はく、是れ大天の部屬性、三寶を愛し、五衆を護持し、損耗無からしむ、求者情に稱ふ。但し、食事に至れば、厨家毎に香火を薦め、所有飲食、隨て前に列すとあり。覺禪鈔に其の圖を載す。但し、是れ漢人の相の像なり。

二臂大袋を持する像 大黒天神法に、大黒天神とは、大自在天の變身なり。五天竺並に吾朝の諸伽藍等に皆安置する所なり。有人の云はく、大黒天神とは、堅牢地天の化身なり。伽藍に之を安じ、毎日炊ぐ所の飯の上分を供養す。此の天誓て夢中に語りたる詞の中に曰はく、若し吾を伽藍に安置し、日日敬て供せば、吾れ寺中に衆多の僧を住せしめ、必ず千人の衆を養はん。乃至人宅も亦爾なり。若し人三年專心に吾を供せば、吾必ず此に來りて、供人に世間の富貴乃至官位爵祿を授與し、應に惟れ悉く與ふべし。吾が體は五尺に作れ、若しは三尺、若しは二尺五寸なるも亦通じて之を免ることを得。膚色は悉く黑色に作し、頭には烏帽子を冠せしむ、悉く

黑色なり。袴を著せしめ、駟く寒げて垂れざらしめ、裙は短くして袖は細くす。右手は拳に作して右腰に收めしめ、左手には大袋を持たしめ、背より肩上に懸けしむ。其の袋の色は、鼠毛の色と爲し、其の垂下の程は臂上を餘さしむ。是の如く作り畢りて、大衆の食屋に居へて禮供せば、堂屋房舍必ず自然の榮あり、聚集湧出せんとあり。其の圖、又覺禪鈔に出でたり。

二臂鎗を持する像 金剛恐怖集會方廣軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經に、摩訶迦羅天(中略)大黒天なり。象皮を披横に一槍を把る。一頭は人頭を穿ち、一頭は羊を穿つと云へる是れなり。

六臂像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第八に、現圖毗那夜迦の左に在り、身青黑色にして火髮上に豎ち、極忿怒の形なり。三面三目あり、口を開きて二牙上出す。六臂あり、髑髏を以て冠瓔珞と爲し、蛇を以て鬘と爲し、耳環臂釧あり。右手は垂下して内に向て劍を執りて横へて膝上に在り、次手は人髪を執りて其の裸合掌して長跪し、次手は臂を舉げて前に向て象皮を持し、左手は垂下して前に向て劍端を執り、次手は羊角を執りて提持し、次手は象皮を舉持す。臍に

於て人頭あり、上に向く(或圖は前に當て兩手に三胎戟を持ち、口を開き、四牙俱に出づ)と云へり。大黒天神法にも亦青色にして三面六臂あり、前の左右の手は横に劍を執り、左の次手は人頭を執り、髻を取りて提ぐるなり、右の次手は羊牝を執り、次に左右は象皮を背後に張る(中略)大黒天神は鬪戰の神なりとあり。理趣經十八會曼荼羅の中、第十四七母女天理趣會曼荼羅中尊の像亦之に同じ。

三面六臂像 又三面大黒と稱す。是れ大黒、毘沙門、辯才の三尊合一の身と習ひ傳へらるるもの、正面は大黒天面、頭巾を被り、右面は毘沙門面、左面は辯才天面にして、左第一手は袋、右第一手は鎚を持ち、左第二手に寶珠、次手に鎗を持ち、右第二手に寶棒、次手に三戟を持す。此の尊、傳教大師叡山建立の時、三千の衆徒の爲めに出現する所なりと傳ふるも、固より詳かならず。其の圖、佛像圖彙第三に出づ。

六大黒 佛像圖彙第三に六種の大黒天を載す。所謂比丘大黒、摩伽迦羅大黒女、王子迦羅大黒、信陀大黒、夜又大黒、摩伽羅大黒なり。

比丘大黒 比丘形、袈裟を着け、左手に劍、右手に鎚を持ち、毘毘座上に立つ。

摩伽迦羅大黒女 童女形、二手頭上に當て俵を差し上げ、毘毘座上に立つ。

王子迦羅大黒 衣冠を着け、左手に金剛杵、右手に劍を持ち、毘毘座上に立つ。

信陀大黒 童子形、右手は拳、左手に寶を持ち、毘毘座上に立つ。

夜又大黒 衣冠を着け、左手は拳、右手に輪を持ち、毘毘座上に立つ。

摩伽羅大黒 頭巾を被り、背に大囊を負ひ、左手囊端を持ち、右手には鎚を持ち、荷葉座上に立つ。世に流布の形像としては、其の像今の如くにして、而も米俵の上に坐し、或は立てるものあり。但し是等六大黒等の説は、經軌に本説あるには非ず。即ち後世俗傳のもの、と知るべし。

第二十八節 大自在天

大自在天 梵名は摩醯首羅 Mahesvara. 或は商羯羅 Śaṅkara 天と名づく。嚕捺羅 Rudra 天は、即ち其の忿怒身なりと云ふ。胎藏界曼荼羅の中には、外金剛部院の西方に居せり。形像は、之に二臂像、四臂像、八臂像等あり。

八臂像 大智度論第二に、摩醯首羅天、秦に大自在と言ふの如き、八臂三眼にして、白牛に騎ると云へり。理性院次第の説に依るに、身白肉色にして、花冠を着け、三目

八臂あり、左第一手は拳にして腰に安じ、上手は三戟又、次手は輪、下手は棒を持し、右第一手は幢を持し、上手は鉞斧、次手は寶螺、下手は刀を持し、白牛に乗り、右足(左足)を下すと云ふ。十卷抄に其の圖を載す。覺禪鈔に出す所のものは、今と略ぼ同じきも、其の左第一手に獨胎戟を持せり。

二臂像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第十に、現圖、羅刹眷屬の左外に在り。身赤黒色にして、右手は肘を開堅して掌を堅て、中無名小指を屈し、左手は拳に作して三胎戟を執り、右に向く。青黒の水牛に乗り、左脚を垂る(山圖は赤色にして、右は掌を堅てて中指を屈し、涅槃帝王の左に在り)と云へる是なり。三面四臂像 覺禪鈔に引く所の迦樓羅密言經に、惹野天王は、即ち大自在天王なり。通身青色にして、三面あり、正面は天王の形の如く、右邊の頭は夜叉形の如く、而も忿怒の相を見じ、牙齒を露出す。左邊の頭は天女形に作し、美貌紅白なり。三面皆天眼を具す。蠡髻寶冠あり、首に圓光あり、而も赤色に作す。四臂あり、左上の手に三股叉を持し、下掌に金若しは瓶を持し、右上の手に花を持し、本尊を供養し、下に數珠を持し、心に當て、嚴るに天衣瓔珞を以てし、嚴然として、而も立つ云云とあり。

唐本六臂像 一面六臂、頂髻上に向き、左右第一手は心に當て印を結し、左第二手に刀、次手は鍵を持し、右第二手は鈴、次手は鍵を持す。其の圖、別尊雜記に出づ。

十八臂像 速疾立驗魔醜首羅天阿尾奢法に、魔醜首羅天、三目あり、頭冠瓔珞莊嚴す、頭冠の上に仰半月あり、頂上に在り、十八臂あり、手に種種の器械を持し、龍を以て神線となし、角絡して繋くとあり。

第二十九節 那羅延天

那羅延天 梵名那羅延那 *Narayana*、人生本と譯す。是れ毗紐 *Vishnu* 天の別名とも云ふ。胎藏界曼荼羅の中、外金剛部院の西方に居し、又金剛界曼荼羅の外院に在り。形像は、之に二臂像、八臂像等の別あり。

二臂輪を持し、荷葉座に坐する像 是れ金剛界曼荼羅外院の像なり。金剛界七集卷下に、青黒色にして、左は拳にして腰に安じ、右は輪を持して胸に當つとあり。

三面二臂迦婁羅に乗る像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第十に、現圖、水天妃眷屬の左に在り。周身青色にして、赤髮あり。三面あり、正面

は三目、兩邊の面は獸形、其の左方は猪頭に似て青色なり。右方は未だ詳かならず、白色なり。迦樓羅經に云はく、毗紐天、通身赤色、而も三首あり、正面は天王形を作し、右は師子を現ず、左は猪頭の如し、朱を以て而も裏に書す。或圖は兩邊の面無く、冠に繪を繋ぎ端飛上す。右手は肘を開きて掌を豎て、中名小指を屈し、頭指を舒べて輪を腰に承け、左は拳にして腰に又し、迦婁羅鳥に乘し、右脚を垂る。其の鳥翼を張り、右を顧る(或圖は二目にして兩邊の面無く、山圖は肉色、餘は現圖の如し)と云へり。但し、十卷抄、覺禪鈔等に載する所の圖像は、右面は象頭にして、左手に蛇を持すると、今説と少異あり。

四臂像 大智度論第二に「韋紐天(秦に遍問と言ふ)の如きは、四臂にして貝を捉り輪を持して金翅鳥に騎るとあり。」

三面八臂像 其の像、三面俱に天王相にして、右第一手は頭中無名指を屈して心に當て、次上手は輪を持し、次手は掌を揚げて頭中無名指を屈し、次手は申べて施無畏手の如くし、左第一手は拳にして腰に安じ、次上手は弓、次手は篋、次手は隨圓輪形中に人形あるを執り、迦樓羅に乗ず。其の圖、覺禪鈔に出づ。

第三十節 鳩摩羅天

鳩摩羅天 梵名は鳩摩羅 Kumāra. 童子と譯す。又塞建陀 Kunda 天とも云ふ。大自在天の子なりとも傳へらる。之に一面二臂像、六面二臂像等の別あり。

一面二臂像 持し、荷葉座に坐する像 是れ金剛界曼荼羅外院の像なり。金剛界七集卷下に「青綠色にして、左は拳にして腰に安じ、右は鈴鐸」と云へる是れなり。

六面二臂三古鈎を持し孔雀に乗る像 是れ胎藏界曼荼羅外金剛部院の像なり。諸説不同記第十に「現圖、辯才の左に在り。童子形、黄色にして六面あり。右手は嬪に當てて三胎鈎を持し、左手は掌を仰ぎて臍上に當て鈎柄を承け、孔雀に乘り、右脚を垂る。其の鳥翼を張りて左を向く(或圖は足下に眠華坐あり、或圖は、右手は拳を豎てて杖を持し、杖上に満月あり。左手は肘を開き、掌を仰ぎ指を垂れて右に向く。山圖は、白色にして、右は三胎戟、左手は掌を仰ぎて右を向く)とあり。又覺禪鈔に依るに、智泉師の圖は、一面像形なり、餘は之に同じとあり。」

六面二臂像 持し孔雀に乗る像 其の像、左手は掌を仰ぎて心に當て、右手は外

に申べ鈴を把る。其の圖載せて十卷抄にあり。

一面四臂雞鈴赤幡等を持する像 大智度論第二に鳩摩羅天(秦に童子と言ふ)の如き、是の天、鶏を撃げ、鈴を持し、赤幡を捉りて孔雀に乗ると云へり。

第三十一節 伎藝天女

伎藝天女 大自在天の髮際より生じ、顔容端正、伎藝第一なりと傳へらる。摩醯首羅大自在天王神通化生、伎藝天女念誦法に、先づ摩醯首羅天王を畫く、三面六臂にして、顔貌奇特、端正にして畏る可し。其の髮際より一天女を化生す、殊妙にして喜ぶ可し、天上人間能く勝るる者無し、天の衣服を著け、瓔珞身を嚴り、兩手の腕上に各銀釧あり。左手は上に向て一天華を捧げ、右手は下に向て裙を捻するの勢をなす。身形、長三尺なるべし。或は大小に隨て取に任て稱量せよとあり。但し大和秋篠寺に安置せらるる伎藝天像は、今説とは相同じからざる所なり。

第三十二節 深沙大將

深沙大將 又深沙神、深沙大聖、深沙菩薩と稱す。玄奘渡天の際に感得する所なりと傳へ、其の身、或は多聞天の化身なりと云ひ、或は觀音の化身なりと云ひ、或は太山府君なりと云ひ、或は央掘魔羅、或は伎藝天なりとも云へり。形像は、鬼形の二臂像なれども、之に亦數説あり。

二臂左手に蛇を持する像 十卷抄に、形像に二様あり、一には唐本、左手に青蛇を把り、右手は臂を屈して右の乳前に於て掌を揚ぐ。此の本は昔より流布する所なり。下醍醐深沙堂の等身像是れなり。賀茂上社東山南面に等身の像あり。人傳に云はく、此の像、往古靈驗、揭焉たり。慈覺大師入唐の前、此の神像に祈念す云云。近代、唐病を惱む人、此の像に祈りて平愈す云云。元と是れ、瘞像にして形貌生るが如くにして、神妙異特なり。而も小堂破壊し、雨露の爲めに濕損す。知足院の僧に里人願聖と號づくるあり、件の僧泥を以て修理を加へ、腰帶等を塗り損じ、面貌損失す云云とあり。十卷抄及び阿婆縛抄に掲ぐるもの、即ち其の像なり。

二臂鉢を捧ぐる像 十卷抄に、一本に二手合して鉢を捧ぐ、鉢に白飯を盛る。般若十六善神の中に之を畫くとある是れなり。

二臂鉞を持する像 十卷抄に一本の儀軌を勘ふるに大忿怒形にして頭に八蛇あり、二手合して鉞を捧ぐと云へり。前の像は此の軌の文に依る歟。或本には、捧或鉞云云、鉞鉞の二字相涉りて是非を知らず。但し慈恩傳等に三藏流沙に於て一大神を見る、手に戟を取る云云、之を推するに鉞好しき歟とあり。覺禪鈔に、二手獨胎鉞を捧げて盤石上に立てる像、一圖を載せり。

二臂右手に三鈷戟を持する像 其の像頭に七鬘體を懸け、左手は掌を舒べ、右手は三鈷戟を持せるもの、覺禪鈔に「又像、右は古本を以て之を圖す、若しは是れ小粟栖請來歟」と云ひ即ち其の圖を出せり。

第三十三節 僧慎爾耶藥又大將

僧慎爾耶藥又大將 梵名僧慎爾耶 *Saṃghinīyāya* 正了知と譯す。護法善神なり。金光明最勝王經第八僧慎爾耶藥又大將品に、僧慎爾耶藥又の形像は、高さ四五尺にして、手に鉞鐮を執ると云へり。十卷抄に、尊形像、右手は鉞を持し、左手は寶珠を持す。元興寺本は左手は腰に於て掌を舉ぐと云ひ、左手は胸に當て三瓣寶を持し、右

手に三鈷戟を持する像、一圖を出せり。

第三十四節 金剛力士

金剛力士 梵名は跋闍羅波膩 *Vajrapāṇi* 金剛手又は執金剛と譯し、又密迹力士、密迹金剛力士、密迹執金剛と云へり。手に金剛杵 *Vajra* を執るを以て、即ち其の稱あり。其の形像は、大概一定にして差したる異像あるを見ず。其中、

佛侍衛像 は、ブヘルフォートの古雕刻に見ゆる伊羅葉龍王禮佛圖中のものを最古の圖像とし、健駄邏地方の遺品なる佛傳圖中に、數多の作例を見る可し。

寺門安置の像 是は二尊相向て安置す。或は相向守護と名づけ、俗に呼て二王と稱す。根本説一切有部毗奈耶雜事第十七に、門の兩頬に於て、應に執杖藥又を作すべしとあるに依れば、其の風既に遠く印度に於て行はれたるを察す可し。古來護法善神として各寺の寺門に大抵之を安置するが故に、支那、日本の作物にして、其の遺品の現存するもの、實に枚擧に遑まあらず。

佛像の研究索引

索引

[ア]

愛敬虚空藏	213.
愛金剛	200.
愛染王	265.
愛染曼荼羅	87.
愛染明王	38.56.265.
阿逸多(Ajita)	205.
愛菩薩	269.
阿迦舍藥婆(Ākāśagarbha)	210.
阿疑尼(Agni)	313.
惡乞菟毗也(Akṣobhya)	130.
惡乞菟毘也薩他多藥多(Akṣobhya-tathāgata)	106.
阿閼佛	28.106.131.
阿遮羅囊鞞(Acalanātha)	233.
阿濕縛婁沙(Aśvaghoṣa)	232.
阿修羅身	149.
阿吒婆拘(Āṭavaka)	272.
阿彌底耶(Āditya)	335.
阿耨達菩薩	238.
阿波囉爾多(Aparājita)	262.
阿縛盧枳低濕伐羅(Avalokiteśvara)	135.
阿麼來(Abhati)	190.
阿麼鉢觀音	53.139.
阿彌陀(Amitābha)	119.
阿彌陀三尊	128.
阿彌陀の五佛	128.
阿彌陀の定印	123.
阿彌陀佛	12.29.46.119.131.
阿彌陀曼荼羅	63.
安慰の印	127.

安鎮曼荼羅	87.
阿母伽跋舍(Amoghapāśa)	178.
阿目伽悉第(Amogha-sidhi)	130.

[イ]

伊舍那(Īśāna)	328.
伊舍那天	43.59.328.
一字文殊菩薩	35.53.193.
一字金輪佛頂	29.43.66.67.
一字最勝佛頂	67.
一切佛頂輪王	72.
衣服天	290.
印契	14.
因陀羅(Indra)	310.
因曼荼羅	63.

[ウ]

烏俱婆誑童子	239.
烏樞沙摩(Ucchuṣman)	255.
烏樞沙摩明王	39.56.255.
鬱單越洲圖	25.
優婆夷身	147.
優婆塞身	147.

[エ]

噫迦鄰舍目佉(Ekādaśamukha)	160.
悲喜菩薩	238.
慧光童子	238.
穢跡金剛	255.
焰摩(Yamarāja)	316.
焰摩后	318.
焰摩天	42.60.316.